

射手の青年、鳥の娘

はたけのなすび

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

根源の姫の気まぐれが、鳥の娘を招いた。

※完結しました。

目次

A c t 1 2	A c t 1 1	A c t 1 0	A c t 9	A c t 8	A c t 7	A c t 6	A c t 5	A c t 4	A c t 3	A c t 2	A c t 1
161	148	135	120	103	89	74	61	50	36	19	1

A c t f i n a l	A c t 2 2	A c t 2 1	A c t 2 0	A c t 1 9	A c t 1 8	A c t 1 7	A c t 1 6	A c t 1 5	202	A c t i n t h e p a s t	A c t 1 4	A c t 1 3
333	313	299	285	271	258	244	230	217			188	174

A c t — 1

気の遠くなるほど、遠い時代のことだ。

今生きる人々の曾祖父が生まれるよりも、遙かに遙かに昔のこと。

世には神秘が満ち満ち、人と精霊は交わり、神は地上に降りては奇跡を体現し、人は神や精霊を敬い讃えていたと言う。

「今もヒトビトは神をたたえ、祈りをささげている。それとはどちらがうの？」

そこは雲付く霊山の中程。

断崖絶壁に穿たれた洞窟の入り口に座るのは、まだ幼い女の子もだった。

新雪のような真つ白い髪と夜空のような黒い瞳をし、体格は痩せて小柄。動物の革を縫い合わせて作った服を纏い、腰には剣を佩いている。その歳の子どもには似つかわしく無い格好だった。

「祈る心に変わりはないさ。ただ、人と神の距離が遠くなったって言うだけだ。昔、神はもっと近しく人に語りかけることもあったそうだ」

子どもの隣に座るのは、体格の良い褐色の肌の青年。よく日に焼け、髪と同じ色の黒い瞳は生気に溢れている。

青年は快活に言い、子どもはへえと鼻を鳴らして肩をすくめた。

「じゃあ、わたしたちみたいな存在は、もっとたくさんいたの?」

「いたんだろうさ。だが時代は移つて、神は人から離れた。神なき世は剥き出しの自由を得、引き換えに個体としての人は弱くなつたのさ」

難しいか、と青年が問い、子どもは首を振つた。

「それくらいわかるよ、兄さん」

「そうか。■■■■は頭が良いな」

「兄さんがよくきて、お話してくれるから。なんども聞いたらすすがにおぼえる」

白髪の子どもに、青年は柔らかい微笑みを向けた。

子どもは青年を兄と呼ぶが、実のところ彼らが出会つた期間は一年にも満たない。

十ヶ月ほど前のことだ。

ペルシャを見下ろす霊山エルブルズに白髪の鬼が出るといふ噂が立つた。だが真実を確かめに向かつた青年が出会つたのは、白髪の子どもただ一人だけだった。

子どもは人の言葉は話すことができた。できたが人としての名前を持たず、自分を産んだ親の顔を知らなかつた。

子どもの育ての親は、靈峰に住まう聖なる鳥、スィームルグだった。それは羽に癒しの力を持ち、犬の上半身と孔雀の下半身を持つこの世ならざる幻の如き生き物である。十歳になるやならずの子どもが、何故このような場所に住んでいるのか。想像だに難くなかった。

生まれてすぐに、捨てられたのだ。

不吉の証と言われる、新雪のような白髪。それを持つていたがためだろう、と青年は推測した。

しかし、白髪であろうがなろうが捨てられる子も売られる子も大勢いる。だが、いくら何でも山に捨てられ霊鳥に育てられて生き延びた子は聞いたことがなかった。

すぐに、理由は知れた。

熟練の狩人すら目眩を感じるような絶壁を臆せず駆け回り、大鷹に爪で襲われても顔色一つ変えず追い払って見せたのだ。

神代に生きた人々、英雄と呼ばれる彼らと同じ、天性の肉体を子どもは持っていた。
——青年と同じように。

不吉な白髪を持たず女で無かったのなら、きつと子どもは人々にも受け入れられていたのだろう。
——自分のように。

山々の間から吹き抜ける風に白髪を遊ばせ、子どもは鳥と語らう。青年が来るたび、

面白い話を聞かせて、と懐いてくる。

名無しじや問題だろう、と名を付ければ、子どもは春告げる小鳥の唄のように何度も名を繰り返して呟いた。

人の家族の形とその在り方を教えれば、子どもは青年を兄と呼ぶようになった。鳥の兄さん、人の兄さん、と呼び分けている横顔はあまりに幼かった。

急に子どもは顔を上げ、手を目の上にかざして空を見た。

「兄さん、もうかえったほうが良い。空がある」

「空？」

空を見上げる。青空には雲一つなく、青年の優れた感覚にも空が曇るような予兆は感じ取れない。

それでも彼女は天気が崩れると言い張った。

「まぢまではとおいから、雲においつかれる」

だから早く、と舌足らずにも繰り返した。

子どもは決して、青年と一緒に山を下りようとはしない。彼女にとっての家はこのエルブルズの山であって、人里ではないのだ。

それでもは別れる時にはいつも、また来てね、と言うのだ。だから青年もつい来てしまふ。

だが、これからそれは難しくなるだろう。もう何十年も続いている、隣国トウグルクとの戦が始まるからだ。今は嵐の前の静けさが、ほんの少しだけ続いているだけ。神代の英雄と同じ質の肉体を持ち、優れた弓兵である青年は戦いに赴く。その間は、この山に來られそうもなかった。しばらく來られなくなる、と告げれば子どもは目に見えて肩を落とした。

思いついて、青年は言った。

「■■■■、しばらく山の低いところには行くな」

「どうして?」

「戦があるのさ」

「くくく」

「ああ。戦となればいくらお前でも危ない。いいから行くな」

子どもはただきよんとんと首を傾げる。澄んだ黒い瞳が、それは何、と言っていた。

説明しようとして、止した。引き換えに、青年は言葉を押し出した。

「じゃあな、アフタル。また来るぜ」

青年はただそう言って、別れた。

#####

「全知万能と全知無能の違い、分かるかしら？」

そこは陽のあたる部屋だった。

背の高い猫足の椅子に腰掛け、両手で白い陶器のカップを持つのは、金に近い色素の薄い髪と澄んだ碧眼をしたまだ幼い少女。

春に唄う小鳥のように軽やかに問いを投げたのも、この少女だった。

「……全知万能は何でも知っていて何でもする、全知無能は何でも知っていて何もしない。違う？」

問いを受けたのは幼い少女の向かいにテーブルを挟んで座る人間。こちらも少女

だった。

新雪のような白い髪に、黒曜石のような真つ黒な瞳を持ち、手を軽く握って両膝の上に置いている。

「そう。で、わたしがどちらかと言うと全知無能の方。いえ、わたしに限らず根源に繋がっている者は大体そうなのかしら」

「……」

軽く白髪の少女が首を上下させる。話の続きを促しているのだ。

「何でも知っていて何でも出来るっていうのは、つまらないのよ。ほんとにつまらない。だって、結果が分かっているなら試す意味もないでしょう。そういうことばかりだと、そのうち何かをしようっていう気すらなくなるの」

「だから、全知無能だと？ 私からはマスターはそんな退屈で死にそうな性格には見えな
いけれど」

「あ、そのマスターって呼び方もつまらないから禁止ね。愛歌って呼んでちょうだい」
幼い主、愛歌に言われ白髪の少女は仕方なさそうに頷いた。

「了解した、愛歌。……けれどそもそも、私たちは何の話をしているのか？」

「決まっているじゃない。聖杯戦争の話よ。どうやって戦うのかってお話」

紅茶の入ったカップを置いて、愛歌は人差し指を立てた。白いレースの飾りのついた

袖が、さらさらと揺れた。

「性能だけで言うと、あなたのクラスはセイバー。第一位のサーヴァントで、出身は古代のペルシア。出典は神話と民話がいろいろ混ざっているみたいね。そして聖杯への願いは……何だったかしら？」

教えてみようだ、と愛歌はにっこり笑った。

セイバーという仮の名を与えられている白髪の少女は、笑わずに言う。彼女にとっては大切な願いを真面目に告げた。

「私の願いは、もう一度だけ兄に会うこと」

「そう、そうだったわね」

くすくす、と愛歌は空になったカップに紅茶を注ぎながら笑い、セイバーはむ、と口を尖らせた。

「まあ、それはいいの。わたしには特に願いはないから、結構気楽なのよ。この戦い」

「ああ。聖杯戦争の勝者は根源に至ることができから、魔術師たちは聖杯戦争に参加するのだっけ」

「そうそう。でも、わたしはほら、そんな所とは生まれたときから繋がっているから。全然意味がないのよ。この闘争もね、暇つぶしみたいなものなの。強いて言うならそうね、神話とかおとぎ話の人々に直に会ってみたい、くらいかしら」

愛歌はそこでとても上品な仕草でカップから紅茶を一口啜った。

「だからセイバーはわたしから好きだから魔力を持つて行つてくれて構わないの、代わりにわたしを楽しませてくれれば」

「……」

愛歌は約束をするときにように、手を差し出す。セイバーは今度こそ困つたように首を傾けた。

ふと、愛らしく可憐な主の横顔に遠い昔に、誰かから教えてもらった悪魔の話が重なつた。甘やかな言葉で人をたぶらかし、願いを叶え、引き換えに代償を要求する魔物の話だ。古の王の中には、悪魔に誑かされて蛇王となり果て千年の長きにわたつて地上を絶望で覆つた者もいるという。

それでもセイバーには、可愛らしい悪魔の手を取つても叶えたい願いがあつた。だから、どこか諦めを含んだ笑みを浮かべ、セイバーは小さく白い手を取つた。

「よろしく、愛歌。ここに正式に契約を結ぼう、私の主」

「うん。よろしく、セイバー。わたしを楽しませてちょうだいね」

沙条愛歌はますます微笑みを深くし、それに合わせて彼女の胸元が光つた。

碧のドレスに隠された愛歌のドレスの下に刻まれているのは、マスター階梯第一位を示す熾天使の翼を模した令呪だ。令呪の輝きが、愛歌の何の曇りもない笑顔を照らす。

一九九一年、日本の中心、東京で行われた聖杯戦争、剣の主従が契約を交わした日のことだった。

#####

肌寒い日の朝のことだ。

日本は東京、閑静な住宅街に一軒の家がある。西洋風の大きな屋敷を構え、広い敷地には温室を備えている。

尤も、その温室は沙条の家の者にはガーデンと呼ばれていた。

朝日を浴びて光を照り返すガーデンは、今日も静かに佇んでいる。しかし沈黙を破つていき、と音がし、屋敷の扉が開いた。

顔を出したのは幼い少女だった。黒い髪を切りそろえた、青い瞳の幼い子。寒そうに両手をきゅつと握りしめながら、子どもは屋敷と繋がる渡り廊下を通り、ガーデンへと入った。

子どもの名は、沙条綾香。

魔術を今に伝える沙条家に生まれた、二人目の子。だから今日も、綾香は魔術の修行をしなければならない。

硝子の扉を開けて、綾香は温室に静かに滑り込む。

いつもならそこには師である父が、静かに佇んでいる。なのに、今日はいつもと様子が違っていた。

ほっそりとした体格の、綾香の父とは似ても似つかない人間が朝日に白い髪をきらめかせて立っていたのだ。人影は向こうを向いていて、綾香には背中しか見えない。白い鳩を肩や頭の上に止まらせながら、さらに腕に止まった鳩の頭を指でゆつくり撫でている。

思わず後ずさった綾香の足は、足元にあった如雨露に当たってしまった。

軽い音がして、その人物は綾香の方を見た。黒い瞳が、綾香を捉える。

「……あなたはもしかして、綾香という子？」

振り返った人影は、綾香の姉、愛歌よりはいくつか年上に見える少女だった。

目は切れ長で鼻筋は高い。陶器のような肌理細かい肌と真っ白い髪の毛のせいか、全体に人形のような雰囲気か漂っていた。

咄嗟に答えられない綾香を、少女は鳩を周りに止まらせたままに見下ろす。

「……もしかしてここ。入ってはいけない処だった？だとしたらごめんよ」

しばらくして白髪の少女は言い、頭を下げる。その弾みに、それまで少女の頭や肩に乗っていた鳩が一斉に飛び立つ。

あ、と少女は残念そうに飛んで行く鳩たちを見送った。人形のようなだった印象にひびがはいるほど、その声は如何にも抜けていて、綾香はそれで何となく思った。

この人、悪い人じゃなさそう、と。

「ここ、ガーデンなの。わたしが勉強するための場所」

「お勉強？」

「うん。お父さんとお勉強なの……。お姉さんは、お父さんの知り合いの人？」

ふむ、と少女は顎に手を当てた。

「知り合いと言え、そう。でもどちらかと言え、あなたのお姉さんの知り合い」

「愛歌お姉ちゃんのこと？」

言われ、綾香は改めて白髪の少女の全身を見た。

おばあさんのような真っ白い髪をしているけれど、瞳は真っ黒で背は高い。白いシャツと細身の黒いパンツを合わせている飾り気のない格好をしていて、それがよく似合っていた。

何かもつと聞かなきや、と綾香が思う前に、別の声がした。

「綾香」

低い男の人、つまりは父の声だった。呼ばれ、綾香は振り返る。見ればガーデンの扉を開けて父が入ってきたところだった。

静かで穏やかな、いつものお父さん。魔術を教えてください『師』の顔をしていた。

「綾香、今日は早かったな。さあ、準備をしなさい」

「う、うん」

目の前の少女に話しかけようとして、そこで綾香は固まった。

白い髪の少女がいたはずの場所には、何もなかったのだ。白い鳩たちが数羽いるきりで、そこには誰もいない。

煙にでもなつてしまったかのように、少女は消えていた。

「お、お父さん。今、そこに……」

綾香がたどたどしく説明するにしたがつて、穏やかだった父の顔が少しずつしかめら

れた。

「……安心しなさい、綾香。その少女は敵ではないよ」

「ほんとう?」

「ああ。彼女の名前はセイバー。例の儀式のために愛歌が昨日喚び出した者だ。——

——聖杯戦争のための、客と言つていいだろう」

だから大丈夫、と父は綾香に言つた。そんなことより魔術の準備を始めなさい、と笑わずに続けた。

何となく釈然としないまま綾香は準備を始める。しかし、セイバーに気を取られたせいでだろう。その日はあまり、綾香の魔術は上手く行かなかつた。

「可愛い妹がいるんだね、マスターには」

沙条の本邸の台所、エプロンをつけて広い台所を右に左に飛び回っている愛歌の背

に、セイバーは話しかける。

「妹……ああ、綾香のことね。セイバー、もうあの子に会ったの？」

「まあね」

「ふうん。あなたも妹だったから、よく分かるのかしら」

何で知っている、と言いたげにセイバーは鼻を鳴らした。

自分のマスターが根源に接続している規格外の存在で、こともあろうに聖杯戦争に暇つぶしのためだけに参加していると聞かされて、セイバーは最初単純に驚き、それからはそのようなものかと受け入れていた。

七人七騎の殺し合いに鼻歌交じりに子供が参加するのを見て、思うところがないのではないのだが、このマスターから漂う全能感は強烈で、多分本気になれば自分より強いのかもかもしれないと、セイバーは思っていた。要は、心配するだけ無用な感じがするのだ。現に愛歌は今のよう、此方が話していない過去をさらりと言いのけたりする。それも極めて楽しげに。

根源接続者ともなれば、千里眼の類でも持つていておかしくないのだが、話していない過去を知られているのは妙な気分になる。

愛歌は面倒なマスターであるとは思。が、召喚してくれた恩はある。『楽しませろ』などという無茶な指令を言い渡すようなマスターだが、いざとなったら自分の仮初の第

二の命を使ってくれてもいいと考える程度には、セイバーは愛歌に剣を捧げていた。

第二の命をくれたのだから、何かあつたらそれを差し出すくらいでないと釣り合わない、というのがセイバーの理屈だった。

自分の願いも大切だが、彼女の中ではマスターの方が上位に位置していた。

一番良いのは愛歌も自分も生き残ることだが、仮にも戦争と銘打たれた闘争だ。何かあるのか分らないから、優先順位は先に付けておくべきだった。

「それで、セイバー。どのサーヴァントから倒すつもりなのか、何か考えてる？」

卵を焼きながら聞く愛歌の背中を見ながら、セイバーは正直に答えた。

「ん、まあ、アサシンかと。正面きつての戦闘なら私は多分負けないけど、愛歌や綾香や、きみたちの父上を狙われたらことだから。搦手のマスター殺しがアサシン運用の基本だろうし」

肩を竦めて言うセイバーを振り返って、愛歌は年相応の少女のように頬を膨らませた。

「多分、って。そんな弱気じゃ困るわ。セイバーって言ったら、最優のクラスじゃない。ランサーにもライダーにも、それからアーチャーにも絶対に負けちゃだめよ」

「……それは愛歌が、楽しめないから？」

「そう。わたしが楽しめないから。あっさり負けたりしないでね」

本当にイイ性格してるこのマスター、とセイバーは内心呟き、近づいてくる気配を感じて霊体となった。

セイバーの輪郭が揺らめいて、窓から差し込む光の中に溶けると同時、扉が開いて綾香が顔を出した。

「あら、おはよう、綾香」

「……おはよう、お姉ちゃん。あのね……今誰かとおしやべりしてた？」

声が聞かれていたか、とセイバーはその様子を見守りながら思った。

愛歌は笑顔でしやがみ、綾香と目線の高さを合わせ、うん、と頷いた。

「ええ。セイバーっていう面白いお友達が来てたの。でも恥ずかしがりやだから、隠れちゃったみたいね」

誰が恥ずかしがりやだ誰が、とセイバーは念話で叫び、当然のように愛歌に無視された。

「さ、セイバーは放つて置いて朝ごはんの準備終わらせてしましましょう。手伝ってくれる？綾香？お父さんも呼ばないといけないしね」

「うん！」

恥ずかしがりの面白い友達扱いされたセイバーは、霊体のまま見えないため息をつき、そのまま部屋の隅に引つ込む。

朝日に照らされた部屋で、くるくると立ち回る姉妹を少し羨ましいなと思いつつ、
劍の英霊はくああ、と猫のように欠伸をこぼした。そして、普通の姉妹のように笑い合
う彼女らを見守ることにしたのだった。

A c t — 2

沙条愛歌がそのサーヴァントを呼び出したのは、幾つかの偶然が重なった結果だった。

愛歌は根源に繋がって生まれた。

つまり、この世のあらゆる物事を知ることができる。その気になりさえすれば世界の法則すら書き換えることも可能だった。

必然的に、愛歌の精神の形は普通の人間とは異なるものになった。

普通の人にはないはずのものがあるのだから、当たり前だった。

何でもできるし、何でも見ることができ。神にもなれるだろうがなつたところで意味がなくなつてしまふから、愛歌はゆっくり時を殺して生きていた。

人の世に混じって暮らすために未来を見る眼だけは閉じようかと思つた。そんな枷だけでは愛歌は何も変わらないが、それすらしなければ無気力が過ぎて死んでしまいうだったからだ。

でもある日、何となく思いついたのだ。

並の人間のように、夢を見てみよう、と。

眠りは本来なら必要のないものだけれど、ただ気分です。未来を見る目を閉じる前に、一度だけやってみよう、と。

だから愛歌は意識を身体から切り返し、夢の海へと彷徨させた。

世界の裏側をくぐり抜け、幾つかの世界を辿り、そうして辿り着いた先はある一つの巨大な迷宮だった。並行世界のどこかに作られた、歪な迷宮。そこでは、亜種の聖杯戦争とやらが行われていた。

根源と繋がった身体から離れたせいか、それとも愛歌が無意識に弱い自分というものを味わってみたいとでも思ったからか、そこでは愛歌は極めて弱くなっていた。

具体的に言えば、魔術師の色位に少し足りないくらいにまで。迷宮を一人で遊ぶには、少し頼りないかしらと思うくらいにまで。

そして、愛歌は出会ったのだ。

「——ん、子ども、か？——おいで、出口までは送るよ」

媼のような白髪に、身長ほどもある大剣を持った戦士。

聖杯すら手に入らない、無意味な亜種聖杯戦争に引つ張り込まれた剣士のサーヴァント、セイバー。

彼女は愛歌をただの子どもと言って守ろうと立ち回るおかしな人だった。

迷宮自体は、そのセイバーが一人で踏破した。愛歌は特に何もしなかった。

セイバーの後ろで、本当にただの子どものように化物や罾と戦うセイバーを見ていただけ。きみは戦わなくていいから自分のことだけ考えていて、とセイバーが言ったのだ。

守ってもらいながらの冒険は、なかなか新鮮な体験だった。

迷宮を歩きながら、何度か会話はした。

愛歌に妹がいると知ると、セイバーはふうんと言って、じゃあ絶対にその子のところへ帰りなよ、と続けた。

このセイバーには兄が一人いたのだそうだ。

ずっと昔のことだが、戦争に行ったきり帰ってくることはなかったという。

だからきょうだいは大切にされた方がいいよ、と彼女は当然の理屈のように語った。

愛歌には実感はなかったけれど、そういうものなの、と納得することにした。

「まあ、私も兄も英霊の座には昇れたようだから、いつか何処かで会えるさ」

その人に会いたい、と愛歌は聞いた。

「会いたいよ、もちろんさ。だからこうして、喚ばれるたびに出てきているんだよ。願いを叶えるためにね」

変な人、と愛歌は正直に言った。

何度も何度も本来なら自分とは関係ない戦いに引つ張り出され、そうまでして会いたい人がいるのか、とそれが愛歌には不思議に思えた。

「うん。きみは子どもだから。そう思える相手にまだ会ってないんじゃないのか？」

訳知り顔で言うセイバーは、愛歌には妙に憎らしかった。

結局、その迷宮は最深部にあつた核をセイバーがその主ごとばつさり切断すること
で崩壊し、愛歌はそれをきつかけに元の世界へと帰つた。

別れ際、じゃあねとセイバーは手を振つた。

またね、と愛歌は笑つた。

別れて目覚め、愛歌は再び全能である自分の身体に戻つた。

そこで聖杯戦争のことを思い出したのだ。

聖杯戦争とは近々東京で執り行われる、七騎の英霊を喚び出す壮大なる魔術儀式。

沙条の家として、愛歌も参戦することだけは決まっていた。退屈しのぎにはなるかと、無気力に捉えていた。

別にどんな英霊でも良かったのだけれど、喚び出すのはどうせならあのセイバーが良
いかしら、と愛歌は考えた。

歴史の中には他に強い英霊も理想的な英霊も、いくらでもいるだろう。でも白髪のセ

イバーは、愛歌が初めて面白いと感じた他人だった。彼女が死者であろうと関係ない。未来を覗く眼を瞑る前、愛歌はちらりとセイバーの聖杯戦争を垣間見た。

結果分かったのは、聖杯戦争に参加すればセイバーは会いたい人には再会できる、というものだった。

じゃあちようどいいわ、と愛歌は生まれて初めて朗らかに笑って、白髪のセイバーを喚び出すことに決めた。

そうして喚び出されたのが、あの白髪の剣士だ。日本においてはほぼ無名の英霊を喚んだことに父は失望したようだが、愛歌は気にしなかった。

だが、愛歌とは違ってセイバーは迷宮での冒険を綺麗さっぱり覚えていなかった。並行世界の、それも亜種の聖杯戦争だったからかもしれない。でも愛歌には何となく面白くなかった。自分だけが覚えていて、セイバーが覚えてくれていなかったのがつまらなかつた。

——だから、これはほんの少しの意地悪。

この聖杯戦争にはあなたが一番会いたがっている人がいるわよ、と言うことを愛歌は自分からは教えてやらないことに決めたのだ。

#####

「人の数は、随分増えたんだ」

深夜のことである。

剣の英霊、セイバーは戦いの場になる東京の町を、高いビルの上に立って見下ろしていた。

「ええ。この街だけで何百、何千万の人がいるのか知れないわ」

寒さなど関係ないかのようには、セイバーの隣で笑っているのは碧のドレスを纏っている彼女のマスター、沙条愛歌である。

一応見た目を気にして茶色のコートを借りたセイバーと違って、愛歌はレースの付いたドレスのままだ。

そもそも、セイバーが東京の町を見ておきたいと言い、それならわたしも行くわと愛歌がついてきて、こうして二人並んで摩天楼の頂上で生命犇めくきらびやかな大都市を見下ろしている。

ネオンの光の中に、白い顔を浮かび上がらせながらセイバーは口を開く。

「……愛歌、率直に言っているかい？」

「なあに？」

「この都市で、私たちがみたいな存在を七騎も戦わせて神秘を隠匿せよと宣うって、無理にもほどこがあると思う」

「それを言ったらお終いじゃない。そもそも、喚び出しに応えたのはあなたよ」

そうなんだけれどね、とセイバーが吐いた息は、白く凍えた。

「こんな大都市とは思っていなかったんだよ。もうちよつと辺境というか秘境というか、ともかく人がいない所かと」

「もう、我儘ね。じゃあ、奥多摩辺りの山で戦えば？あそこなら隕石が落ちたとか何とか言えば誤魔化しの効く範囲よ。尤も、誤魔化すのはわたしたちの仕事じゃないけれど」
 さり気に悪魔だよこのマスター、と可愛らしく小首を傾げる愛歌を横目に見つつ、つとセイバーは視線を夜空に向けた。

人工の灯りは強く、天の星の光はかき消されそうだ。自分の時代のような満天の星空は、遠くなつてしまった。

「星が見えないのが不満？」

「まあね」

「あなたの名前、星っていう意味なものね。付けてくれたのはお兄さんだったかしら」

「……確かにそうなんだが、話していないことをそうぎくぎく言われると反応に困る。マスター」

思わず慥然としたセイバーを見て、くすくすと愛歌は笑った。

仕方ないマスターだと言うしかない。他に幾らでも強い英霊を好きなように喚べただろうに、あえて自分のような知名度の微妙なサーヴァントをわざわざ喚ぶ辺り、このマスターは相当に享樂主義者である。

首を振ったところで、何かの気配を感じた。

「敵？」

「その様。此方には気付いていないらしい」

「そう。じゃあ適当に叩いて。倒せるようなら倒して、何かあるようなら偵察だけで戻って来て。わたしは戻っているから、また後でね」

瞬間、空気に溶け込むように愛歌は気配ごと消えた。

愛歌お得意の空間転移の魔術である。セイバーの生前でも、そうそう使い手にお目にかかれることのなかったような絶技だ。それを、愛歌は呼吸するかのようになす。

正直、あれだけで立ち回り次第でサーヴァントも相手取れる気がするのだ。

それをやらないのは、愛歌言う所の『楽しみ』のためなのだろう。

まあいいか、とセイバーは発動させていたスキル『情報秘匿』を切る。

逸話によって付与された個人スキルで、戦闘時以外は常に使い続けている。

効果は単純。サーヴァントとしての気配を絶ち、ステータスの隠蔽を行うものだ。それを使うのを止めたなら、敵サーヴァントはすぐに此方に気付くだろう。

案の定、高密度の魔力が真つ直ぐこちらへ向かって来る。

だが、ここでは戦い辛い。街を切り裂きながら空中戦など冗談ではない。

借り物のコートと当世の衣装に代わり、軽鎧と籠手を一瞬で装備すると、掴まっていた避雷針から手を離して闇夜に体を踊らせた。

——たちまち天地が反転する。

頭を下に落下しながら空を見れば、一瞬前まで自分のいたところに大槍を持った女が一人いた。仰向けに自分から落ちていくセイバーを追撃するか否か、考えあぐねていた。

「———ついてきてくれないと、困るんだ」

風属性の『魔力放出』を行って、落下に歯止めをかけつつビル壁を蹴って向きを変える。

そのままビル壁を次々足場にして、空中を駆けた。

後ろを見てみれば、女———推定、ランサーのサーヴァントは空中に不思議な文字を光らせながら飛行して追撃してくる。

『それ、最初のルーンっぽいわね。とすると北欧とかケルト出身かしら、あのランサー。ステータス的にはかなり高ランクで纏まってるし』

「解説どうも」

『いいえ。初手から三騎士に当たるなんて流石、幸運：Cってところ———』

完全に観戦へ移ったらしいマスターとの念話を途中で切断し、超高速で跳び逃げ、ランサーを町から離れた山の方へと誘導する。

何となく分かるのだ。あのランサーは神に連なる者。存在からして此方より上位だ。

「でもサーヴァントの位は同格。なら———殺せない道理はない」

空気から臭みが抜け、澄んだものへと変化。

それを確かめ『魔力放出』を止めれば、体は石のように落下する。

地面に迫突する直前で、再び風を噴射。強引に向きを変えて反転し、背後の空に迫っていたランサーよりも高く飛び上がる。

セイバーはそのまま左手に大剣を換装し、両手で握って大上段から振り下ろした。数値的にはAの筋力値で振るった所に魔力放出で勢いを上乘せして、空にいたランサーを地面に叩き付ける。

木々を薙ぎ倒して着地したランサーは、セイバーの目から見て美しい女だった。星の光そのもののような長い銀の髪を煌めかせ、紫水晶のような瞳を一杯に見開いている。

だがそれも少しの間。

ランサーの目が高い木に止まるセイバーに据えられたかと思うと彼女の項にびり、と寒気が走る。

「ッ——！」

風を操り、その場から離脱した。一瞬後には、紅蓮の炎が空一面を舐めている。

やけに焦げ臭いと思ったら、髪が一房燃えていた。

『炎に特化した魔力放出かしらね？うん、ルーンと炎を扱う女槍兵といえ、真名がかなり絞れそうね』

「実況中継がそんなに楽しいのか、愛歌」

『ええ！ほら、来るわよ』

ランサーの姿が消えた——と思う間もなく、右手から風切り音。

セイバーは大剣を盾に防ぎ、そのまま無理矢理に横風にすればランサーは空中でその一撃を避けた。

間をおかず、風を放出して斬りかかる。

剣と槍では間合いで負ける。おまけにセイバーはランサーより小柄で、剣が届かなければ殺せない。そのため懐に飛び込んで押し切る。

右、左、上、下と、嵐もかくやという勢いで斬撃を繰り返せば、ランサーはわずかに後退し、今度は炎を槍に纏わせ突貫してきた。

顔目がけて突き出された槍を首を振って避けざまに、槍の刃を風を纏わせた拳で殴った。

鈍い音がし、軌道を逸らされた刃が上を向く。

から空きのランサーの胴に剣を見舞おうとして、そこで気付いた。ランサーの目が、笑っている。

直感に従い、今度はそこから後方へ離脱。

瞬間、ランサーの周りの地面一体が爆発した。

「残念。折角ルーンを撒いておいたのですけれど、避けられてしまいましたか」
爆炎を切り裂き現れながら、ランサーが澄んだ声で言う。無傷だった。

「獣のような直感と、基礎だけを与えられ我流で研いた狂戦士のような斬撃。しかし、街の人々を巻き込むことは厭う。あなたは、良き善姓の英霊のようですね」

『あなたのアライメントは中立・善だから、ランサーの見立ては合ってるわね』

セイバーにしか聞こえないのを良い事に、一々茶々を入れてくるマスターだった。

「それはどうも、ランサー。気高い戦乙女にそう言つて貰えるのは望外だね」

「あら。ばれてしまいましたか」

槍の刃を撫でながら、ランサーは妖艶に笑った。セイバーとしてはカマをかけたつもりが、見事に正解だったらしい。

「ではこれは、あなたの前で飲むこととしましょうか」

ランサーの手が動き、懐から何かを取り出そうとし——セイバーは猛烈に嫌な予感がした。

魔力放出を全開に、大剣を槍のように投擲。ランサーへ突貫する。

「なー」

盾のように視界を塞ぐ大剣を弾くために、ランサーが動く。そのときには此方は大剣の陰から、逆手に持った短剣を構えて突っ込んでいた。

ランサーが後ろへ飛び退こうとし、弾みで小さな小瓶のようなものを取り落とす。更に前へと踏み込もうとしていたセイバーは、地に転がったそれを避け損ねて、見事にその瓶を踏み割った。

儂い音がしてガラスの瓶は碎ける。

「あ」

『あら』

一瞬足が止まり、意識が逸れる。

そのときには、ランサーは槍を携え空へ跳び上がっていた。

「……今宵はここまでにしましょう。マスターからの帰還命令が出ましたので」

「待つ——！」

止める間もなく、ランサーは高速で離脱してしまった。

『あなたも帰ってらっしゃい。セイバー。どうやら別のサーヴァントがそこを嗅ぎ付けたようよ。先は長いから今日はもう撤退してちょうだい』

「……了解、愛歌。この碎けた瓶と霊薬どうしようか？一応回収する？」

『んー。あつちの陣営の手掛かりになるかもしれないから持って来て頂戴』

手早く鎧と剣を消し、コートの中に瓶を収めてから、風に乗ってその場を離脱する。

時間が経つても、瓶も霊薬も消失しない辺りこれは宝具ではなく、恐らく現代の者に

よるモノだ。

ランサーのマスターか、或いは協力者の手によるものか、そこまでは判断しかねたが。『にしても、見事に台無しにしたわね。その霊薬。サーヴァントにも効く現代魔術師の霊薬だなんてかなりの代物なのに。作り手が見たら憤死するんじゃないかしら』

「あんなあからさまに飲まれると危なそうな代物、うかうか飲ませてたまるかという話。霊薬を飲まれて力が倍増でもされたらきつい」

『だったら飲むのを邪魔すればいいじゃない、なんて見事に脳筋ね。ペルシヤってみんなそうなの？』

「さあね。生憎上品に戦ったことがないのさ、此方は。というかこの薬、霊体の私たちに効くのか……」

そう考えるとセイバーはコートの中の重みが急に怖くなってきた。

この時代の魔術師の薬が、あのように何処かの神威を纏った英霊にすら作用できるのだ。自分などでは太刀打ちできないだろう。

『効くんでしょうね。試しに舐めてみたら？』

「絶対断る」

鈴の音のような愛歌の声を頭の中に響かせながら、セイバーは一路沙条の家へと向かうのだった。

「……こりゃ、サーヴァントだな。間違いない」

剣士と槍士が消えた後、破壊のあとも生々しい山中にて一人呟く者がいた。

黒い髪と瞳に褐色の肌。緑の軽鎧を纏った精悍な面立ちの青年である。サーヴァント階梯第三位、アーチャーである。

マスターと共に探索していた所、東京郊外にて戦鬪を探知したため最速でやって来たのだが、生憎戦っていた者たちは離脱してしまった後だった。

地が抉れて焼け焦げ、木々が数本なぎ倒されているが、恐らくただの前哨戦の余波だろう。

どのサーヴァントもまだ離脱してはいまい。

「エルザ、ここは外れた。やり合ったのは——恐らく多分セイバーとランサー辺りだろう

が、どっちも消えてやがる」

『そっか。じゃ、戻って来て。こっちもマスターは見付からないしね』

「了解っと」

軽快なマスターの声に応えつつ、アーチャーは足元の焦げた石ころを何となしに蹴飛ばした。

「……どうも、懐かしい気配がしたようだが。こりゃ、俺の国に近い誰かが呼ばれたのかね」

眩き、アーチャーも闇に溶けた。

Act—3

「やあつ！」

草木疎らな山の中、あどけない声を上げて身の丈以上の大剣を振るう白髪の子どもがいた。

「勢いは良い。だが足元、留守になつてるぞ」

子どもの剣を受けるのは、褐色の肌の青年。

手には短い剣だけを持ち、風を切り裂いて振るわれる剣を軽快に弾き、避けていた。

大剣は地に叩きつけられる度、小さな半球状に地面を抉り取っている。

細腕から放たれるものとは思えない膂力で、子どもは剣を振るっていた。とはいえ威力はあつても技術は幼い。青年が剣の峰で子どもの手を抑えつつ、同時に足を払うことで打ち合いは終わった。

足を払われて、勢いの付いていた子どもは回転して背中から地面に叩き付けられる。

だがすぐに起き上がった。痛そうな素振りにはまるでない。それでも悔しそうに目を

細め髪から土を払い落として、子どもは青年を見上げた。

「……どうやったの？」

「簡単な話さ。お前は速いし力もあるが、動きが直線で読み易い。次に狙う場所が分かってくれば、避けるも弾くも楽にできるだろ？アフトル」

うん、とアフトルと呼ばれた子どもは素直に頷いた。

アフトルにとって、この青年はしばらく前に会い、それ以来時々訪れては自分の知らないことを教えてくれる優しい人間だ。

だから懐いていた。

「お前は獣ばかり相手にしてきたんだろ？獣と人、狩人と戦士じゃ戦い方が違うのさ。分かるか？」

「……なん、となく」

言つてアフトルは青年に礼をした。

「きょうもありがとう。アーラシユの兄さん」

「良きさ。お前は今日も狩りをして帰るんだろ？」

「うん」

二人が今いるのは、山の中腹になる。

青年、アーラシユは山を下つて人里へ、アフトルは山を登つて鳥の巣へ。それぞれ別

の所へ帰る。

本當なら、十になるやならずの子をこんな辺鄙な所へ残して行くのは有り得ない。連れて帰るべきなのだろう。

けれど、このままアフトルが人里へ降りても、それが本當に良いことなのかアーラシユにも分からない。

アフトルの考え方や在り方が、獸のそれに寄つていて人とは違いすぎると言うのもある。まともな人の、それも女の子のものの中に簡単に溶け込めはしないだろう。

しかし別の理由もある。麓に広がるペルシャの国は隣国トウルクとの戦争に明け暮れている。何十年も続いていて、いつ終わるかも分からない。

そこにアフトルのような神代に先祖返りしたような子どもが混ざれば、間違いなく戦えと言われるだろう。

今はまだ幼い子どもでも、このまま戦いが終わらなければいつかそうなるだろう。

アーラシユとてアフトルと同じ神代に先祖返りした肉体の持ち主だから、そのことは実感を持つて言えた。

アーラシユが矢面に立つことは誰より多いが、彼は当たり前だと思つている。自分が前に出て助かる者、守れる者がいるのなら何よりだ。

しかし、自分に関しては簡単に割り切れても、アーラシユは兵士ですらない子どもに

関しては出来なかった。

守つてくれるはずの親の手で人の世界から切り離され、それでも命を拾われて生きてきた子を、幻獣とはいえ親から奪つて人の世界の戦いに巻き込む。

できるわけが無かった。

諭え、それでより多くの兵が救われるのだとしても、あまりに惨い話だ。

戦のない時代に生まれたなら、戦がすぐにでも終わるのならば、また話は異なつてくるのだろうに。

「アーラシユの兄さん？」

「ん、いや、何でもないさ。それより、お前今から狩りをするんだろ？あの技、また見せてくれないか？」

いいよとアフタルは頷き、アーラシユはその髪をくしやりと撫でた。

アフタルの背丈はアーラシユの肘の辺りまでしかない。自分の身の丈もありそうな剣を振るう姿は、あまりにちぐはぐだった。

アフタルは背中の鞘から剣を引き抜く。遠くの斜面で常人には小さな点にしか見えない鹿が跳ねていた。

息を整え、アフタルは両手で剣を握る。

鹿が顔を上げた瞬間、アフタルが短く息を吐いて剣を横風に振るつた。鳥の鳴くよう

な音がしたかと思うと、遠くの鹿が倒れる。

アフタルは剣を鞘へ収めると駆け出し、数分もしないうちに鹿を抱えて戻ってきた。見れば、鹿の首の辺りの皮がぱくりと裂けて血が流れている。

どういう理屈なのか、斬撃を遠くの的に向けて飛ばすというアフタルの使う不思議な剣であつた。

本人に聞いても、何となくできるだの、感覚でできたのだとさっぱり要領を得ない。家族の皆のように空を飛べないのが悔しくて、同じように狩りができないかと頑張っているうちにできるようなものになつたらしいが説明が全く分からなかつた。

言つてみれば鎌鼬のようなものだろう、とアーラシユは自分を納得させていた。

こういうことができること一つ取つても、アフタルはやはり山にいた方がいいのだからか。

「兄さん、またなやんでる」

鹿を捌きながらアフタルがぼそりと言つた。

「悩んでるように見えるか？」

「みえた」

鋭く尖らせた石の小刀を器用に使つて、アフタルは鹿の皮を剥ぐ。上手なことに血の一滴も大地にこぼしていなかつた。

「母さんや鳥の兄さんもさいきん、そういう顔をする。わたしのことでなやんでるみたい」

「お前の？」

「うん。あのね、さいきんはヒトの増え方がとつてもはやいんだって。ヒトがうんとふえたら、母さんたちはもうここには住めなくなるから、せかいの裏がわに行かなくちゃならなくなるんだって」

でもわたしは行けないから、だからみんなわたしのせいで困ってるんだ、とアフタルは言った。

「世界の裏側……ってのあ、初めて聞いたな。そこ、お前さんは絶対に行けないのか？」
「魂だけになるなら、いけるかもしれないけど体があるうちはむりなんだって。だってわたしは飛べないし、かたちもみんなとは違うからね」

えい、という小さな掛け声と共に、アフタルは鹿の角をもぎ取った。

アールラシユは、何も言えなかつた。

知ってか知らずか、アフタルは舌足らずに続けた。

「アールラシユの兄さんにあうことをね、母さんはよろこんでる。ヒトの世界をちゃんと学びなさいって。ひつようなことだからって。わたしも兄さんに会うのも、いろいろ教わるのも、どっちもすきだから嬉しい」

人の世に行きたいならそうすればいい、裏側について来たいなら、お前の望むようにしてあげる。

どちらでも良い。しかし最後はお前が選べ、と霊鳥は愛しい養い子を突き放したのだ。

「厳しいな、お前の母さんは」

「ちがうよ。母さんは優しいの、おとなになるまえまでに、ちゃんとわたしがかんがえてえらびなさいって言うてくれるから。一度決めたなら、もうとりかえしはつかなくなるからだって」

でもむずかしいよ、とアフタルは切り分けた肉を背囊に入れて立ち上がる。

肉の重みで革紐が食い込んでいる肩は、折れてしまいそうなほど細かった。

家族から離れて人として生きるか、この世を離れて人ならざる者として生きるか。

まだ母の膝の上にいていい歳だろうに、どうしようもない問いと向き合おうとしている子は、あまりに幼かった。

同時にアーラシユは思った。

自分と会うことが無かったなら、人の世に触れなかったなら、この子はこんな風に悩むこともなかったのではないだろうか。傲慢かもしれないが、そう考えずにいられたかった。

(何のために、俺はこいつと会ったんだろうな)

山に白髪を振り乱す鬼が出ると言われ、正体を見極めようと向かった先で出会っただけの子。

恐らくは、不吉な白髪を持って生まれたために捨てられてしまった子。そして天性の肉体のために、生き延びることができた子。

それがアファタルだ。

自分と同じ神代の人間のような、桁外れの力を秘めた体の持ち主は、アアラシユ本人を除けば今彼が仕える王しかないはずだった。

己の生まれに不満を抱いたことはない。周りの人間すべてを寄り添って共に歩む仲間ではなく、自分が守るべき者としか見られない運命を、呪ったこともない。

だがだからこそ、自分と同じ所のあるこの子どもを見れば何くれと構ってしまう。

たまたま生まれる場所が異なっただけで、この子どもは自分だったかもしれないのだ。

険しい山を強く無邪気に駆け回る子どもの中に、アアラシユは自分の別の形を見ていた。

(戦さえ、無かつたら)

少し力が強い変わった子ども、と言い張れるかもしれないのに。

戦の無い時代なんてものは、アーラシユにとつても夢物語だ。生まれたときから、ペルシヤの国は隣国のトウランと戦っている。

殺し殺され、憎しみはもつれ合つた糸玉のようになって、もう何十年も過ぎてしまつた。

誰かが血に染まつたその糸玉を切り裂くでもしない限り、戦は終わらない。

「兄さん、かえらなくていいの？」

くい、とアーラシユの服の裾をアフタルが引つ張つていた。

アーラシユが呆としているうちに、さつさとアフタルは鹿を解体し終わつていた。毛皮を差し出そうとしてきた小さな手を、やんわり退ける。寒い山には毛皮は貴重だろ
う。

「じゃ、またね。さよなら」

「ああ」

たん、と斜面を蹴つてアフタルは尾根を走り出した。鹿より速く強い健脚で走る小さな姿は、あつという間に山の間に消える。それを見送り、アーラシユも地面に置いていた弓矢を担ぎ直した。

——そこで、急激に景色に霞がかかる。

岩肌の目立つ山も薄雲のかかる空の青さも、たちまち遠くなって消えた。

「……あれが夢、なのね」

東京は秋葉原。

ホテルの一室で、エルザ・西条は翠の目を開けて呟いた。

つい仮眠を取るつもりでソファの上に寝転がっただけだったのに思ったよりも長く寝入ってしまったらしい。それでも二、三時間程度だろうが。

起き上がりながら、エルザ・西条は夢の名残りを振り払った。サーヴァントと契約したマスターは、相手の記憶を夢に見るといのが今のがそうなのだろう。

聖杯戦争とは関係ないただの夢とは、エルザには切り捨てられなかった。夢に出てきた幼い子どもの、舌足らずな高い声はまだ耳の奥に残っている。

「アーチャー、いる？」

「おう」

隣の部屋の壁を突き抜けるように、実体化するのはエルザのサーヴァント、アー

チャー。真名、アーラシユ・カマンガである。

「ごめんね、思ってたより眠っちゃったみたい」

「何。休めるときに休んでおけばいいさ」

アーチャーはからりと笑う。

エルザの思っていたより英霊というのは人らしい。生きていた頃の全くの再現に見えた。

「よほど変わった夢でも見たか？ 気になるのならば問えばいいさ。聞かれりや答えるぞ、俺は」

今もエルザの思考を先読みするかのようにアーチャーは言う。

出過ぎているかもしれないが、エルザは知りたい気持ちを抑えられなかった。

「小さい子どもがいたわ。アフタルってアーチャーは呼んでいたけど」

「……ああ、あいつか」

ふむ、とアーチャーは思い出すように目を閉じた。

「俺にとつちや妹みたいなヤツさ。ただあいつ、弓は下手だったが」

石や剣を投擲させれば上手いのになんでだろうな、と心底アーチャーは不思議がる口調で言った。

夢の中でのアフタルは随分幼かったが、結局、あの師匠と弟子とも言うには親しく、本

当の兄妹というには少し遠いような馴れ合い染みた関係は数年続いたそうだ。

そしてアーラシユ・カマンガーが国を割って引き換えに死ぬ、数年前の出来事があったと、アーチャーはあっさり語った。

「で、最後に会ったときには喧嘩だ」

「喧嘩？」

「そうさ。あいつ、鳥と話が出来たからなあ。鳥の誰かに、俺がしようとしていたこととそれで俺がどうなるかってことを教えられたんだと。それで、国を割りに行くのならわたしを倒してからにして、となつた訳だ」

「……」

何を言っても兄さんは止まらない、そんなこと分かつてるし、わたしには止める資格がまずない、でも、このまま別れるのだけは嫌だから、と子どもから少女に変わつていたアフタルは言い切つたと言う。

そうして、死ぬの生きるのと、青年と少女の二人は地を抉り穴を穿ち、山に生きるすべての獣を目覚めさせる勢いで争つて。

「まあ、俺が勝つたさ。当然だ」

力をすべて使い果たして、動けなくなつたアフタルを山に残し、アーラシユは国を割つて平和を築き、引き換えに命を失い英霊となつた。

アフタルはその後山を降り、竜殺しをして今も人々に語り継がれる英霊になったという。サーヴァントとして与えられた知識から、アーラシユはそれを知った。

「そんなだけさ。まあ、俺としちゃ結局あいつは戦いの中で生きたのかと思うと……ちよつと複雑だがな。あの歳ですでに結構ぶつ飛んでたから無理なかつた気がしてるぞ」

「……分かつたわ。じゃああの子、人の世に帰つたつてわけね」

「ああ。何せ、人の側の英霊になつてるからなあ」

少しの間、アーチャーは窓の外を見た。

立ち並ぶ黒いビルで四角く切り取られた空は狭い。その狭い蒼穹を、数羽の小鳥たちが飛び去つて行つた。

窓から目を逸らし、アーチャーは肩をすくめる。

「ま、昔の話さ。……それでエルザ、これからどうするのかつてのは決めたのか？」
黒い目が細められる。

心の奥まで見透かせる目を正面から見て、エルザは子どもの声を耳の奥から消した。忘れなければならぬ。でなければ、エルザは自分が戦いを続けられなくなつてしまふという確信があつた。

「そうね……。セイバーとランサーが戦つたのは分かつてる。でも今は儀式も初戦だけ

ら、まだどこも探り合いよね」

偵察、及び各個撃破。

そのためにまず街へ出ようとエルザは言い、アーチャーは頷いた。

Act—4

「……ねえ、セイバーはセイバーって名前なの？」

朝のことである。

鳩と戯れる剣士に、そんな風に話し掛けてくる子どもがいた。

黒い髪に青い瞳の女の子、セイバーのマスターとは違って、いたいけとか健気とかという言葉が見事に嵌まる幼子、沙条綾香である。

沙条の家に住む鳩を肩に止まらせ、彼らからこの街の話を聞いていたとき、セイバーはふと視線を感じた。

見れば幼い子が一人、興味津々と言った風に木の陰からこちらを見ていたのだ。

「おはよう……ええと、綾香だったね」

「お、おはよう。セイバー」

ひらひら手を振ると、綾香は腰が引けながらも近寄って来た。目はセイバーの周りで喉をくうくうと鳴らしている鳩に向けられている。

「鳩が気になるのかい？ちよつとおしやべりしていたのだけど、可愛いね」

「……え？セイバー、鳩の言葉分かるの？」

「分かるし、話せる。そういう特技があるからね」

セイバーは鳥に育てられたから、人と会話するのと同じように鳥と会話ができる。鳥の言葉しか分からないが。

ぼかした説明ながら、綾香は納得したらしい。すごいね、と言つて少し間を空けて隣に座つてきた。

過去ならば、この子くらいの歳であれば意識を研ぎ澄ますことで大概の動物や霊獣と同調できたのだが、それはやっていないらしい。

ともあれ、綾香は鳩に懐かれるセイバーを見て警戒心を低くしたらしく、名前を聞いてきた。

セイバーは、異国の言葉で剣士を指す。

あだ名か偽名を疑われてもおかしくなかった。

「セイバーはあだ名みたいなものさ。でも本当の名前は内緒」

「……教えてくれないの？」

「教えてあげられないのさ。ごめんね」

しゅん、と綾香の肩が落ちた。

セイバーは罪悪感を感じるが、サーヴァントの情報など、なまじ知らせない方がいいだろう。

そう考えたら、セイバーはそもそもこの子とあまり親しく話すべきではない。

『セイバーちよつと、鳩と遊んでないで戻って来てくれないかしら』

「……了解、愛歌」

折良く愛歌からの念話が入ったと、セイバーは立ち上がった。

膝と肩に止まっていた鳩が一斉に飛び立つ。

「じゃ、綾香。きみの姉さんに呼ばれているから、私はもう行くよ」

「……うん。……あ、待って!!セイバー!」

ん、とセイバーは綾香を振り返る。

綾香は大きな声を出したことに、自分が一番驚いているような顔をしていた。

「えつと……わたしに、聖杯戦争のこととか、わからない、んだけど。……あの、セイバー、お姉ちゃんをお願い、します」

手を胸の前で握り合わせている綾香へ向けて一度だけ頷いて、セイバーは後ろを向く。そのまま綾香へ向けて手を振って、場を離れる。

向かった先のダイニングで、愛歌は椅子に座って頬杖をつき、足をぶらぶらさせていた。その目の前には昨日セイバーが、ランサーと戦ったときに見事に踏み割った赤いガ

ラス瓶の破片があり、朝日を浴びてきらきら光っていた。

「セイバー、また鳩と遊んでいたの？」

セイバーが正面に座るなり、愛歌は言った。

「まあね」

「そう。霊鳥スイームルグの化身ともなれば鳥に懐かれやすいのかしら」

つくづく、人の過去を持ち出して話をするのが好きなマスターであった。

セイバーはやや呆れ顔で言う。

「化身って、それはあとの人たちが言い出したことだよ。私は生まれて死ぬまで人間以外の何かになれた覚えは無いからね」

昔々の話だ。

ある国に、不吉な白い髪を持って生まれた赤子がいた。赤子は親の手で山に捨てられ、たまたま霊鳥スイームルグに拾われて育った。赤子は親の手で山に捨てら

れ、赤子は生まれついて、神代に先祖返りした丈夫な体を持っていたから子どもになるまで山で生き延びた。そうして人里から離れて暮らし、思考も道徳も霊鳥と同じになっていたその子は、やがて山に白い鬼が出るといふ話を聞きつけて真偽を確かめるため山を訪れた弓の上手な青年と出会った。

色々なことを教えてもらって、けれど子どもは心は霊鳥の側に属していた。

青年もそれは知っていた。

——お前は、鳥だからな。人の戦いなんぞに来るべきじゃない。自由に飛べる
ところまで行け。羽が疲れるまで飛んで、色んな世界を見て来い。

なんて、そんなことを言つて青年は人の戦いに向かい、子どもから少女に成長して
いたその人間は、それきり二度と彼には会えなかつた。しかし結局、少女はそれを後悔し
て山を離れた。

それから霊鳥スィームルグたちは、他の幻獣たちと同じように人の世が台頭する時代
に押されて、世界の裏側へと消えていった。母だつた霊鳥とも少女は二度と会えなく
なつたのだ。

そして少女は彼らと別れた後、色々と冒険をして、死んだ後に英霊の座に登録された。
その少女がセイバーという訳だ。

「でも霊鳥と暮らしたのは本当なんでしょう？」

「それはそうだね。騎兵で召喚されたなら、宝具として鳥の兄さんが喚べたんだが、今は
剣士だからね。羽しか喚べないよ」

セイバーはくるりと手を振つて、掌の中に一枚の羽を顕現させる。大きな孔雀の羽に
も似ているが、込められている神秘は桁外れに高い。

「それが霊鳥スィームルグの羽なのね。それで撫でられれば傷が治る、というのが宝具

としての効果よね」

「ああ。真名解放をすれば勿論。しなくても持つているだけでどんな傷でも、病でも緩やかに治るといふ仕様になっているようだ」

「ふうん。ねえちよつとそれ、貸して。触つてみたいの」

はい、とセイバーは愛歌に渡す。

一頻り弄くり回してから、愛歌はそれで羽扇のように顔を扇ぎつつ目の前の小瓶を指差した。

「昨日あなたが持つて帰つたこれ。ちよつと調べてみたら、サーヴァントの精神に影響する霊薬だったわ」

「精神？ 肉体ではなく？」

「ええ。精神のみよ。一言で言うくと、感情を増幅させるの。怒りも悲しみも愛も、みんな倍にしてしまう感じかしら」

へえ、と鼻を鳴らして瓶を見る。

感情の振れ幅を激しくする薬とは、妙なものだ。戦いで激することは諸刃の剣なのに、ランサーは何故それを敢えて此方の目の前で飲むとしたのか。

セイバーが瓶を見つつ考えを巡らせていると、ことりと似た形の瓶が隣に置かれた。

「で、これがわたし流に薬を再現したもの。結構上手くできたと思うから、セイバー、試

しに飲んでみる?」

「慎んでお断りする。というか愛歌、昨日この薬はかなり貴重だから、台無しになったら作り手が憤死すると言っていないかった?」

「言ったかもね。でもわたしのはただの真似だもの。一から薬を作った訳じゃあないもの。だから大丈夫」

大丈夫の要素が欠片も見当たらないと、思わず白い眼になった。そもそも何のために愛歌はセイバーを呼んだのだ。

愛歌は無言になってしまったセイバーを見て、肩をすくめた。

「もう。冗談が通じないわね、セイバー」

「はいはい。話が進んでいないよ、マスター。ランサー周辺にかなり腕が立つ薬師がいることは分かった。それに、東京の都心で噂される空飛ぶ幽霊のような銀の人影がいることも知っている。あれもランサーじゃないのかい?」

「……どうして知っているの? ラジオでも使った?」

「鳥に聞いたのさ」

セイバーは言つて、窓の外に並んで止まっている鳩や雀を指差した。つられて見上げた愛歌は、くすりと笑つた。

「おもしろい、あなたつておもしろいわね、セイバー」

「……そりやどうも。でもね、私は劍士のサーヴァントになったつもりはあつても、道化師になつたつもりはないよ、マスター。今日の夜はまた外に出るつもりさ」

「……そう。でもそれなら、夜でなくとも良いじゃない。今から出かけましょう」

愛歌はドレスを優雅に翻して立ち上がった。

一瞬呆気に取られてから、セイバーはその後をついていく。

「愛歌、行くのは構わないが、せめてコートなり何か防寒具を羽織らないか？この季節にそのドレスは目立つだろう」

「セイバー。あなたもその目立つ白い髪を何とかしないとイケないのよ」

というような会話を経て、彼女らはそれから数十分程で新宿へと辿り着いていた。

ドレスの上からコートを羽織り、マフラーを巻いた愛歌と、白髪を束ねて帽子の中に押し込んだセイバーは、傍目には普通の人間のように装っていた。

物珍しそうに辺りをきよるきよると見回し歩くセイバーと、冷めた目で街を見ながらその横を歩く愛歌とは、対照的だった。

「愛歌、何処へ向かつているんだ？」

「何処でもないわ。でも、こうして歩いていたらきつと会える相手がいるのよ。何となく、そんな気がするの。ほら、例えばあの人たちとかね」

人混みの中、愛歌の白く細い指が今まさに新宿駅の入り口から吐き出されてきた二人

組をすつと指し示した。

一人は少年。この国の人間と思われる黒髪に、毒気のない幼さの残る表情。現代風のジャケットとズボンを纏っている。

もう一人は、青年。一目で異国の者と分かる金髪碧眼に整った顔立ちをしていて、こちらは古風な格好のせいでやや周りから浮いていた。

目を凝らし気配を探り、少年と青年の間に流れる魔力を感じ取ってセイバーは気付いた。

「……サーヴァントと、マスター？」

「そうみたいね。わたしたちみたいに、遊……じゃなくて、偵察に来たのかしら」

向こうは愛歌とセイバーには気付いていないのか、サーヴァントらしい青年の方は珍しげに巨大なスクリーンを見上げ、マスターらしい少年は何事か話しかけている。

どうしようか、とセイバーは傍らを見て、そこに誰もいない事に気付いた。顔を上げれば、何の躊躇いもなく彼らに近付いていくマスターの姿があった。

セイバーが止める間もなく、沙条愛歌は背後から黒髪の少年に近付き、可愛らしく小首を傾げてその服の裾を引いた。

「こんにちは、サーヴァントとそのマスターさん。こんな昼日中に、こんな所で何をしているのかしら？」

振り向いた少年の顔が、固まる。

金髪の青年が動くより先に、セイバーは距離を一步で詰めて愛歌の前に立った。

人ならざるその素早い動きに、金髪の青年の顔が険しいものになる。黒髪の少年を背に庇う青年を留めるため、セイバーは彼の顔の前で手を広げた。

「待ってくれ。警戒するのははもつとも。でも此方に戦うつもりはない。そも、昼日中では戦わないのが私たちのルールだろう」

「……昼日中にいきなり僕のマスターに話し掛けるのが君たちのルールかい？」

「……」

青年の声はその瞳に映る光と同じほど、固かった。

「あら、わたしはただ話し掛けただけよ、ねえ、セイバー」

後ろからひよこりと顔を出して、クラス名をあつきりとばらしてくるマスターに、セイバーは一層肩を落とした。

傍目から見れば少女たちのただのやり取りである。そこに何を見たのか、それまで黙っていた黒髪の少年が割り込んだ。

「ち、ちよつと良いか？セイバー、とそのマスター」

緊張しているのか、やや上擦っている声のまま少年はしっかりと愛歌とセイバーを見た。

「ええ、何かしら、第七位のマスターさん？」

セイバーの陰から顔だけを出し、愛らしい笑みを浮かべる愛歌に少年——
來野
異は、言い募った。

「俺——俺たちは君たちと、話がしたいんだ、今から時間、くれるか？」

そのとき、くすくす、と愛歌が嗤うのをセイバーは確かに聞いた。

「ええ、良いわよ。セイバーも良いでしょう」

自分を見上げて問うてくるマスターに、セイバーは了解、と頷くしかなかった。

A c t — 5

古代ペルシャの歴史が刻まれた神話、民話には、竜の伝説が幾つかある。

悪神アンリ・マユによって創造された悪竜アジ・ダハーカなり、カシャフ川に巣食い人々を苦しめた毒の竜なり。

そして伝承に曰く。

アジ・ダハーカは、竜殺しの大王フェリドゥーンに、カシャフ川の毒竜は英雄サームに封印され、或いは倒されて鎮められた。

竜は倒されるモノで、竜殺しは英雄の証。竜を殺しただけで、その名は人々の記憶に残る。

幻想種の頂点、竜を生身の人間が単身で殺すのはそれ程に難行なのだ。

セイバーが英霊の座に登録されたのも、生前竜退治をしたことによる。

歴とした神話、宮廷で語り継がれて来た物語というより、口づてに伝えられて来たおとぎ話、『小さな村を守るために山ほどもある竜に立ち向かった英雄』という一つの言

い伝えが、セイバーを英霊たらしめている根拠だ。

——まあ、伝わっているのは個が薄れた概念的な無銘英霊としてだけど、今は個としての人格があるから良いか。

所は東京、新宿の何処かの喫茶店。

セイバーはそんなことを考えながら、二人の人間と二騎のサーヴァントが向き合うという奇妙なお茶会にいた。

何かもう割りとどうにでもなれ、と言うのがセイバーの正直な感想だった。隣に座り、アイスクリームをスプーンで掬い取っているこのマスターは、大体からして止めるのが不可能なのである。

セイバーのマスター、沙条愛歌は異質異端だ。根源という森羅万象を司る渦に接続して生まれ、不可能なことが何一つ無い女の子。

出会って数日ながら、セイバーは沙条愛歌をそう評していた。

愛歌には何かの切欠で、家族に愛される少女、という人としての側面を簡単に切ってしまう危うさがある。

だけれど、別にセイバーは彼女のことは嫌いではない。享樂を求める度合いが過ぎているかとも思うが、今までずっと退屈で心が動かなくなっていたというなら、これくらい弾けるのも有りえるのかもしれない。

自分が、生まれてすぐに白髪という異端な外見のために捨てられたセイバーは、沙条愛歌をそういう意味では受け入れていた。

見ていて面白い道化扱いして来るのは少々複雑な気分になるときもあるのだが、だからといってセイバーが愛歌に悪感情を向けることは無かった。

「……なあ、そろそろ話しても良いか？」

「良いわよ。むしろいつまで経っても話さないから、まだなのかと思つてたわ。第七位のマスターさん」

意識を戻し、にこにここと邪気なく微笑む愛歌の前に座る一人の少年を、セイバーはじつと観察する。

隣の青年と魔力で繋がっていることから、彼がマスターなのは明らか。それにしては少年は魔術師らしくなかった。気配や佇まいが、あまりにも普通すぎるのだ。隠しているというわけではない。

少年はセイバーと愛歌の顔を順に見ては、どう言おうか迷っているようだった。

美味しそうに氷菓子を頬張る愛歌の姿があまりにあどけないからか、とセイバーはじつと動かず思い巡らせていた。

「ええと、君も俺と同じ聖杯戦争のマスターってことだよな」

「ええ。名前は教えてあげないけどね。わたしは間違いないこのセイバーのマスター

よ

言葉に合わせて、愛歌が胸元に刻まれている令呪を服越しにぼんやりと光らせる。第一位のマスターであることを示す七枚羽根の熾天使の令呪を見て、サーヴァントである青年の顔が一気に険しくなった。

少年は翼の意味が分かっていないのか、それほど表情を変えずに言葉を押し出した。

「……聞いてくれ。……俺は、聖杯戦争を止めたいんだ」

アイスを掬っていた愛歌の手が止まる。

セイバーは表情こそ動かさなかったが、内心驚いていた。言われた言葉の、意外さに。「聖杯戦争つてのは、この東京を巻き込んで何かの……魔術儀式をするんだろ」

「ええ。そうね、今この地で開かれているのは魔術師たちの悲願のかかる、聖杯戦争。わたしのセイバーや、あなたのバーサーカーはそのためにも召喚された使い魔」

あっさりとクラス名を看破されたためか、金髪の青年の眼が刃物のように細くなり、愛歌に据えられた。

愛歌は小動もしなかった。

「でも、放っておいたら沢山の人が死ぬかもしれないんだろ？俺は、それを止めたいんだ」

真摯に少年は言い切り、愛歌はつかの間黙った。

一拍開けて、愛歌がくすりと笑う。

「ふうん。おかしなことを言うのね。あなただつて聖杯が欲しくつて参加したマスターじゃないの?」

「いや、俺は聖杯なんていらぬ。魔術のこともサーヴァントのことも、昨日こいつから教えてもらったんだ」

「……じゃあきみは何も知らずに、たまたまバーサーカーを召喚した、というのか?」

それまで片目を閉じて黙っていたセイバーは目を開けて、黒い眼を少年に向けた。

「そうさ。僕のマスターは偶然に僕を召喚したのさ」

答えたのは少年ではなく、バーサーカーだった。愛歌は頬杖をついて、少年を見透かすように首を傾げた。

「それであなは、この東京を巻き込んだ邪悪な魔術儀式——聖杯戦争を止めたっていうのね」

「ああ」

「でも、止めるつて口で言うのは簡単よ。どうやって止めるの?わたしたちのように一組一組対話していくの?命知らずね」

顔は微笑んだまま、温度がまるで感じられない声で愛歌は聞いた。

「このセイバーは結構お人好しの部類よ。あなたを殺さないで済む方法を考えるくら

い。でも、わたしにはそうする理由はないの」

ね、と愛歌はセイバーを見た。スキルで行っている隠蔽を解いて、と念話で言われ、セイバーは自分の魔力と気配を隠蔽していたスキルを切る。

隠されていた魔力が少年に向かい、気配にあてられて彼の顔が青くなる。愛歌は少年へ目を戻した。

「第一あなた、セイバーの見た目が普通の女の子みたいだからって、躊躇っているでしょう。でも聖杯戦争において、サーヴァントは他のサーヴァントを殺すためのものなの」
「殺す……って」

刃物を突き付けられたように少年が身を引いた。

「ええ。殺すわ。六の英霊の生命、魂をくべて起動するのが聖杯だもの。あなたのバースーカーはどう言ったかは知らないけれど、わたしのセイバーは、自分の願いのために他の六騎を殺すのを躊躇わないわ。それくらいの覚悟で挑むのが、聖杯戦争よ」

少年の目が揺れて、セイバーに向けられる。

セイバーは頷いた。愛歌の言葉を肯定するように。

セイバーも、願いがあるから戦う。他を踏み躪つても譲れないものがあるから、戦いに赴くのだ。殺されない限り、諦めるつもりはなかった。

黙ってしまった少年から興味を無くしたように、愛歌はふいと眼を窓の外へ向ける。

絹糸のような金の髪に日が当たって輝く様を、セイバーは黙って見ていた。

しばらく沈黙の時間があってから、俯いていた少年は、顔を上げた。

「……それでも、それでも俺は聖杯戦争を止めたいんだ。だつてこの街には沢山の人が住んでるんだ。俺の友達とかあいつらの家族とか、それを放つてなんておけない」

「あなた、自分も殺されるかもしれないのよ？ それも分かつて言っているの？ ただ巻き込まれただけで、普通なら無関係なのに？」

非難するでもなく、嘲笑うのでもなく、沙条愛歌は純粹に少年に問い掛けていた。

そこには子が親に聞くように、どこか無邪気な響きを伴っていた。

少年は言った。

「無関心でないなら、少なくとももう無関係じゃいられない。俺はもう関わっちゃまったんだ」

愛歌は椅子に背中を預けた。

おかしな人、と桜色の唇が動くのが、セイバーには見えた。

言葉が空気の中を漂い、それぞれの胸に沈むまで誰も何も言わなかった。

「……うん、あなたのことは覚えておくわ。バーサーカーとそのマスター。でも、今日はもうさようなら。夜に会ったら殺し合いますよ」

行くわよセイバー、と愛歌は立ち上がった。

セイバーは無言で頭を下げ、その後が続く。少年とバーサーカーは追つてこなかった。

明るい外に出て愛歌はううん、と伸びをした。

「変わった人だったわね」

「……そうだね。多分、この国のこの時代の、普通の人としては極々真つ当なんだろうな」

何十年も戦いがない国で、誰かの命を奪つたことも、誰かに自分の命を奪われる恐れを感じたこともなく。

そうやって育つたのなら、ああいう少年になるのだろうか。

人の少ない方へ歩きながら、愛歌は横にいるセイバーを見上げて聞いた。

「あの男の子が羨ましいの？セイバー」

「まあね。あの子が、というよりこの国のことが少し羨ましいね。……でもさ、あの子を羨んだのは愛歌の方じゃないかい？」

「わたし？わたしが、どうしてあの男の子を羨ましがるの？」

言われた意味が分からない、という風に愛歌は首を傾げた。セイバーは歩きながら、構わずに続けた。

「愛歌はさつき、あの子に覚悟と言つたけれど、きみの中に覚悟はあるのかな？何者を犠

牲にしても何かを求め欲する心。そもそもからして、そういう思いをきみは知らないんじゃないのかい。だって愛歌には聖杯にかけられる願いが、無いんだろう？」

何故なら、生まれたときから何でも出来たのがきみなんだから、とセイバーは最後の一言は言わなかった。

歩くうち、二人は人の少ない広場のようなどころへ出た。広場の中心には噴水があつて、きらきらと水のアーチを作り出している。

愛歌は黙つてその噴水に近づくと、縁に腰掛けた。座つて、という風に愛歌は横の空間を叩き、セイバーはそこに腰を下ろした。

何処か遠くで、笛のような鳥の声が聞こえた。

「……羨ましい、ね。セイバー、あなたつてやつぱりおかしなことを言う人ね。……でも、ちよつと当たつているのが憎らしいわ」

愛歌がくるりと指を動かすと、勢い良く吹出していた噴水の水が、時が止まったように空中で凍りついた。水だけでなく、風に舞い飛んでいた枯れ葉も、空を飛んでいた鳥も、皆動きを止めていた。

音の消えた世界で、へえとセイバーは目を少し大きく見開いた。

「こういうこと、わたしは簡単に出来るのよ。こんな小手先じゃなくつて、世界そのものを変えちゃったりね。そういうことも、しようと思えばできるの」

「でも、やらないんだらう？そこが肝心だと思うけどな、私は」

「だって、それはただつまらないからよ。世界を何度変えたって、わたしが変わらないんじゃないや何の意味もないものね」

愛歌が手を叩くと再び周囲は動き出し、音が戻った。水は流れ、枯れ葉は風に吹き散らされ、鳥たちは歌いながら飛んでいった。

その様子を見て、セイバーは隣の愛歌の顔を覗き込んだ。

「愛歌は、もしかして変わりたいのか？」

「さあ。変わるっていう発想も無かったわね。根源は不変だもの。生き物は不変ではいられないのにな」

縁から下りて、愛歌はくるりと回る。ドレスの裾がふわりと広がった。

「ちよつと分かったわ。わたしはね、きつと此処でわたしの知らないこととか、できないことが欲しいの。未知とかそういうものに憧れる歳ってあるでしょう？」

セイバーは首を傾げた。

「どうだろうね。わたしにとつて世界は何時だって未知だらけで、できないことだらけだったからね。今も昔もさ」

「セイバー、そんな言い方は意地悪よ。わたし、今は真剣なのに」

愛歌の頬が栗鼠のように膨れ、セイバーはそこで召喚されてから初めて声を上げて

笑った。

「どうして笑うの」

「ごめんよ。そういう顔、初めて見たからちよつと面白かったのさ」

一頻り肩を震わせたあと、笑いを顔から消してセイバーは愛歌を見た。

愛歌もセイバーを見て答えた。

「さっきのバーサーカーのマスターだけれど、魔術師じゃない普通の男の子としては、とても真つ当よ。あんなに必死に言う様子をね、わたし、良くなつて少し思つたのよ。何を捨ててもやりたいことがあるって、とつても素敵なことじゃない？」

それは、或いは万能な存在であるがための慢さなのか、セイバーは聞かなかつた。

事実として、さっきの少年の言葉は沙条愛歌とセイバーの記憶に残つていた。

しかし、セイバーとしては愛歌が仮に彼の言葉を受け入れてしまうのは容認できないのだ。彼女は聖杯を得、願いを叶えるためにここに来たのだから。

端的に言えば、セイバーは自分が殺されるまで諦めるつもりが全くなかつた。殺す覚悟も無い者から、ただ聖杯戦争を止めたいと言われて、すぐに受け入れられるほどセイバーの想いは容易く変わりはしない。

けれど一方で、愛歌にお人好しと称されたセイバーは、少年の願いを愚にもつかない
と切り捨てることもできていなかつた。

故郷に暮らす友とその家族。彼らの安らかな営みを守りたいという願いは至極切実で尊い。それにセイバーが聖杯戦争に参加してまで会いたいと思う人物は、正に人々のそういう願いのために己の命を散らしたのだ。

儂い願いの価値が分かるからこそ、思う所がないわけが無かった。

愛歌にもセイバーの葛藤は伝わっている。

そして、愛歌は知っていた。

セイバーのその迷いが、聖杯に頼らなくても解決できることを。

愛歌が自分の楽しみで口をつぐんだがために、このサーヴァントは悩んでいるのだ。

どうしようかしら、どうすればいいのかしら、と愛歌は頬に手を添えて考える。

だがそのとき、セイバーの片耳が何かの音を聞きつけて動いた。

瞬時にセイバーは愛歌を庇うように彼女の前に立ち、愛歌はその陰から顔を出す。

辺りは静かだった。遠くの方から街のざわめきが聞こえるが微かな音でしかなく、耳障りというほどではない。

そのまま数秒が過ぎて、愛歌はセイバーの陰から出、くるりと両手を広げて回った。

「……んー、誰かの使い魔に見られてみたいね。もう撤退したみたいだけれど」

捕まえて、見返してやろうと思つたのに、直前で逃げられちゃったわ、と愛歌は舌を出して言った。

「見られてた？キャスターとかにかい？」

「と、思うわ。今の時代の魔術師の水準じゃ無さそうなもの。……うん、でもこれでランサーとバーサーカー、キャスターには会えたわ。あとはライダー、アサシン。それに……アーチャーね」

指折り数える愛歌の横で、セイバーは虚空を睨んでいた。そこに術式の残滓があるかのように。

赤い斜陽が色白の顔を縁取る白い髪をくつきりと照らし出す。その横顔を愛歌は見つめた。

「ね、セイバー。次はアーチャーを探しに行きましょうか」

いいが、何故だい、と不思議そうに問うセイバーに愛歌は内緒よ、と笑って見せた。

Act—6

「状況を整理しましょう」

「……了解」

所と日が変わり、沙条邸にて愛歌はセイバーの前に座っていた。

机を挟んで愛歌とセイバーは向かい合っていて、彼女たちの前には一枚の紙がある。

そこに愛歌は七騎のサーヴァントのクラス名を書いた。

「セイバーはあなた、ランサーは北歐の戦乙女。バーサーカーは服装からして前世紀のひとかしら」

「私たちが出会ってないのはアーチャー、ライダー、キャスター、アサシンか」

「ええ。次にマスターだけれど、わたしの家の沙条。それにお父さんの旧友であり、極東随一の古き名家、玲瓏館。それにあとは、伊勢三つて古いお家があるわ。他は外来の魔術師ね」

愛歌の話を聞いていたセイバーは、白い指を伸ばして名前の一つを差した。

「玲瓏館……つてのは、この家みたいに屋敷を構えているんだよね」

「ええ。それにね、数日前からこの家は防御が神殿並みになっているわね」

「じゃあきつと、玲瓏館はキャスターを喚んだんだね。となると取る作戦は籠城か……」

「もしかしてセイバー、あなた玲瓏館の家を宝具でなぎ倒そうつて考えている？」

「そりやできなくは無いけない、とセイバーは頭の後ろで手を組んだ。

「やりたくないよ。街やら家を踏み潰すのは竜みたいで嫌だ」

「あなた、竜殺しだものね。欧州の竜殺しみたいに血を浴びた訳じゃないみたいだけど」

「はいはい、話が逸れているよ。玲瓏館にはキャスターがいる。それは分かった。……

愛歌、私を連れて玲瓏館内に転移はできるかい？中から攻めれば城は脆いよ」

表情を動かすこともなくセイバーは言った。

「できるできないで言えば、確かにわたしはできるけれど怖いわね。中から斬り飛ばす

つもり？」

「後ろから呪いを飛ばしてきそうな魔術師は苦手なんだ」

にこりともしないで、セイバーはとんとと紙を指で叩いた。

「あと厄介なのはアサシンかな。きみだけじゃなく、綾香やきみの父上も狙われかねな

いから」

「まあ、そうね。ここはわたしが結界を張っているから、ほぼ大丈夫だと思っただけだ。

……あとアサシンは、はぐれになってるようよ」

「はぐれ？」

「ええ。都心でね、人が殺されているのよ。主に夜の街を歩いている男の人たちなのだけど、彼らはみんな白い服の少女とホテルに入っては殺されてしまうそうなの。それに港区の倉庫で令呪を宿した魔術師の遺体があったらしいわ」

「……殺人事件は魂喰い。魔術師がマスターだとすると、アサシンは自分のマスターを殺したのか？」

かもね、と愛歌は頷いた。

「意見の食い違いがあったか、アサシンが狂ったか……。で、愛歌。その情報は何処から？」

「この聖杯戦争の自称管理者の教会からよ。神秘の漏洩は人が殺されるよりも上の禁忌だから、魂喰いで現界するサーヴァントは討伐してほしいのでしょう」

愛歌は頬杖をついて足をぱたぱたと振り、セイバーは眉間にしわを寄せて腕組みをした。

「とういかセイバー。あなた、鳥から聞いていなかったの？殺人事件のこと」

「鳥はそんなに街人の生き死には気にしないから言ってくれやしないよ。きみだって道端で鳥が死んでも気にしないだろ。それと同じさ」

セイバーはどこか投げ槍な、乱暴な口調で言った。愛歌は頬杖をついていた手を下ろして、紙の上に身を乗り出す。

「ね、セイバー。少し思っただけだけど、あなたの願いはお兄さんに会うことなのよね」「そうだけど、それが今更どうかしたの?」

訝し気なセイバーを無視して、愛歌は空中に人差し指で円を描きながら言った。

「あなたの兄の、アーラシユ・カマンガーはとっても強くて良い目の弓兵。なら例えば、聖杯戦争のアーチャーとかになってるかもしれないでしょ。そうなっていたら、あなたは どうするの?」

愛歌の透き通った碧眼がセイバーの黒い瞳を見据える。黒曜石の目は一度閉じられてから、もう一度開かれた。

「それはつまり、兄さんと戦えるかってことだろ。——うん、戦うよ。わたしは」

セイバーは首を横に傾けた。白い髪がさらさらと零れ、顔の上を不思議な陰影の模様が彩った。

「戦ってしまうの?」

「そりゃ、私たちはサーヴァントだからだよ。私たちは自分の願いのために現界しているが、まず召喚が成されないと何もできない存在だからね。召喚してくれた人に義理を通すべきだろ?」

尤もマスターが余程の外道だったら話は別だけれどさ、とセイバーは軽く言い、何でもないことのように続けた。

「私はきみのこと結構好きだもの。義理は通すよ。綾香にも頼まれたし、きみの父上にもさ」

「お父さんに?」

「うん。召喚されてすぐ、だったかな。愛歌を頼むって言われたよ」

ふうん、と愛歌は鼻を鳴らしてから窓の外を向いた。

「お父さん、ね。……わたし、お父さんには言っていないのよ」

「何を?……何を言っていないんだい?」

「わたしが根源に繋がっているってことを、よ」

くるり、と愛歌は頭を巡らせてセイバーを見た。透き通った瞳の奥に底なしの渦が垣間見え、セイバーは反射的に目を逸らしかけるのを堪えた。

「あのね、聖杯戦争は魔術師たちの悲願、根源に至るための大魔術儀式。七騎のサーヴァントの魂を触媒に、根源への渦へと至る道を作ることが聖杯戦争の根幹なのよ」

「——ん?七だって?」

「ええ。七騎よ。本当に根源に至るためには自分のサーヴァントも自害させなければならぬの」

「……」

願いのあるサーヴァントにとって、それは裏切りそのものだ。願いが叶うと聞いたから召喚に応じるのに、六騎のサーヴァントを倒したところで自害を命じられては堪らない。

さすがにセイバーも瞠目した。愛歌は構わずに続けた。

「でもわたし、初めに言ったでしょう？そんなところは、生まれたときから繋がっていたって。聖杯戦争なんて、わたしには最初っから無意味なの。あなたを令呪で自害させるなんてつまらないことも、するつもりはないわ」

でもお父さんには違うのよね、と愛歌は言った。瞳の奥の渦は消え失せて、晴れた秋空のような碧眼がセイバーを見ていた。

「お父さんはね、こう思ってるのよ。——わたしが聖杯戦争に勝ったら、わたしは消えるってね」

何故なら根源に至った魔術師は、皆帰って来ないものだから。真理に到達した者は、それきり現世に戻ることは二度と無いから。

「多分、お父さんはそれに思うところがあるのよ。悲願の成就を願う魔術師としては根源に一族がいたるのは喜ばしいこと。でも、父親としては歓迎できないのよ。だから割り切れていないところがあるの」

「……それは、人としてはとても良い父上じゃないのかい？」

「ええ。魔術師としては失格でも、人の親としては暖かい心だと思うわ。よく覚えていないけれど、お母さんの影響よ、きつと」

それを、聞いて。

剣の英霊は複雑な表情を浮かべた。眩しいモノを見るような、どこか羨まし気にもみえる顔だった。

「でもね、お父さんのそういう心つてまるきり見当がずれているのよ。だってわたし、根源に行く必要がないもの。聖杯戦争は根本からして、わたしには無価値なのよ」

「……ねえ、愛歌。聖杯戦争がきみにとって無価値だって、どうして父上に言っつてやらないんだい？」

「——どうしてかしら、ね。言っても、分かってもらえると思えなかったからかしら」

長く沈黙してからの愛歌の答えに、セイバーは肩の力が抜けたように机の上に突っ伏した。

「あら？セイバー、どうしたの？」

「いや……我が主はつくづく、なんかこう……」

上手く言えない、とセイバーは額に手を当てた。

「セイバー、呆れたの？それとも怒ったの？」

「どつちでも無いよ。……全く、聖杯戦争なんて願いの対価に、戦うだけで良いかと思っていたのにさ。マスターの生き方にまで話が踏み込んだら、困惑するだろ」

そうかしら、と主は言い、そうだよ、と剣の従者は頷いた。

セイバーは髪をかいて、気持ちを切り替えようとするかのように頭を振った。

「私の役目はきみの剣になることだ。それは変わらないよ。仮に——仮にさ、まだ見ぬアーチャーが兄さんだったとしても、戦うさ」

ああでも、戦う前に言いたいことはあるな、とセイバーは椅子の背もたれに身を預けた。

「言いたいこと？」

「まあ、色々だね、あるんだよ。別れたときには言えなかったこととか、伝えてくれつつ頼まれたこととかさ」

それを伝えた上でなら、セイバーには戦うことに躊躇いは欠片もない。

どころか戦って勝つてみたいとすら思う。

「私は兄さんに負けて、それつきりになってしまったからさ。悔しいだろ、そういうの」唇の端を吊り上げて、獰猛な猫のようにセイバーは微笑んだ。今まで浮かべていたような、どこか諦観の混じった笑みではなかった。

そしてセイバーはぱん、と手を胸の前で叩いた。

「さ、愛歌。お喋りはお終い。私たちはこれからどう行動すべきだい？アーチャーを探すかい？」

「……いいえ。ちよつと変更よ。——伊勢三のお家を探してみましょう」

「伊勢三？……ああ、さつき言っていたこの街にある魔術の家か」

ええ、と愛歌は席を立ち、東京の地図を棚から取り出して戻ってくる。地図を紙の上に広げると、一か所を指し示した。

「ここよ。奥多摩の山の中。霊脈の流れからすると、ここらの山一帯を根城にしているみたいよ」

「待った。山一帯だつて？」

「ええ。山一帯、すべてよ。大体の目途はあるけれど、探索は任せたわ。わたしはここで穴熊になりつつ見ているから。視覚の共有はこれくらいの距離ならば問題にならないしね」

見つけて、もしも伊勢三の工房に英霊がいたのならば。

「交戦して勝てそうなら倒せばいいし。無理そうならさつくり引き上げて来て。基本的に一撃離脱で行きましょう。他の陣営の情報が少ない今はね」

頬に手を添え微笑む愛歌に、分かったよ、とセイバーは頷いたのだった。

#####

そうして日が傾いた後のことだ。

セイバーは霊体になって、杉並区の沙条の屋敷を後にし、一路奥多摩へと駆けていた。愛歌は家にてセイバーと視覚を共有し、セイバー本人は戦闘体勢になっていた。

そう、夜なのである。

いつかに愛歌がバーサーカーのマスターの少年に言い放った通り、殺し合いの時間は間近だった。

『わたしはここで見ているから』

上機嫌に聞こえるマスターの声を聞きながら、何なんだろうなあ自分たち主従は、とセイバーは考えながら、一本の木の上に着地する。

目の前には暗い山が口を開けている。夜目は効くため、視界に支障はないのだが暗い山となると得体の知れない感じは収まらなかつた。

聖杯戦争において、まるで自分探しの旅をしているような構えで参戦しているのは、愛歌くらいのものだろうか。

自分にも未知が欲しい、と愛歌は気楽に言うが、未知が一つもない人生というのはきつと、ではなく間違いなく地獄に等しい。

願いが無い、と口では言っているが違うだろう。愛歌は自分の地獄を抜け出したいのだ。

ただその地獄は彼女以外には見えないし、感じ取ることも共感してもらおうこともできない。

慈しんでくれる親と慕ってくれる妹がいて、有り余る才能とそれを操る能力を持つていて。

そんな存在が地獄を感じているとは、誰も思わないし、気づかない。セイバーだって最初は分からなかった。

召喚されてからこの方、愛歌の笑顔があまりに朗らかだったから。親に愛されて育った子というのはこんなにも何の裏表もない笑顔を浮かべることができるのか、と思つたくらいだ。

——でも、愛歌には笑顔以外が無い、というか薄い。

バーサーカーのマスターに対しては困惑、セイバーに対しては興味。父親や綾香に対してすら、似たようなものだ。

それらの感情を示しているが、怒りや憎しみの顔がない。

だから昨日、愛歌の膨れた顔を見て、セイバーは単純に安心したのだ。この子もこういう風な顔をするんだ、と。

自分だつて一生かけて、人の世に溶け込もうとし続けていた。セイバーは誰かを導けるほど、上等な人間ではない、と本人は思っている。

英霊になったのも結果論だ。

沢山の人を竜から守りはしたが、それとて旅を続けるうちにそうなたただけで、最初から無辜の民を守ろうとしたり彼らが死んで欲しくないと思つて行動した訳ではない。

一番死んでほしくなかった人には、真つ先に死なれてしまった。だから強くなりた

かったのだ。誰よりも強くなったら、もうあんな思いはしないで済むと思ったから。

己一人の虚無を何とかしたくて生き続けたら、その積み重ねが自分を英霊にしていたのだ。

それでも、そういう人生を送ったからこそ言える。虚ろな心を抱えるのは辛いことだ。

まあ、セイバーは自分が他サーヴァントに負ける姿は予測できても、愛歌が現代の魔術師相手に負ける姿をさっぱり想像できないし、それが問題なのだが。

『セイバー、首尾はどう?』

「んー、奥多摩には着いたって感じかな」

『頼りないわね。サーヴァントにはちゃんと現代の知識もあるでしょう』

「あのね、東京全部の土地の知識が与えられてる訳じゃないんだよ」

軽口を叩き合いながら、セイバーは木の枝を蹴って、更に高い木の天辺に立った。

霊脈が最も乱れているのは、そこから北の方、という愛歌の通信が入る。

愛歌に言われた方向へセイバーは顔を向ける。同時に背中に寒気が走って、木から飛び降りた。

直後である。セイバーのいた空間を、矢が貫いた。

『セイバー?』

「狙撃だよ！アーチャーさー！」

首と眉間、心臓をほぼ同時に狙って飛んできた矢を顕現させた短剣で撃ち払いながら、セイバーは木の枝を蹴ってその場から離れた。

気配は隠していた。それなのに気付かれた。

単に視認される距離にまで近づき過ぎていたのだ。

『セイバー、あなた今、アーチャーって言ったのかしら？』

「弓を使う暗殺者がいるなら知りたいものだ、よっ！念話切るよ！」

言葉の合間で矢を躲し、セイバーは物陰に飛び込んだ。

恐ろしい射手である。

急所を正確無比に射抜こうとしてくる。対応が遅れば貫かれるだろう。

冷たい剣の柄を握ってセイバーは束の間目を閉じ、開くと同時に物陰から飛び出した。

たちまち矢が飛んでくる。

眉間に飛んできた矢は顔を背けて躲す。躲し、心臓へ向けての矢は剣で落とす、手足への矢は風を起こして僅かに逸した。

逸しきれずに数本が鎧に刺さるが、肉には届いていない。勢いを殺すことなく、矢が襲って来る方向へ、セイバーは躊躇せずに突っ込んだ。

遙か前方の木の上に小さな人影を捉えた瞬間、セイバーは魔力放出を最大にする。風を纏った流星となつて、劍の英霊は一直線に夜の山の空を切り裂いて飛んだ。飛んでく
る矢は風に巻き込まれて明後日の方向へと逸れていった。

木がへし折れ、鳥たちが一斉にざわめきながら飛び立つ。

人影の真上に到達した瞬間、セイバーは纏っていた風を消し、短劍の代わりに顕現させた大劍と共に落下した。

人影は飛び退こうとするが、遅い。両手で握られたセイバーの劍が大上段から振り下ろされる方が速かった。

頭の上にも迫つた劍を、その人影は手にした真紅の大弓で受け止めた。

劍と弓がぶつかり合い、セイバーはそこで相手の顔をよく見た。

「——え」

驚愕の声を上げたのは誰だったのか。

冴え冴えとした月の光が夜の山をただ照らしていた。

A c t — 7

—— おかしなひと。

ふと気付いたら、來野巽は耳の奥に残るその言葉を思い出すようになっていた。

言葉だけでなく、そう言った自分より歳下の女の子の瞳の明るさも。その横に控えていた白髪の少女が放った瀑布のような風も。

今のようにこうして公園のベンチに座っているとき、電灯の光の中に巽はそれらを思い出す。

—— ええ、殺すわ。

聖杯戦争を止める、と言った自分に言われたのは無邪気な殺害予告だった。

第一位の英霊、セイバーのマスターは、熾天使の翼を持つ階梯一位の魔術師で、そして巽より幾つか歳下に見える愛らしい女の子だった。

巽は運良く昼間に彼女に接触し、言葉を交わした。自分から探し出したのではなく、雑踏の中から簡単に見つけ出されたのだ。

友人を午後のお茶に誘うような朗らかさで、巽とバーサーカーに話しかけてきた少女は、巽の言葉に心底から驚いた風に笑い、無邪気に殺意を返した。

——夜に会ったら殺し合いましよう。

あの女の子にそう告げられたとき、巽は何も言えなかった。

巽は今まで生きてきてあんな風に何の虚飾も強がりもなく、ただ殺すと言われたことはない。だから何も返せなかった。自分のために誰かを殺すなんてそんなこと、思ったこともなかったから。

それでもあの子の言葉には嘘も虚勢もなかったことは分かった。

セイバーという巽より幾つか歳上なだけに見える少女も、巽の言葉に何かを動かされた様子は無かった。彼女が表情をはつきりと変えたのは、巽がバーサーカーを偶然に召喚したと言ったときだけだ。

『タツミ、考えごとかい？』

霊体になったバーサーカー、ジキルに語りかけられ、巽は公園のベンチから背を思わずもぎ離れた。

声に出して答えかけ、そうする必要は無いのだと心の中の声に切り替えた。

『何でもないさ。バーサーカー』

バーサーカー、ジキル博士は狂戦士と呼ぶには相応しくないんじゃないかと巽が思う

ほどはつきりした理性を持っていた。

彼の願いは、聖杯を手に入れた先にはない。

彼が召喚に応じたのは、生前の後悔故だ。

ジキル博士、と名乗った彼は生前自分の悪性を別人格という形で解き放つてしまい、たくさんの人を殺め、傷付けてしまったという。

学識深い理知の瞳の狂戦士は、巽に言った。

——自分の願いは、今度こそ初めから人を守れるように在ること。

だから、バーサーカーの願いは東京の人々を守りたいと思う巽に召喚された時点で、もう半ばは叶っているのだと言った。

でも、東京を守るためにはジキル博士はあのセイバーという少女を殺さなければならぬのだ。巽は友人に、あんな女の子を殺せと命じるのだ。

そんな簡単なことも、巽は分かっていたいなかった。分かったつもりにも、なっていただけだったのだ。

「バーサーカー、実体化してくれ」

ひとけのない公園のベンチにバーサーカーの姿が顕現する。バーサーカーも何かに悩んでいるように見えた。

——もし、自分が戦いを止めたいと言ったら。

バーサーカーは、何というのだろう。

來野巽がそう思いかけたとき、ふわりと夜空から光が舞い降りた。

「こんばんは、バーサーカーのマスター。また会いに来たわ」

否、光そのもののような可憐な少女が一人、何も無かったはずの虚空から姿を現したのだ。

「セイバーのマスター……!」

ジキルが叫び、巽の前に出る。

その手が懐に伸びたが、それより先に愛歌は笑って首を振った。

「違うわ。戦いに来たわけじゃないの。誘いに来たのよ。ほら、わたしはセイバーを連れていないでしょう」

何も持たない手を広げて愛歌は笑った。

半ば反射的に、『静止の魔眼』を使い赤く染まりかけていた巽の片目は愛歌の目を見た瞬間、元の色に戻った。

取り消したのではなく、発動ができなくなったのだ。愛歌の透き通った碧眼が、巽の方へ向けられる。

「あら、ちよつと変わった目を持つてるのね、あなた。……まあいいわ。わたし、戦いに来たのでは無いもの。あなたたちに話があるの」

「話だつて？敵のマスターだろう、君は」

「ええそうよ、バーサーカー。だけどそれが何なの？あ、セイバーのことを気にしているなら大丈夫。彼女はわたしがここにすることを全然知らないわ。ちよつと別な所で戦つてるから」

ね、と愛歌は手を合わせてお願いをするように巽を見た。

「……分かった」

どの道、この子からは逃げられないだろうと巽は悟つた。さつきも、少女は空間からいきなり現れた。漫画で見たテレポルトのような魔術をこの子が簡単に扱えるなら、巽にもバーサーカーにもどうしようもない。

愛歌は簡単にバーサーカーの横をすり抜け、ベンチの巽の隣にすんと腰を下ろした。

「バーサーカーのマスター。あなた、この戦いで殺される人を無くしたいって言つていたわよね。じゃあきつと、都心で起きている連続殺人事件のことも知っているでしょう？」

巽とバーサーカーが頷くより先に、それを今からわたしとあなたたちで止めに行く、と愛歌は明日の天気を言うように告げた。

「何を驚くの？あなたが言ったことじゃない。聖杯戦争を止めるつて、言い切つたのは

あなたよ」

「それは……」

反論が咄嗟に思い付かなかった。

凍った翼に、愛歌は音も立てずに近寄るとその肩にそつと触れる。

瞬間、翼は空中にいた。

眼下には夥しい光がある。それが、空から見下ろした東京の街だと気付く前に思わず翼は叫び声を上げた。

しかし瞬きの間に、足はしっかりとコンクリートを踏みしめていた。

「そんなに驚くことかしら。セイバーは高いところも平気で着いてきてくれたのに」

「……英霊と一緒にしないでくれ」

心底から翼は言った。

背中を支えてくれているバーサーカーの存在が頼もしい。彼も諸共に転移されたのだ。

「……で、ここは何処なんだ？」

こうなつたらもう、翼はこのセイバーのマスターに付き合うしかない。彼女の指先一つが動いて転移で地上に叩きつけられたら、それだけで死ぬ。

「何処って、これから事件が起こる場所よ。見てみて」

言われ、異はようやく自分たちのいる場所がどこかのビルとビルの間であることに気付いた。先程の公園とは似ても似つかない喧騒が背中の方から聞こえてくるが、裏路地は静かで微かに生臭い臭いがした。

「彼処よ。見えるでしょう?」

翠の布と白いレースに包まれた愛歌の手が暗闇を指差すと、手から光の球が数個生み出され、裏路地に蟠る闇を払った。

照らし出されたのは、白い髑髏の仮面だった。

「うわっ!」

異の目の前で何かが光る。

乾いた音がして、地面に叩き落されたのは黒い短刀だった。

「マスター、下がれ!」

ナイフを振るって短刀を叩き落としたバーサーカーが前に出る。髑髏の仮面の人影は瞬時に飛び退いて、ビルの壁面を蹴って跳び上がろうとした。

しかし、ふわりと愛歌が右手に雷を宿してビルの更に上に転移し、魔術を仮面の人影に押し当てた。

闇に火花が飛び散って、仮面の人間の体がどざりと路地裏に落ちた。魔術を浴びた白い髑髏面が真っ二つに割れて転がる。

「そう簡単には逃さないわ。こっちもセイバーに気づかれる前に帰らなくちゃならないの」

とん、と降り立った愛歌は腰に手を当てて巽の方を見た。

「そいつ……サーヴァント、なのか？」

「多分ね。あんな風に普通の人間は動けないもの」

ただの夜の女の人ならこんな短刀も持たないしね、と愛歌は地面から柄も刃も黒く塗られた凶器を拾い上げて手の中で弄ぶ。

たつた今、自分があればに刺されて殺されかけたのだと巽は今更のように足が震えた。

サーヴァントに近寄って見て、巽は更に驚いた。

「え、女……の子？」

愛歌の作り出した魔術の灯りに照らし出されているのは、艶かしい肢体を革の服で包んだ、小柄な少女だった。

「女の子、というよりはアサシンのサーヴァント、この事件の犯人よ。ああ、下手に近づかない方がいいわ。その子に触れたらあなた、死ぬかもしれないから」

そういう愛歌は、ぺたぺたとアサシンの体を触っている。

顎に指を当てて、愛歌はふうん、と鼻を鳴らした。

「一面も令呪の移植をしていないようだし、この子が殺人をしていたのは、本当に魂食い

のためみたいね。じゃあ、何故マスターを殺してしまったのかしらね」

「……魂食い？」

アサシンの傍らにしゃがみ込んで、愛歌は異の方を見上げながら答えた。

「人間の魂を食べて、サーヴァントが魔力を取り込むことよ。マスターを無くしたサーヴァントや、マスターからの魔力供給が十分じゃないサーヴァントが取る方法ね」

「魂を食べる……って、それ、殺すってことか？」

「当たり前よ。魂を食われて生きている人なんているわけないじゃない。この子も自分が生きるために殺したのでしょう。まあ、セイバーくらいに堅物だと、魂食いを全力で拒否するのだろうけれど」

アライメントが善寄りだと苦労性になるのかしらね、と愛歌は他人事のように呟いている。

「それで来野異くん、あなたはこの子をどうしたいの？」

当然のように愛歌から名前を呼ばれ、異は怯んだ。愛歌は一向気に留めず、地面の上のアサシンを指さした。

「放っておいたらこのサーヴァントはまた人を食うわ。そうするのは偏に自分が生きるためだけけど、あなたの守りたい無辜の人々を食らっているのに変わりはないわ」

どうするの、と愛歌は異の様子を測るかのように無機質な、底に渦を宿した瞳で言っ

た。

この子は自分の何を見ているんだ、と巽は状況も忘れてその瞳に囚われる。

「タツミ」

傍らのバーサーカーに名前を呼ばれて、巽の意識が浮き上がった。

バーサーカーの手には宝具である薬瓶が握られていた。あれを使えばジキル博士の理性は消し飛んで獣となり、そうしてようやく彼はサーヴァントとしてまともに戦闘を行えるようになる。

彼に命令すれば、ジキル博士は簡単にアサシンの命を奪うだろう。

見た目は、本当にただの女の子でしかない。

殺せという一言を、來野巽はどうしても舌の上に乗せられなかった。それが彼の限界だった。

沙条愛歌は巽のその様子を見ても何も言わなかった。ただ興味深そうに目を細めて、首を傾けただけだった。

そのまま愛歌はビルで区切られた夜空を見上げ、急に、あらと驚いたような声を上げた。

くるりと愛歌のドレスが翻り、アサシンの腕を掴むと何も無い空間へと放り投げる。音もなく空間に黒い裂け目が開いてアサシンを飲む。それと同時にバーサーカーが巽

を後ろに庇った。

愛歌とバーサーカーが揃って空を仰ぎ見、翼が目を白黒させている間に、かつんと乾いた音が裏路地に木霊する。

「驚いたわ、まさかこんなに早いだなんて」

愛歌の眩きと共に、ふわりと月の光を遮ってビルの屋上から新たな人影が舞い降りてくる。

「それはこちらの台詞ですよ、セイバーのマスター。このような夜に、従者を連れずに出歩くだなんて。あなたは困ったひとのようですね」

月を背に飛び降りて来たのは、大槍を携えた銀の髪の美しい女。槍を持ったまま、彼女はそう言っただけで笑った。

「ランサーのサーヴァント……!」

「あら、ばれてしまいましたか。そういうあなたはキャスター……ではありませんね。……ではバーサーカーでしょうか」

理性のある狂戦士とは珍しいことでもありますね、とランサーは身構えるバーサーカーと微笑む愛歌に視線を向けつつ、槍の穂先を下ろしたまま言う。

「セイバーは他所に行かせているの。それから、あなたのマスターのお薬を台無しにしたことは謝らないから」

一対一でサーヴァントと向き合いながら、愛歌は欠片も臆せずにつけてのける。

ランサーは長い睫毛に縁取られた目を伏せ、首を振った。

「構いません。あれは相当貴重な秘薬で、この戦いの最中に再び作ることは叶わないでしょうですが……。正直私としてはその方が良いでしょう」

にこりとランサーは今度は明るく微笑んだ。

「こちらのマスターからの命令はセイバーとの再戦でしたが、セイバーがいなければ仕方ありません。別の命令に従いましょう」

「あら、それはなあに？」

「この街で暗躍しているアサシンの発見、または撃破です。神秘の漏洩は、私のマスターにとっても好ましい事態ではありませんから」

へえ、と愛歌はただ肩をすくめた。たつた今アサシンを自分の手で何処かへやってしまったことなど無かったかのように振る舞う。

「悪いけれど、わたしたちは知らないわ。ランサー、あなたのような戦乙女の求める戦いはここには無いの」

「では、バーサーカーたちと並んで何をしていたのですか？」

「さあ。あなたに答える必要は無いわ。こんなに月が綺麗なのだもの。夜の散歩くらいしたくなるものよ。その答えじゃあいけないかしら？」

くすりと愛歌が笑った瞬間に、ばちんと音を立てて裏路地を弱々しい光で照らしていた街灯が弾ける。

電球から飛んだ火花を浴びながら、ランサーは視線を愛歌から外した。

「ランサー、戦いの気配を、あなたも今感じ取ったんじゃないかしら？ わたしたちにかまけるよりも、そちらに向かうべきではないの？」

愛歌の指が空の彼方を指し示した。

「……ええ。今宵はあなたの言う事に従っておきましょう。では私は、マスターの指令もありますので、これで」

言葉が終わるとランサーの体が光の粒子になる。異へ向けて一瞥だけをくれて、戦乙女はたちまちに消え、立ち去って行った。

それを見届けて、異はよろめきかけるが何とか踏みとどまる。

「……戦いって、何のことなんだ？ セイバーのマスター」

唾を飲み込んで、異は愛歌に聞いた。

愛歌はうーん、と少し困ったように告げた。

「セイバーがね、戦っているのよ。それも結構な敵と。藪を突いて大蛇を出しちゃったと言うか、眠れる竜を叩き起こしちゃったと言うか。……怪物退治はセイバーの十八番のようだけれど、このままだとちよつと厳しいかしら」

だからわたしも今日はここまでね、と愛歌は唇に指を当てて可愛らしく片目を瞑つた。

呆気なく瞬き一つを残して、沙条愛歌の姿はかき消えた。

後には異とバーサーカー、割れて明滅する電球だけが残った。愛歌と共に灯りも消え去り、路地裏には再び闇が巢食ってしまうのだ。

「……」

何も言えずに、來野巽はのろのろと月を見上げ、大きく息を吐くと裏路地から立ち去ったのだった。

A c t — 8

生きていた頃のセイバーは、名前をアフタルと言った。

山に捨てられ、たまたま霊鳥に拾われて、死なないから何となく生きていた子どもだった。

霊鳥でも、家族のことはもちろん大好きだった。けれど、成長するにつれてどこまで行っても自分は他の霊鳥たちとは姿形が違う、ということに気付いてしまった。

姿形が違う、どころの話ではないことは、後から教えられた。アフタルは、人間という鳥とはまるで別の生き物だったのだ。

かと言って、人里に降りたいとも思っていなかった。仲間である鳥の考えは分かっても、人が何を考えているかは分からない。

アフタルにとつては、ヒトとは自分を生まれてすぐに放り捨てた生き物でしかなかった。それも、高々髪の色が他と違った不吉な色だったからというだけで。

人の親にも事情はあったのだろうけれど、そう思ったところで自分は親にとつてはい

らないものだったのだ、という骨を嘔む寂しさが消えるはずもなかった。

だから、人の親のことは忘れることにした。

恨むほどに思い出がないのだ。自分に命をくれたことだけ感謝して後はどうだっていい、と思ひこむことにした。

なのにアフタルの姿形は何処までもヒトであつて、翼は生えてこないし、空を飛べもない。

心は鳥に近いのに、翼がなく。

姿は人なのに、心が伴わない。

何とも歪だと自分でも分かつていた。

しかしアフタルは、歪のままでも生きていける程度には体が強かったから、心が折れることもなかった。

そのまま生きていければ、アフタルはただ姿形が醜いだけの鳥として終わったのだらうけれど、そうもいかなくなつた。

時代が流れて人が増え、霊鳥には住みにくい時が近付いていたからだ。

住処の無くなつた幻獣たちは世界の裏側に行かなければならないが、ヒトのアフタルはついて行けない。

人としての肉体を捨てれば行くことができる、とは教えられたけれど、それはつまり

肉の器が死ぬということだから即答は出来なかった。

髪の色で人の親から捨てられ、肉体がヒトであるせいで鳥の親には迷惑がかかる。

どちらも、アフタルが何かをしたせいでそうなった訳ではない。ただそう生まれついてしまったからだ。

—— イヤだな。なにかしようとしたわけでもないのに、なんでわたしは生き方がうまくいかないんだろう。

アーラシユと会ったのは、ちょうどそんな風にアフタルが拗ねかけていた頃だった。

出会ったときに何となく、自分とこの人間は似ている、とアフタルは思った。その親近感、今になって思えば、互いが持っていた神代の残滓が共鳴したのだろう。

アーラシユを通して人の世界を見て、アフタルは人間が自分を捨てたような人間ばかりでないことを知った。

霊鳥の親と同じように、子を慈しむ人の親も居るのだと理解した。

自分はたまたまそういう人たちに巡り合わなかっただけで、別に人間すべてが怖いわけではないのだと、分かった。

そしてアーラシユは、彼らを守るために戦っているのだと言った。

自分にとっては、配下の兵や、その家族や他の奴らは皆守るべき愛する達たちだ、と快活に笑ってアーラシユが言ったことがあった。

それを聞いて思った。

この人は、自分より余程寂しい生き方をしているのではないのだろうか、と。

他の人間よりは、幾らか彼に近い肉体を持つているのに、アフタルにはアーラシユが守りたいと願う者たちの価値は、分らない。

人間として暮らしたことが無かったから。暮らしたいと思ったことが無かったから。

己の悩みしか考えられない自分の卑小さを、アフタルは初めて理解した。

——お前はまだ子どもだからさ。これから学べば良い。

と、アーラシユはそんな風に言った。

けれど、アフタルが気付くのは遅すぎたのだ。彼女が人らしい生き方を学ぶ前に、

アーラシユ・カマンガーに終わりの時が来たからだ。

——神より下されし救世の一矢を撃つ。そうすれば、戦いが終わる。

ただし引き換えに、アーラシユは死ぬ。

五体が珠の如くに砕け散る。

そういう運命が巡ってきたのだ。

——わたしは、たくさんの人たちが救われるより、あなた一人が死ぬことの方

がイヤだ。

掛け値なしに、それがアフタルの正直な心だった。でも、それだけは口に出せなかつ

た。言った所で、アーラシユをひどく困らせるだけだと分かっていたから。

必ずやり遂げる、と決めた男の決断を無知な子どもがどうやって覆せるというのだろう。

戦いを終わらせるには、神に作られた弓で矢を撃ち、国境を分かつかないという理屈は理解出来た。

長く続く戦いで、どちらの国々の人々も疲れ切つて、涙も乾き切つて、もうどうしようもなくなつていた。神の定めた国境、という切つ掛けを皆が欲していて、それさえあれば戦いは収まるのだ。

理屈は理解出来た。それが祝福されるべきことだということも。

ただ、納得だけが出来ないだけ。

どうしてあなたが死なないといけないのか、と思わずにいられなかったのだ。

それだけ子どもだった。

山を壊すほど争つて、アーラシユに負かされたのも、子どもが大人に突つかかっただけだ。

アフタルにとってはそれまでの人生、ただ一度だけの我儘だった。

結局、彼女にはダマーヴアンドの山から放たれた光の一矢を、眺めるしか出来なかった。

矢が大地を切り裂き砕く様を見て、静かに一人で泣いた。

山の中、傷ついた体を引きずって歩きながら、その日の朝、ふいにアフトルは朝日と共に喜ぶ人々に混ざろうと思った。

鳥の親には別れを告げた。寂しくはあったが、これでいい、という気もした。

山から離れて、人々と交わり、出会いと別れを繰り返し、そうしてアフトルは死んで英霊になった。

後悔もしたし、泣きもした。強くなりたくて、無謀なことも馬鹿なことも数多やった。けれどそれなりに幸せだったと思う。一つ所に留まらない、根無し草のような生き方が長かった人生も、最後の方には人の営みと共に生きることでもできた。

故に、穏やかな心でこの世を去って、セイバーとなったアフトルは、聖杯戦争の最中でも案外気楽なのだ。彼女は、自分の人生を完全に終わつたものとして認識している。

自分は人生を歩き切った者だから、生きているマスターに使い潰されても別に構わないのだ。無論いい気分はしないが、仕方ないかため息と苦笑で済ませられる程度である。

求められたなら応じるし、その過程で自分の願いが叶うならば万々歳。全力で努力はするがそれでも願いが叶わなかったならば仕方ないと納得し、また次の機会を待つ、というのが根本にあるスタンスなのだ。

底抜けに享樂的になつてゐる愛歌と上手くやれてゐるのも、セイバーのそういう氣樂さがあるからだ。

根源接統者故の愛歌の人への無理解さも、人と違う心の形を持つていた者だからか、まるで共感できない訳ではない。

成り立ちも理由もまるで違うが、セイバーは愛歌が人に対してそういう見方しかできないことは、悪ではないと認識している。

だから遊んでいるなこのマスター、とため息を付きながらも付き合ふし、積極的に守りもするのだ。

——しかし、今度ばかりはマスターは遊びすぎだった。

#####

月の照らす奥多摩の山の中、大剣を振り下ろした白髪の少女と、大弓で大剣を受け止めた青年とが向き合っていた。

しかし、剣と弓の競り合いは一瞬であった。

少女の方が風を操って後ろに飛び、宙で一回転して山の斜面に着地したからだ。

距離を取って少女は青年を見上げ、青年はやれやれと肩を竦めた。

「つたく、セイバーってのはお前か。第一位の剣の英霊、竜殺しのアフタル」

「真名を即効でばらすな、兄さん。いや、アーチャーのサーヴァント、アーラシユ・カマングーと言った方が良かったかな？」

剣を下ろさず、セイバーは何処か愉快そうに言い、アーチャーは苦笑した。

「聖杯戦争の定石は、戦いの中での真名の探り合いらしいけど……」

「生前の知り合いならば、そんなことは関係ないってワケだ。お互い、運があるんだか無いんだか分からんな」

「違う、とセイバーは同じく苦笑して、剣を無造作に肩に担いだ。

「ん？戦わないのか？」

「そんな訳ない。戦うに決まってるだろ。ただまあ、折角願いが叶ったワケだし、即効戦うのも芸が無いってだけだ」

色々言いたいことがあるけれど、今はこれだけ言っておく、とセイバーは言葉を続けた。

「こんばんは、兄さん、あなたにまた会えて、本当に良かった」

飾り気なく、剣の英霊はそう言つて笑つた。

弓の英霊は気まづげに頬をかいた。

「そう素直に言われたら戦いづらくなる。……お前、良い顔で笑えるようになったんだな」

セイバーは、今度は種類の違う笑みを浮かべた。悪戯好きの子どものような顔だつた。

「まあそれはね、色々あつたからだよ」

「色々、か」

「うん。色々さ。結構長く生きたからね、私は」

そうか、とアーチャーは一つ頷いた。頬を一瞬緩めた後、彼は弓を構え直す。セイバーも剣を肩から下ろして、切っ先を持ち上げた。

黒い剣と赤い弓に、銀の月が光を投げかける。

「俺もお前も、今は互いにサーヴァント。ならやることは一つだろう」

「あなたに言われなくなつて分かつているよ。————戦おうか、アーチャー。本当

はもつと言いたいことがあるんだけど……戦つていれば多分伝わると思うから、言葉は省く」

向き合う二人の間に風が吹く。

巻き上げられた落ち葉がかさりと鳴った、その瞬間、セイバーは地を蹴つて弾丸のように飛び出した。

アーチャーは後ろに飛び、空中から生み出した矢を無数に放つ。

その弾幕にも、セイバーは臆さなかつた。

大剣で斬り払い、体捌きで躲し、身を低くすると下から横薙に斬撃を飛ばす。

鎌鼬の刃がアーチャーへと向かい、彼は木を盾にしてそれを避けた。鎌鼬がぶち当たった木は、めりめりと悲鳴のような音を立てて倒れる。

恐ろしいなとアーチャーは笑いながら言い、姿勢を低くしたままのセイバーへと今度は山をも抉る威力の矢を続けざまに放った。

セイバーも、今度は先程までのように軽い矢ではないと察知。

くるりと回転し、魔力放出で勢いを上乘せして、矢を叩き落とす。

しかし地面に突き刺さった矢が地を抉り、セイバーの足場が崩れた。倒れてくる大木が、セイバーの視界には邪魔だった。

体勢を崩したたらを踏んだ剣士に向けて、追撃の矢が放たれる。

容赦なしかとセイバーは笑い、何本かが鎧に刺さるのには構わずに矢を斬り払うと大剣から手を離す。そしてそれを、アーチャーへ向けて全力で投擲した。

「ッ!？」

投げ槍のように大気を切り裂いて飛んでくる大剣で、一瞬アーチャーの視界が塞がれる。逆手に持った短剣に持ち換えたセイバーは、地を這う蛇のように体を落としてアーチャーに迫る。

アーチャーが召喚した矢も斬り、セイバーは剣を振りかぶってアーチャーの腕に斬りつけた。

「つて、硬ッ!」

しかし、驚きの声を上げたのはセイバーの方だった。アーチャーの腕に剣を弾かれ、彼女の動きが止まる。

機を逃さずアーチャーの足が蹴りのために後ろに引かれた瞬間、セイバーは風を巻き起こして跳びあがり、生い茂る高木の枝の中に身を隠した。

同時にセイバーは隠行し、アーチャーも気配を見逃す。地に突き刺さっていた剣も魔力へと変わり、形が大気に溶けた。

硬すぎる、とセイバーは樹上から見下ろして呟いた。鎧も付けていない腕に剣で斬りかかったのに何故、刃の方が弾かれるのだ。おかしいだろう。

自分の筋力ランクから生み出された攻撃を上回られるのは、予想外だった。

一方のアーチャーは速い、と感心していた。セイバーは無軌道に、獣のように動き回る。人が練り上げた武術に見られる『芯』が無いものの、身体能力頼みの荒武者ではない。どうすれば相手を殺せるかを考えている上、何をしてくるか分からないという意味では厄介であつた。

当たり前だが、あのセイバーは姿形に子どもの頃の面影が残つていても、中身は全く違うのだ。強くなつたと、アーチャーは思った。

——まあ、竜を殺して英霊何ぞになつたんだから、当たり前か。

——そう言えば、生きていた頃から負傷とは無縁のひとだつたつけ。

互いにそう納得する。

同時に、お前の本気はこんなものでは無いだろうと言うことも見切つていた。

しかし、剣と弓を二人がきつく握り直した瞬間、また別の殺気が瀑布のように押し寄せた。

雷鳴が轟いて光が走り、木が焼き焦がされる。無差別に木が薙ぎ倒され、セイバーはアーチャーの背後に飛び降りざるを得なくなつた。

「何だこれ？ お前んとこのマスターの仕業か？」

炎に顔を照らされたアーチャーに向けてセイバーは首を振つた。

「違う！——それよりアーチャー、来るよ」

月を背にし、一際高い木の上に四本足の獣が姿を現す。

人の貌と獅子の体持つ熱砂の獣は、英霊二体を見つけると聞く者を恐慌させる魔性の吠え声を上げた。

顔色を変えることなくセイバーは剣を、アーチャーは弓を獣へ向けた。

「ただの幻獣じゃなさそう。まさか、神獣？」

「ああ、そうらしいな。……そら、避ける！」

跳躍してきた獅子の一撃を、英霊たちは左右に避けて回避する。

砕かれた木々が飛び散り、砂塵が舞う。セイバーは鬱陶し気に鼻を鳴らした。

折角戦っていたのに、強くなった所を見てもらいたくて戦っていたのに、何処の誰の横槍なのだろう。腹が立つことこの上なかった。

かの有名な砂漠の神獣を召喚するとなれば、相当強力な英霊である。セイバーは不機嫌を消し、気を抜かずに獣を見据えた。

獣の名はスフィンクス。其れはエジプトの天空神ホルスの地上での化身。ただで済む相手ではない。

「竜よりはマシ……か」

やけくそ気味に、セイバーはしかめ面でスフィンクスの吐き出した業火を鎌鼬で斬

る。真空の刃で斬られた炎は霧散し、そこにアーチャーの矢が飛来して、スフィングスの目に突き刺さった。

視界を奪われた獣は吠え狂うが、とどめを刺そうとするセイバーの気配を感じ取り、スフィングスは盲滅法首を振り回して、炎を吐き出した。

たちまち山が火炎地獄に変わる。アーチャーにもセイバーにも火を消しとめる術がない。虚空から矢や剣を作り出せても、水は出せないのだ。

「アーチャー、先にあの獣を倒す！ 異論は？」

「ない！ 前は任せたぞ！」

叫び、アーチャーは跳躍して距離を取る。弓兵は本領を發揮して超遠距離から狙い射ち、剣士はただ前線に出る。

そしてセイバーは、矢の突き刺さったスフィングスの目が修復される様を見た。

「高速再生か。……何処の英霊の眷族だ、あれ」

舌打ちしかけるセイバーの頭に、聞き慣れた声が届いたのはその瞬間だった。

『もしもし、セイバー？ 回線、繋がってる？』

「今立て込んでるから後にしてくれ！」

セイバーの動揺に合わせて突っ込んで来たスフィングスを躲しながら、剣士は怒鳴った。

『どれどれ……。あら、相手は砂漠の神獣なの』

視界を共有しているらしく、愛歌は冷静な声で続ける。

『高速再生に、かなりの知能もあるみたいね。セイバー、一人で大丈夫なの？』

「アーチャーと共闘中だよ！」

スフィンクスの鋼鉄をも引き裂く爪を、セイバーは剣で受け止める。ぎちぎちと火花を散らして獣と剣士は真つ向からぶつかり、セイバーの白い髪が生臭い息で揺れた。

セイバーの足が押されて一歩後ろに下がった瞬間、鈍い音がして、神獣の額に矢が突き刺さる。

堪らず仰け反る神獣の喉元が晒された。セイバーは前へと踏み込み、剛毛の生えた喉元に深々と大剣を埋めた。

それでもスフィンクスの目から命の光は消えない。

「——そうだと思った。神獣だもんな、オマエは」

セイバーは眩き、突き刺した剣を両手で握りながら、神獣の頭を抉り取るようにして上へ振り抜いた。

血が吹き出し、スフィンクスの頭のあつた場所は消し飛ぶ。

だが、獣はそれでも死ななかつた。まだ動こうとする足に矢が立て続けに突き刺さり、獣が地面に縫い止められる。

「黄泉へ、帰れエツ！」

叫び声と共にセイバーが獣よりも高く跳び上がり、胴体を両断した。

その勢いを殺しきれずに、セイバーは山の斜面を転がった。手足を踏ん張ってセイバーは止まり、真つ二つになった獣が徐々に魔力へ還っていく様を見届けた。

『やった？セイバー』

「……まあ、ね」

はあ、とセイバーは血が飛んだ頬を拭う。

辺り一面は炎である。誰がどうやって鎮火するのか、考えたくなかった。

伊勢三の偵察も何もない。

この神獣は恐らく、伊勢三一族のサーヴァントの手駒だ。あれだけアーチャーとやりあえば、ばれるのも当たり前だった。

「……やり過ぎたな」

頭に血が上りすぎたと、セイバーはため息をついた。そのまま鞘へと剣を戻しかけた手が、止まる。

スフィックスとは比べ物にならない、何か莫大なオーラを持った者が、新たに降臨しようとしていた。

そうして地に立つ剣士を見下ろす位置に、黄金の光が顕現した。

逆立つ黒髪に、黄金の瞳を持つ丈高い男である。

金の瞳を開き、男はセイバーを見下ろすと獰猛な笑みを浮かべた。

——これ、勝てそうにないな。

とセイバーは嘆息し、男の瞳を静かに見返したのだった。

Act—9

太陽の王オジマンディアス。

砂漠の神獣スフィンクスを奥多摩に放ち、それが撃破されたあと突如姿を現した黄金の男は、そう名乗った。

史実においてはラムセス二世の名の方が通りが良く、その威光は極東の島国においても響いている。

セイバーの前に姿を現した彼は、此度はライダーのクラスを冠して顕現したと語った。

我が威光の一欠片を退けたことに免じ、引くことを許す、とライダーは言う。

そこまではライダーも上機嫌と言えるほど饒舌だったのだが、直後に愛歌がセイバーの傍らに転移してきたことで、様子が変わる。

愛歌を『怪物女王』ゴトニアテロンと呼び、これと敵対すると宣言した。

サーヴァントがマスター個人と敵対すると宣言するなど、考えたこともなかったセイバーは戦慄したし、愛歌は単純に驚いていた。

何故と問うセイバーに、太陽王は答えず、ただここは場が相応しくない、準備が整い次第、我が神殿にて貴様ら三騎と相見えると言つて、黄金の太陽船からの魔術砲撃と、スフィンクス三体を彼女らに向けて放ち、自身は霊体化した。

魔術砲撃は何とか凌ぎ、スフィンクスは遠距離に徹していたアーチャーからの掩護もあつて討伐したのだが、その頃には朝日が登り山の結界も強化されていたために、セイバー主従もアーチャー主従と共に撤退することになった。

成り行き上、二騎と二人は朝も早くから開いている喫茶店にて雁首揃えて並ぶことになった。

「太陽王かあ……。またとんだ名前が出てきちゃったわね」

そう言うのは赤い髪をした、若い快活な雰囲気的女性。

一晩中、不眠不休でアーチャーに戦闘用魔力を供給し続けていた疲れなどまるで見せずに、彼のマスター、エルザ・西条はコーヒーマスターのカップを傾けながら言う。

「My name is Ozymandias, king of kings: Look on my works, ye mighty, and despair! ……そういう詩があつたわね、確か」

完璧な発音で古い英語の詩の一節を呟くのは、『怪物王女』とライダーから呼ばれた愛歌だった。

愛歌はそのまま、目の前に置かれているコーヒーも飲まずに椅子に腰掛けたままのセイバーの頬を指で突いた。

「セイバー、頭に血が上って山でやらかしたことへの反省はお終い。今はライダーをどうにかする方法を考えるのが先でしょう？」

白髪の少女は、しばらく湯気の上がるコーヒーを眺めていたがこくりと頷いた。

「……了解したよ」

背筋を伸ばしたセイバーに、エルザは屈託なく笑いかけた。

「まあ、ドンパチ派手にやったのはこっちのアーチャーも同じだし、セイバーを見かけたら叩いてって言ったのはあたしだから。いや正直、剣と弓であんなことになると思っ
てなかったし」

おまけに聖杯戦争で英霊が生前の知己に遭遇するとは考えてなかったんだけど、とエルザは続けた。

「知り合いつてのなら、そもそもあのアラオと俺たちは同時代人だぞ」

同じく黙っていたアーチャーが肩をすくめて言った。

「そうなの？」

マスター二人が声を揃えて問い、セイバーが答えた。

「私たちの中では、オジマンディアス王は正に、エジプトに君臨していた現人神のような

王様として記憶されている。史実との違い云々はよく分らないけど……まあ、そこは今のところ関係はない」

重要なことはオジマンディアスがどれだけ強力な威光で世界に轟いていたかで、それをセイバーたちは実感を持って記憶しているということだ。

「俺やセイバー単騎じゃなあ。……悪いが、あのファラオを倒すのは無理だと思うぞ」

「同じく、同意見」

と、あつさり英霊二騎は白旗を上げた。

「ちよつと第一位サーヴァント、しっかりしてちょうだい」

愛歌がセイバーの頬を引っ張るが、セイバーはじゃれかかるその手をやんわり退けた。

「あのスフィンクスを十体、二十体召喚された上に黄金の船から絨毯爆撃でもされたら、私一人じゃライダーは倒せない」

「俺みたくに弓だけでもなあ。牽制は出来ても仕留めるとなるとジリ貧だ」

お互いの宝具の性能は別にしてライダーに単騎で挑んでは勝てない、相打ち覚悟でもライダーの宝具次第ではそれも怪しい、というのが彼らの結論だった。

単騎では足止めが精々だと言う。

「……ライダーの言った、あなたたち三騎を待つっていうのはそういうこと。あの王様

には、三騎士を相手取っても負けない自信も実力もあるってことね」

「史実のラムセス二世も戦車でヒツタイトに単身飛び込んで相手の待ち伏せを台無しにしたっていう話があったわね、そう言えば」

愛歌の言葉を最後に沈黙が降りた。

現状取れる手段の中で何が最も良いのかは、各々見えている。サーヴァントたちは共に目を閉じるか、腕組みをして黙る。

マスターに采配を任せるといふ彼らの意思表示だった。

紅茶を一口飲んでから、愛歌はエルザへ手を差し伸べた。

「手を組まないかしら？アーチャーのマスター。成り行きとは言え、これも縁でしょう」

「そうね。あたしもそう思ってた。お互い真名もわかっちゃったことだし。あたしはエルザ・西条。よろしく」

「沙条愛歌よ。よろしくね、エルザ」

エルザと愛歌は握手し合う。

そのまま互いの持つ敵の情報を交換する、という話になった。

「わたしたちはバーサーカー主従に遭遇したわね。マスターの名前は來野翼。わたしより一つか二つ歳上の男の子よ。バーサーカーの真名は不明だけど、多分前世紀の欧州圏の英霊と思うわ」

愛歌がバーサーカーのマスターの歳を口にした瞬間、エルザの目が揺れたようにセイバーは見て取った。視線を横にずらすと、アーチャーは極微かに首を振る。

セイバーは沈黙を続けることにした。

「そっか。あたしたちはランサーに遭遇したわ。ランサーの素性は恐らく北欧の戦乙女。マスターの名前は分からないけど、三十くらいの男よ。使う術は鍊金術ベースで、時計塔辺りの魔術師かな」

ランサーに遭遇したものの、マスターの情報は知り得ていなかったセイバーは軽く驚く。

何でも、ランサーとアーチャーの遭遇戦を観測できる位置に陣取っていたマスターをエルザがたまたま視認し、軽く交戦したという。出方を見る限り、その魔術師は戦闘向きでは無かったとエルザは付け加えた。

童顔のエルザだが、案外荒事に慣れているのだなど、セイバーはぼんやり思った。

愛歌は指を折って数え唄のように言葉を唱えた。

「ライダーのマスターは伊勢三。セイバーはわたし。アーチャーはあなた。バーサーカーは巽。キャスターは玲瓏館。アサシンははぐれ。ランサーは外からの魔術師さん」
「大分揃ったね。で、ひとまずあたしとあなたはライダーを倒すまでは戦わない。できるならランサーやキャスター辺りと接触して、ライダー戦に備えたい。……それで良い

？」

「その話、乗ったわ。でもランサーと同盟するとしても、こっちが交渉するのはちよつと避けたいの。……セイバーが、ランサーのマスターの取つて置きの魔術を壊しちやつて、心象が良くないと思うから」

く、とアーチャーがそのとき笑いを溢す。セイバーがふんと鼻を鳴らし、東の間空気が緩んだ。

それから、ライダーの示した刻限まではアーチャーとセイバーは遭遇しても戦わず、情報を手に入れば共有する、という約束を魔術の下に交わし、彼らは別れた。

マスター同士の話し合いの最中黙っていたセイバーは、最後にじやあまたね、とアーチャーに向けて手を振り、アーチャーもまたなど言い、マスターに従つて別の方向へ向けて歩きだした。

「マスター、きみ、アーチャーが誰だか知っていたんじゃないのか？」

アーチャーたちの姿が見えなくなつてすぐ、セイバーは剣を鞘から抜くような勢いで聞いた。半ば確信に満ちた言い方に、愛歌はあつさり頷いた。

「知っていたわ、最初から」

「……」

セイバーは黙つて道の先に視線をやる。

朝の道に人は疎らで、ゴミを漁っていた野良猫が一匹愛歌たちに驚いて走って行った。

「怒っているの？」

「私が怒りそうだと思うなら、最初からやるんじゃないよ、愛歌。……大体、私が仮に兄への情に負けてきみと敵対していたらどうするつもりだったんだ」

愛歌は意外そうに自分より高い位置にあるセイバーの黒い瞳を見上げ、それから手を後ろで組みながら言った。

「……どうもしなかったと思うわ」

「ああ、きみはそうしただろうね。……あのね、きみが私を楽しみのために見るのは良いよ。それはきみの自由なもの。私だってそう考えてたさ。でも今はさ、自分のサーヴァントと敵対してもいい、なんて振る舞いはやめてくれよ」

アーチャーの正体を隠されていたことより、愛歌が自分の命を賭けて遊んでいたことの方をセイバーは怒っていた。

「怒るの、そつちななの？」

「……そりゃあ私で遊んでいたきみに怒ってないわけじゃないし、きみの享楽癖をそれもあるかと今まで流していた自分にも腹が立つてるよ」

ああ畜生、とばかりにセイバーは帽子をぐいと被り直した。

「何でだかはよく分からないけど、ライダーはきみ個人を敵にした。きみの首が欲しいと言った。きみは、今の人間にしてはかなりありえないくらい強いけど、単体じゃオジマンディアス王には勝てないだろ」

「そう、ね。確かにそうかも」

「だったら私っていうサーヴァントを遊びじゃなく、きちんと使ってくれ、マスター。きみはあいつを倒して生き延びなきゃならない」

どうしてライダーがサーヴァントの私をすつ飛ばしてマスターを敵に見なしたか分からないんだけど、とセイバーは最後に少し腹立たしげに付け加えてから黙った。何より、それがセイバーを一番苛立たせているのだった。

沈黙したまま歩き、セイバーは口を開いた。

「あー、くそ。でも、やつぱり愛歌にはありがとうって感情が大きいんだよ」

「え？」

「だってきみは私を喚んでくれただろ？こんな、怪物を斬る事にしか能がない英霊なのにさ。そうじゃなきゃ私はアーチャーに会えなかったんだから、やつぱりありがとうってのが一番合ってると思うんだ」

頭の後ろで手を組んで、セイバーは気軽に言った。愛歌は首を振ってから口を開いた。

「……ねえ、わたし、セイバーは底抜けのお人好しで、ついでに楽天安んじやないかと思えてきたわ」

「一応褒め言葉として聞いてくよ、それ」

足元の石ころを蹴飛ばし、朝日を背にして、セイバーは愛歌を真っ直ぐ見た。

降参、というように愛歌は両手を上げる。

「わかった、わかったわ。わたしのセイバー。マスターとしてのオーダーよ。ライダーからわたしを守って。……わたしと一緒に戦って」

「改めて、確かに承ったよ、沙条愛歌」

招き猫のような、明らかに慣れていない敬礼をして、セイバーはにと人好きのする笑顔を向けた。

愛歌も苦笑を返し、剣の主従は朝日の下で微笑みを交わした。

「ちなみにマスター、もう秘密はなし？他のサーヴァントの真名、本当は分かっているなんてオチは勘弁してくれよ」

敬礼をやめたセイバーの言葉に、愛歌は目を逸らした。

「ちよつと愛歌？何で目を逸らす？」

マスターはしばらく胸の前で手を組み合わせていたが、観念したように答えた。

「……うちに今、アサシンがいるって言ったら、セイバーは驚く？」

直後に通りに響き渡った驚きの声に、早起きの鳥が数羽驚いて羽ばたいて行ったのだった。

#####

「……あれが、アフタルって子？あたしが夢に見た子がセイバーだったの？」

剣の主従が歩き去ったのと逆方向に伸びる道にて、エルザは霊体化したアーチャーに

尋ねた。

『ああ。それとも、竜殺しって言った方が良いか』

「あなたの故郷辺りにあるおとぎ話なんだっけ。竜に苦しむ村に現れ、それを倒した剛の者。ただし、《竜を倒して村を救った》という伝説しかなくて、場合によつては老人とも言われているけど」

『そりゃ、アイツが白髪だからだろ。生まれつきな色を勘違いされて伝わっちゃまったんだろうさ。俺にも国を割つた後に生き延びたつていう伝承もあるからな』

しかし、アーチャー本人の記憶では、矢を射た瞬間にアーラシユは五体が砕け散つていた。宝具『流星^ス一^テ条^ラ』は正にそれを再現している。つまり使えばアーチャーは消滅するのだ。

「そうね。アーラシユ・カマンガーと名無しの竜殺しに生前繋がりがあつたなんて伝承、あたしは知らないし。もしかしたら、現地にはあるのかもしれないけど」

『真実なんて分からもものさ。俺たちだつて自分の記憶が絶対とは言えないしな。……ま、俺やセイバーのことはもう良いだろ。あのライダーの方を考えるべきと思うがな』
そうね、とエルザは苦笑しようとして何とも上手く笑えなかった。

「……七人もマスターがいて、内二人が子供なのね」

代わりに誤魔化すように、エルザは口走る。

可憐な女の子にしか見えなかったセイバーのマスター、沙条愛歌。彼女が告げたバーサーカーのマスター、來野巽も、歳は愛歌と同じく十代半ばかそれ以下だという。

エルザも聖杯戦争で子どもと戦うと、想定していなかった訳ではない。

魔術師の家に、表の社会の倫理道德を求めるのはまるで無意味だ。才能があるならば、幼い子どもでも魔術師として矢面に立つ。それが常識として当たり前存在する。頭では分かっていたのに、実際にそういう子を見て動揺したのはエルザの方に理由がある。まだ幼かった自分の亡くした子と、愛歌の無垢な瞳がほんのわずかに被ったのだ。

それでも、動揺を悟られはしなかったと思う。『すべての母と子に救済を』という願いのために、エルザも覚悟を決めているのだ。

未だすら見通す千里眼を持つアーチャーには、エルザの一瞬の葛藤も分かってしまったているだろうが、アーチャーは分かっている何も言わないでいてくれる。

アーラシユとはそういう英霊だった。

そのアーチャーが、わずかに声に苦味を混ぜた。その声に、ついエルザは立ち止まる。どこかで鳥の鳴き声と羽ばたきの音がする。東京の街は、早々と目覚め始めていた。

『あの嬢ちゃん、沙条愛歌と言ったか。あの子は多分見た目通りの子じゃないな』

「それは当たり前じゃない？魔術師で、聖杯戦争のマスターなんだから」

『……それだけじゃなくてな、もつと本質的にだ。何というか……あの子はどつか精霊
じみてるぞ。俺たちと見ている世界がちよつとズレてる感じだ』

千里眼を持つアーチャーをして、沙条愛歌は見ている世界が違っていた。

「邪悪ではないが善でもない。些細な切っ掛けで容易く善悪どちらにでも転び、気まぐ
れに凄まじい力を振るう精霊のような、人ならざる気配すら感じた」と、アーチャーは
語った。

「セイバーは知ってるのかしら？」

エルザの見た限りでは、沙条愛歌はセイバーにじやれていてセイバーの方も愛歌を軽
くあしらっていた。

己の願いを叶えるためお互いを利用しているだけの関係だったなら、決してできな
いだらう感情のやり取りが、セイバーと愛歌にはあった。ちょうど、アーラシユのエル
ザへの気遣いのように。

『当然気付いているだろうさ。気付いていて、それでも構わないんだろ、セイバーは。子
どもには弱いしな。そこはお前と似ているな、エルザ』

何よそれ、とエルザは今度は屈託なく笑った。

「アーチャーも、セイバーのことを妹みたいな奴って言ってたけど戦うときは戦うのね」
『……まあな。それが俺たちサーヴァントって輩で、あっちも戦いたがってた……って

のは言い訳か。単に俺もセイバーがどれだけ強くなったか確かめたかったのさ』

ちよっと狂戦士じみてたか、とアーラシユは苦味の一欠片もなく言った。

「かもね。それで結果は？」

『強くなっていた、筋も良い。あれなら本当に竜を倒せたんだろう』

朝日の中に、エルザは精悍な笑顔を浮かべているアーチャーを幻視する。

きつとあのセイバーも似たような笑みを浮かべるんだろうと、エルザはふと思ったのだった。

A c t — 1 0

沙条綾香にとって聖杯戦争はよく分からないけれど大切な儀式、という認識だった。お父さんは雰囲気怖くなって、家にいることも減った。それは少し寂しかったけど、反対にお姉ちゃんが変わった。

姉はよく笑うようになったのだ。おはよう綾香、と廊下で会ったら先に言ってくれ、魔術や学校のお勉強をしていると、ふらりと現れて教えてくれる。

そういうことは、聖杯戦争前にはなかった。

綺麗で何でもできるお姉ちゃんが、そうして自分に関わってくれるようになったのは嬉しい。ただ当然、お姉ちゃんは最近家にいないことの方が多い。朝昼晩問わず、何処かに出掛けているのだ。

聖杯戦争前になかったことはまだある。

屋敷に姿を現すようになった、セイバーという名前の人だ。

おばあさんみたいな真っ白い髪なのに、歳は姉より幾つか上にしか見えず、時々庭の

真ん中に座つて鳩や雀、燕や鳥を肩や手に止まらせている変わった人だ。

セイバーは綾香が見る限り何をするでもなく、ふらふら屋敷を歩いている。姉に呼びつけられたときはふいと姿を消すが、綾香が話しかければちよつとぶつきらばうな口調だけで、ちゃんと答えてくれた。

セイバーは何でも、お父さんに聞いたところによれば聖杯戦争に必要な存在だそう。どう必要なのかは綾香には分からないのだけれど。

その飄々としているセイバーが、かなり急いだ風にして姉と共に屋敷に帰ってきたとき、綾香はちよつど起きたところだった。

玄関先で何か物音がすると思い、覗いてみたらそこにはガラス窓から差し込む朝日を浴びてセイバーと姉が佇んでいたのだ。

「起きたのね、綾香」

なんて姉は言つて、笑顔と共に綾香の頭を軽く撫で、セイバーと一緒に奥の部屋へと消えて行く。セイバーはすれ違い様に、小さく綾香に頭を下げて行つた。

「愛歌とセイバーが戻つたのか？」

それを見送つた綾香の後ろから声がする。

振り向けば、少し目の下に隈を作つた父が立っていた。

「お、おはようございます、お父さん」

「おはよう、綾香。……付いてきなさい」

言つて、父はにこりともせず朝の日課の魔術の修練場へ向かう。

「……ねえ、お父さん。お姉ちゃんとセイバーは、なにをしているの?」

姉がセイバーと共に聖杯戦争をしているということは分かっている。それ以外の答えが返ってくるはずもないのに、つい綾香は聞いていた。

「……聖杯戦争だ。大切な儀式なのだから、綾香はただ毎日を過ごすことだけを考えていなさい」

お父さんはやっぱりそう言うんだ、と綾香は心の中で俯きながら、はい、と答えた。中庭を通り過ぎるとき、少し思い立って綾香は本邸を振りつた。

気のせいかな、二階の部屋にほっそりとした人影が動いていて、こちらを見下ろしているような気もした。

けれど、誰なんだろうと綾香が見返す前に、窓辺の人影は消えていた。

「綾香、何をしている?」

「あ、はい!」

おまけにお父さんに名前を呼ばれてしまう。

慌てて跡をついていきながら、綾香はぼんやりした砂のような不安を噛み締めていた。

——お姉ちゃん、無事でいてくれるんだよね。

この儀式が終わった後も、ずっと朗らかな姉とお父さんと暮らせれば良いのに、と綾香は誰に願うでもなく思った。

#####

セイバーが愛歌によって引き合わされたアサシンは、褐色の肌をした少女の姿形をしていた。

見た目だけで言えば、アサシンは愛歌よりは歳上、セイバーよりは歳下である。

ただし肉体の艶めかしさはアサシンとセイバーでは比べるべくもない。アサシンの体には、不自然なままでな女性らしさ、言ってみれば艶と色気が備えられていた。

黙して佇むだけで、男の情欲を掻き立てそうなアサシンを見て、セイバーは彼女の暗殺の仕方を察した。

「こっちがアサシンよ。ええと、真名は静謐のハサン。今はわたしと二重契約中なの。供給魔力は絞っていたから、セイバーの戦闘に支障は無かったはずだけど」

愛歌とセイバーが使っている沙条邸の一室にて、無言で向き合うセイバーとアサシンの間で愛歌はそんなことを言う。

「……二重契約って、いつそんなことを？あと令呪はどうしたんだ？」

「契約したのはあなたが昨晚奥多摩に行ったあとわりとすぐよ。公園で巽を見つけたから、一緒にアサシンを探しに行ったの」

巽の願いへの想いを、意志の強さを、愛歌は何となく試したくなったそうさ。たまたま目に付いた巽とバーサーカーを引っ張って、都心へ赴いた愛歌は魂喰いで魔力を得よ

うとしていたアサシンを単身撃破。

異はしかし、アサシンを殺せとどうとうバーサーカーには言えなかった。

そのまま愛歌がアサシンを回収したところで、彼女の撃破をマスターから命じられたランサーにばったり遭遇。これを何とか誤魔化して躲し、回収したアサシンを沙条邸へ放り込んでから、ライダーとセイバー、アーチャーの所に転移してきた、というのが愛歌の昨日の行動だった。

全て聞いて、八面六臂のマスターの行動にセイバーは絶句し、文字通り頭を抱えた。

「……じゃあ、令呪は？」

「あなたの分を一画使っているわ。でも、別に無くてもいいの。アサシンはとつてもわたしに懐いてくれているから」

「？」

きよとんと首を曲げるセイバーを置いて、愛歌はアサシンの手を取る。

そのときにアサシンが微かな喘ぎ声ももらした。閨の中の睦事のようなその声音に、セイバーはぎよつとした。

アサシンと手を握りあつたまま、愛歌はセイバーに言う。

「ハサンはね、こーやって誰かと触れ合いたかつたんですつて。全身が触れたら死ぬ毒に染まっているこの子は、誰かの温もりを欲して聖杯を求めたの。だから、触つても死

なないわたしはハサンの願いを叶え続けていることになるの」

「あー、つまり彼女は令呪が無くても裏切ることは無いって?」

「……はい。我が主、沙条愛歌さまに私はすべてを捧げます。……この体も、心も、命も」
水晶玉が擦れ合うような声で、アサシンが言う。

「セイバー、あなたは私を信用しなくて良い。ただ私は、主のために動くだけだから。決して裏切りはしない」

アサシンは狂気すら感じさせる凜とした瞳で髑髏の仮面越しにセイバーを見た。

固い決意の籠もった言葉は、セイバーも一瞬怯ませかける。

それを眺めていた愛歌は、ぼんと手を打った。

「セイバー、あなた確か、頑健スキルをAランクで持っていたわよね」

「ああ。だけどそれが何か?」

「じゃあきつと大丈夫よ」

えい、と愛歌は可愛らしい声と共にセイバーの手を取って、静謐のハサンの手を握らせた。

セイバーは顔色一つ変えずに首を傾げ、アサシンは目を瞬かせた。

「ほらやつぱり。セイバーは頑丈だもの。良かったわね、アサシン。わたし以外にもあなたに触れて平気な人がいて」

笑った愛歌は、サーヴァント二騎の手を取って部屋の真ん中に置かれた机の所まで彼女たちを引つ張る。

机の上には、東京の地図が置かれていた。

「と言うわけで、対ライダーのために状況整理に入るわ。どうやらわたし、ライダーに目を付けられてしまったみたいだから、しっかり守ってちょうだいね」

口でそう言いつつ、愛歌は何処か楽しげだった。

アサシンが生真面目に胸に手を当てて誓うのを横目に見ながら、セイバーは肩を竦めて愛歌の反対側に座った。

それを待つてから、愛歌は白い紙を取り出してきて、また七つのサーヴァントクラス名を書き出した。

今度はその横に、マスターたちの氏名が書き込まれる。

「これでアサシンとセイバーは同一陣営になったわけだけど。……アーチャーとわたしたちは、ライダー戦終了までは不可侵。ランサーはアーチャーたちに任せるとして、問題はバーサーカーとキャスターね」

頬杖をつく愛歌の前で、セイバーは身を乗り出して地図の一点を指差す。赤く塗られたそこは、玲瓏館邸の場所だった。

「ライダーに、キャスターと組まれたくない。神殿規模の工房を短期間で作れる相手が、

ライダーを魔術で援護すると思うとゾツとする」

「でもね、そのキャスターは玲瓏館のサーヴァントよ。伊勢三と玲瓏館には、極東の名門同士という繋がりもある。同盟を組みやすいと思わない？」

極東のそれなりの名門であるのは沙条家も同じだが、伊勢三のライダーが沙条のマスターである愛歌を敵とした以上、少なくとも伊勢三との同盟は不可能だ。

セイバーは立ち上がった。

「それじゃ私は、玲瓏館宅に今から行って、同盟出来ないか聞いてくるよ」

「今から？」

セイバーは首を縦に振った。

「今からだ。ライダーのいう刻限とやらがいつか分からない以上、時間がないだろ？やれるだけのことは何でもやるさ」

「……そうね。じゃあ、セイバーは玲瓏館へ行ってきて。わたしはアサシンと異の所へ行くわ。特に疲れてもいないし」

アサシンがそこで、褐色の指を動かして紙の上に記された異の名を指差した。

「タツミとはバーサーカーのマスターですが、彼を倒しに行くのですか？」

「違うわ。誘いに行くのよ。……異はね、一般人なの。戦力としてはあまり頼りにはできないわ。バーサーカーを含めてもね」

「では、何故？」

「他の魔術師にバーサーカーを取られちゃうと困るからよ」

愛歌は珍しくきつぱりと言い、アサシンの手を取る。

「じゃあまたね。セイバー、わたしはアサシンに守ってもらうから。令呪もあるし」
「了解」

セイバーは霊体化してかき消え、愛歌は空間転移でアサシンと共に姿を消す。

一瞬で誰もいなくなった部屋の中、机の上の地図だけが朝日に白々と照らされていた。

玲瓏館邸の規模は沙条邸のそれより大きかった。愛歌と綾香の父、沙条広樹氏曰く、裏の世界に住む魔術師にしては珍しく、表の世界でも政財界を統べているという。

世にはそういう魔術師もいるんだ、とセイバーはそれを聞いて思う。聖杯戦争のもみ消しも、玲瓏館の世俗の権力でどうかしている部分があるのだろうか、とも。

生前では世捨て人のような魔術師しか知らなかったセイバーにとつては意外だった。霊体化して玲瓏館邸に急行したセイバーは、門前で実体化した。玲瓏館邸は全体を森に囲まれており、門前からでは本邸は緑の奥に遠く霞んでいた。

隠されていたサーヴァントの魔力が解放され、邸内にざわめきが走つたのをセイバーは肌で感じ取る。

どうやって進もうかと思う前に、扉が開く。セイバーが庭園に踏み込んだ途端、直後に魔力が収束した。輝く魔力は人型になり、長い黒髪に、白い長衣を纏つたの男の姿となる。

「……玲瓏館のサーヴァント、キャスターとお見受けするが？」

「如何にも。そう仰るあなたは沙条家のサーヴァント、セイバーですか」

「ご名答」

一見したところ、当然ながらキャスターは立ち方にも隙があり、戦闘向きの間人では無いように見えた。

美しい女のようにも見える、線の細いキャスターは、感情を読ませない笑顔でセイバーを見た。

「あなたの用向きを当ててみせましょう。玲瓏館との同盟の申し入れ、違いますか？」

「分かっているなら話は早い。昨晚の戦い、そちらは見ておられたらどう？」

「ええ、無論。そして先にお答えします。それはお断りしましょう」

セイバーの片眉がぴくりと跳ね上がった。

「ライダーの伊勢三陣営と、もう同盟を結ばれたのか」

「察しが早いですね。ええ、その通り。よって今、あなた方は我らの敵です」

キャスターの右手が持ち上がり、セイバーを取り囲むように炎、氷、土の塊が空中に顕現した。

「エレメンタルか。……あなたは正統なキャスターのようだな。聖杯への願いは、さしずめ根源への到達といったところかな？」

現代風の衣のままセイバーは大剣を右手に換装し、軽々と肩に担ぐと口の端を吊り上げて笑った。

キャスターは笑顔のまま、手を振り下ろす。炎と氷が刃となり、土塊が津波となつてセイバーに襲い掛かる。

セイバーは回転した勢いのまま炎と氷を切り裂き、土塊は魔力放出により巻き起こした風で吹き飛ばし、片手で腰の短剣を抜いてそれをキャスターへと投げつけた。

短剣は的を外さずキャスターの額に突き刺さるが、その姿は呆気なく硝子のように砕

け散った。

「それは幻影です。……しかし、あなたの力の一端は分かった。今日はこれにて終いにします。我ら玲瓏館はライダーと共に戦場へ臨みましょう。マスターへとそう伝えなさい。あなたは道中、お気をつけて」

軋んだ音を立て、閉じていた門が開く。

セイバーも大剣を消し、魔力放出の弾みで頭から飛んだ帽子を拾うと被り直した。

失敗か、とセイバーは苦い顔で玲瓏館邸を一度だけ振り仰いでから、敷地を出た。

結局、セイバーはキャスターの風貌とエレメンタルを扱うという情報しか得られなかった。愛歌に記憶を読み取ってもらえば、キャスターのことも更に分かるかもしれないが、当初の目的は見事に失敗だった。

白髪を帽子の中に押し込め、セイバーは閑散とした街を歩く。

電線に止まってこちらを見下ろしている鳥、冬空を鳴きながら飛んでいく雀を見上げたセイバーは、ふと往く道の先に人影があるのに気が付いた。

「昨晚振りであるな。怪物王女が走狗、剣の英霊よ」

騎兵の英霊、太陽王オジマンディアスは、驚きで動きを止めたセイバーに向けて、凜猛な顔を向けたのだった。

Act—11

聖杯戦争では、原則として日の出ている間は戦闘は行われない。

閑静な高級住宅街でセイバーの前に姿を現したライダーも、その原則を破るつもりはないらしかつた。

ただセイバーと、話をしに来ただけだと言う。断るといふ選択肢は端から無く、セイバーは無表情でライダーと長閑な公園にいた。

ライダーも昨晩見せた王笏を持った戦装束ではなく、太陽船に乗っているわけでもなく、現代風の衣装を纏っていた。黒のジャケットを羽織った姿は、苛烈さという点では昨晩よりは幾らかましではあつた。

「ライダー、私に何の用なんだ？戦いをこんな所で始める気か？」

「戯けが。相応しい舞台を整えると言つたであらう。幼くも忌まわしき怪物王女の走狗よ」

ライダーは金の瞳を細めてセイバーを睨めつけ、セイバーは肩をすくめて組んでいた

腕を解いた。

「どうして私のマスターをそう敵視する？あなたが倒すべきはサーヴァントであつてマスターではないはずだ」

このライダーなら、マスター殺しという搦手も取る必要はないほど強いだろうに。

「善の英霊たる貴様ならば分かるだろう。あれは世に害を成す。いずれ、世界を喰らうものになるだろう」

「何だそれは。……それが地上の神たるファラオの裁定か。ならば覆すことは有り得ないってワケだ」

「然りだ。貴様こそ怪物王女の側近くに侍つていれば分かるであろうが。それとも、貴様は己が願いの為に主の振る舞いを押し留めはしない類の傀儡か？」

金の瞳と黒の瞳がぶつかり合つて、見えない火花が飛んだ。

「傀儡じゃないさ。私は、いずれ世界を食らうから、いずれ不吉になるから、そういう理由で幼子を消そうとすることが、見過ごせないってだけだ。そんな理屈は、もうたくさんなんだ。あなたは言葉にする必要がないほど偉大な王だし、私より余程多くのものが見えているんだろうけれど、私は退く訳には行かない」

尤も、幼子という言葉が壊滅的なまでに似合わないのが沙条愛歌という存在なのが、とセイバーは胸中で呟く。

ともあれ沙条愛歌には親がいて、妹がいる。愛歌には無条件で彼女を慈しんでくれる人たちがいて、ライダーの言うように世界を壊すモノに愛歌はなっていない。少なくとも今、このときにおいては。

笑ったり怒ったり疑問を抱いたり、小悪魔というには取まらないほど悪魔的なところもあるけれど、それでもセイバーをからかったりする愛歌の人らしい部分、怪物^{ゴトニアテローン}王女ではない愛歌をセイバーは信じ、それを守るために奔走する。

ライダーは視線の鋭さをわずかに緩めた。

「大局を見ることはなく、あくまで己が目の前の事象のみを信じる、か。いや、たまたま己が目に残ったという理由だけで、民草を怪物の暴虐より救い続けた貴様にしてみれば、そちらの方が相応しいか。……善なる心を持つが故に、人の欲望に翻弄され使い潰されやすい英雄の典型よな、貴様は」

ライダーはつまらなげに鼻を鳴らした。

「あの娘の人としての皮はまだあまりに脆く、弱い。そして薄皮の下に蠢くは怪物たちの王女である。それを倒した後であれば、余は違うことなく世界を救うだろう。この煩雑、混沌とした世界が余の豪腕を振るうに値するかは、見極めが必要であるがな」

太陽王から殺気にも似た威圧が放たれ、セイバーに向かう。

セイバーは一つ頷いただけでそれをやり過ぎした。武装してすらいらない相手の気配

だけで、怯んではいられないという意地だった。

「セイバーよ。貴様の主への想いだけは真実と見ておこう。……身の丈を越しているその気概に免じ、余も戦いの中で今一度あの娘を見極めることとする。戦では人の本性が現れる。あの娘の脆い人らしさが戦場でも保たれたのならば、余も考えを改めよう。……ま、貴様ら三騎士の首は貰うがな」

「……恩情、感謝する。太陽王」

全く感謝の念を感じていなさ気な渋面のセイバーに向けて、ライダーは不敵な笑みを溢して歩き去って行った。

はあ、と白い吐息を吐いて、セイバーはライダーの去ったのとは逆の方向へと足を向けた。

英霊二騎の話は平行線を辿った。

ライダーにとって、ファラオの決定は絶対。ライダーは彼言うところの、王の直感で愛歌を世界の敵になり得るとした。

セイバーにとって、沙条愛歌は庇護すべき対象。彼女は今日の前にいる愛歌の、人たる部分を信じている。

話を通じる訳もなかったが、それでもライダーは戦場で愛歌を見極め直すと言った。つまり彼が考えを変える余地はまだあるのだ。

「つて言っても、結局、東京大決戦は避けられないか」

ああ怖い怖い、とセイバーは口では唱えながら足を大地に叩き付けるようにして歩いた。

ライダーの気配が完全に消え、玲瓏館の邸宅からも離れてからセイバーは愛歌へと通信を繋いだのだった。

#####

來野巽の下宿の扉が、無遠慮に叩かれたのは冬の朝だった。

扉の覗き穴から外を見たバーサーカーの顔が一気に引き締まる。セイバーのマスクだ、と振り返ったバーサーカーが嘔き、巽は瞬時に眠気が吹き飛んだ。

逃げるか否か巽が判断できる前に、扉は呆気なく開かれる。
昨日ぶりの少女はにこやかに入り口に立った。

「おはよう、巽にバーサーカー。朝も早くから悪いわね」

一欠片も悪いとは思っていないさそうな口調で、愛歌は部屋に上がり込むと、卓袱台の前に膝を揃えて座った。冬という季節から外れている、翠のドレスの裾がふわりと畳の上に広がって、殺風景な四畳半に華が咲く。

空間転移で問答無用に押し入って来ないだけ、愛歌は気を遣っている方なのだろう。

その傍らに髑髏の面を被った黒衣の少女が顕現する。バーサーカーはアサシンに厳しい視線を送るが、アサシンは仮面の奥の瞳を揺るがすことなく、黙って愛歌の横に控えていた。

「あら、そう言えばあなたたちはアサシンとは昨日ぶりよね。この子、今はわたしのサーヴァントだから、他所に行っているセイバーの代わりの護衛にしているの」

つまりまたセイバーはマスターにハブられたのか、と異は一度しか見えていない白髪の少女が気の毒に思いかける。

愛歌が現れる度翻弄される異は、半ば諦めに近い心持ちになっていた。

「……何しに来たんだ？セイバーのマスター」

「別に殺し合いじゃないわよ。今は日中だもの。単に同盟の誘いに来たのよ」

「同盟？」

「ええ。対ライダー用の同盟」

愛歌は端的に語った。

奥多摩を舞台にして昨日セイバーとアーチャーを同時に相手取り、まだ底の見えなかったライダーが、太陽王オジマンディアスだったことを。

「オジ……何だって？」

「オジマンディアスよ。それともラムセス二世って言った方がいいのかしら」

ともあれかくもあれ、愛歌はそうして語った。同盟を組んでライダーを倒すのに協力してほしい、ということ。

「そんなに強いのか、ライダーって」

「強いわ。東京をみんな燃やしてしまえるくらいには。勝つ為にならそう言うことも多分ライダーはやるでしょうしね」

空恐ろしいことを、愛歌は平気で言つてのけた。

「ライダーは強いのだ。とつても強いのだ。仮にこれでキャスター辺りと組んでしまつたら大変なのよ。加えてあなたのバーサーカーまであつちに回つちやつたら面倒だから、わたしに来たのだ」

「俺が、そつち側に付くと思ふのか？」

「うん？ さあ、あなたの決めることだからわたしは知らないわ。大方あなた個人は東京を壊すようなサーヴァントの味方はしないだろうけど、あなたからバーサーカーを奪つて、マスターになりたい魔術師はいるでしょ？ そういう人にあなたたちが襲われたら面倒なのだ」

これは聖杯戦争だもの、と愛歌はびんと指を立てて言つた。

「忘れていかもしれないけれど、聖杯戦争に勝てば何でも願いが叶うのだよ。戦いに参加したくて東京に赴いて、でも聖杯に見染められずに終わつた魔術師たちだつているわ。そういう人たちからすれば、一般人の巻き込まれただけのマスターなんてまだ狙い目があるわ。令呪はね、奪おうと思えば奪えるのだよ」

「セイバーのマスター、きみは何を……」

バーサーカーの叫びにアサシンが反応し、狂戦士と暗殺者が同時に立ち上がりかけるが、愛歌は虫を払うように無造作に手を振つた。

「バーサーカー、これは可能性の話。あなたは異を氣遣つて言わなかったのかもしいないけれど、怒らないで頂戴」

バーサーカーは唇を噛む。

さらりとこやかに愛歌は異を脅していた。

愛歌たちの方につかなくと言えば、魔術師たちという危険に異は晒される。東京を守るどころではなく、自分の身を自分で守らなければならぬ事態になっているところとが、ようやく異は胸に迫つて来た。昨日異に凶刃を振るつたアサシンも、そこにいる。それが分かつて、異にはまだ分からないことがあつた。

「……なあ、セイバーのマスター。何でアンタはそういう魔術師たちみたいにしらないだ？」

沙条愛歌はきつと、來野異を小鳥みたいにあつさりと縊り殺すことが出来るのだらう。

そもそも家に押しかけてこられた時点で異は詰んでいる。

しかし、異を脅したり翻弄したり、極めて気軽に修羅場へと引き摺り回してはいるけれど、愛歌はこれまでの所異個人を直接に害そうとはしていない。

愛歌は答えを探すように目を虚空に向けた。

「……言われてみればそうね。そつちのほうはずつと簡単よね。お料理するときにお

鍋の代わりに圧力鍋を使ったり、電子レンジを使うようなものかしら。でも、そういうことはしないの」

愛歌は首を振った。

「わたしがあなたみたいな人間をやったって分かったら、セイバーは面倒くさくも陰で嘆くだろうし、綾香は大いに悲しみそう。そういうのは嫌なの。お料理と人間は違うものよ。苛立ちそうなくらい回りくどいけれど、人間と付き合うにはちゃんと時間をかけるべきだと思わない？」

「……」

「答えがないなら、わたしが正解ってことにしておくわ。それで、どうするの?」

イエスとノー、どっちなのかしら、と愛歌は卓袱台越しに巽の方へ身を乗り出した。バーサーカーの方は敢えて見ないで、巽は愛歌の碧眼を見据えた。

「……イエス。イエスだよ。そもそも、俺には他に答えがないだろ、コレ」

「そうかしら。あ、あと忘れていたかもしれないからちゃんと言乗っておくわ。わたしは愛歌。沙条愛歌よ。あなたの名前は知っているから名乗らなくても良いわ、巽」

よろしく、と愛歌は手を差し伸べる。

悪魔と契約するような気分で、巽はひんやりした小さな手を取った。

「じゃあ、セイバーを呼ぶわね」

異の手を離してから、誰の答えも聞かずに愛歌の胸元が輝き、十数秒後には、白髪を帽子で隠した少女が玄関口に現れる。

入れ替わるように、アサシンの姿が薄れて消えた。

「早かったわね、セイバー」

部屋に入ってきたセイバーは異とバーサーカーに向けて軽く頭を下げ、帽子を取ると部屋に入ってきた。

「きみが急げって言うから、すつ飛んで来たんだよ」

愛歌の横に座り、セイバーは異の方を見た。

「……何だ、バーサーカー主従との用はもう済んだのか」

「そうよ。あなたの方は？」

「ごめん、失敗した。キヤスターはライダーと組んだのが確定」

セイバーは無表情で言い、愛歌は困ったように卓袱台に頬杖を付いた。

「あら、やられちゃったわね。じゃあキヤスターの情報は？」

「黒い髪をしたエレメンタルを自在に操る優男で、ヘンな形の剣を持ってた。詳しくは私の記憶を読んでくれ」

ややぶつきらばうにセイバーは言った。

エレメンタルだのと言われても、異にはさっぱり分からない。

逆にバーサーカーことジキル博士には引つ掛かりがあったのか、エレメンタルの単語に反応する。

「エレメンタル……。そのキャスターは、五大を操ったのかい？」

「バーサーカー。すまないけど私にはよく分からなかった。炎と氷と、あと風に襲われたってことしか。全部斬ったけど、あんな程度がキャスターの全力な訳もないし」

「そうよ。このセイバーは魔術のことはからきし駄目なもの。必要とあれば最愛の身内とも殺し合いを始めちゃうような、あなたよりバーサーカークラスの似合いそうな女の子だもの」

ぼんぼんと愛歌はセイバーの白い頭を叩きながら言った。

「生憎だね、こちとら怪物を斬ることしかしてなかったんだよ」

その手を躲して、セイバーは開き直るように横を向いた。

見ただけなら白髪の少女と金髪の女の子がじゃれているだけという穏やかな光景なのに、と異はため息を零した。

「それでマスター、次何をするのか決めたのかい？」

愛歌の手を抑えつつ、異とバーサーカーの様子を伺いながら、セイバーは己のマスターに向けて尋ねた。

待つてましたとばかりに、愛歌は頷いた。

「うん、わたしもね、考えてはいたの。ライダーって何だか知らないけど、わたしを消しちゃいたみたいでしょう？でも、そのライダーだってこの大騒ぎの賞品が欲しいのに、変わりはないと思うの」

「……ああうん、まあ。そうだろうね。ライダーは、世界を救うって言っていたし。案外受肉とかをするつもりかもしれないな」

「でしよう？だったらね、その優勝賞品を、こつちが握ってしまえないかしら。人質みたいに。ライダー以外の相手にしても、聖杯の在り処を先に見つけておくのは有効だと思うわ」

取っておきの玩具を見つけた子どものような愛歌の笑みと、バーサーカーの呆気に取りられた顔、セイバーの諦めと笑いの混じった見た目の年齢とそぐわない不思議な表情を、巽は順繰りに見た。

見てから、口を開いた。

「……悪い、ちよつとおれにも分かるように説明してくれ」

情けないと思いながら、巽はそう目の前の少女に頼んだのだった。

A c t — 1 2

「僕はね、正義の味方になりたかったんだよ」

東京の二月の寒空の下で、緑眼を灰色の雲に向けて呟いた青年がいる。

「正義の味方？」

青年から少し離れたところで鳥を肩に止まらせている白髪の少女、セイバーは鸚鵡返しにバーサーカーの言葉を繰り返した。

「ああ。僕は生前僕自身の過ちが原因で、多くの人を傷付け、殺めてしまった。そのことを僕は悔いでいて、その一念でサーヴァントとして顕現したと言っても過言ではないのさ」

へえ、とも、ほお、ともつかない声でセイバーは鼻を鳴らした。

沙条の屋敷前にて、バーサーカー主従とセイバーとは何をするでもなく時間を食いつぶしていた。

愛歌の発案で聖杯を探そうということになったものの、魔術がからきし駄目なセイバーと素人の異では何の役にも立たないので、外に出されたのだ。アサシンは愛歌に付

き従ったままだがセイバーは特に気にすることもなく、沙条邸の門番を務めながら、歌混じりに鳥を腕に止まらせていた。

夜になるまでに聖杯の場所を見つけ、見つけたならばアーチャー陣営にも伝える、と愛歌は言っていた。

愛歌が本気で探そうと思ったなら、どれだけ聖杯が嚴重に隠されていたとしても、恐らく夜までには見つけられるだろう。そして夜になり、聖杯の場所が分かったと愛歌が言えば、アーチャー陣営は何か接触してくるだろう。

アーチャーのマスター、エルザ・西条は願いを抱いて聖杯戦争に参加した外様の魔術師。聖杯に直接に関わりのある話なら、見過ごしにはできないだろう。

それまではセイバーは暇だった。暇だからと鳥から街の話を聞いていたところに、バーサーカーが口を開いたものだから、セイバーは彼の方へ目をやった。

「それじゃ、きみも大して聖杯はいらないのか。私やらアサシンやら、この戦いの参加者はそんなのばっかりだな」

「ああ。そういうサーヴァントが集まったのは本当に珍しいと思っているよ。そして僕の願いは異のようなマスターに召喚された時点で、半ば叶っている……。と思っていたんだけどね」

バーサーカーは重い息を吐いた。翼は朝から愛歌に叩き起こされた反動か、公園のベ

ンチに座ってまどろんでいる。寒空の下で寝こけるほど、愛歌に神経を削られたのかと思ふと起こすのは気の毒な気もした。

彼がまどろんでいる最中に言うということは、マスターには聞かれたくない話なんだろうな、とセイバーは察した。

「思っていたってことは、今は違うのかい？」

「違う、というより揺らいでいるんだよ。……僕はサーヴァントだ。自らの願いを叶えようと思う亡霊でもあり、同時に主を守るための力でもある。でも、僕はさっぱり主を守れてもいない。どころか、僕という神秘に出会わない方がマスターにはきつと良かったはずだ」

確かに、と言う代わりにセイバーは目を伏せた。

東京で殺し合いの儀式が行われているということを知らず、魔術という裏の世界があるということも知らず、一般人として真つ当に生きるのが、きつと來野翼という少年にとつては幸せだろう。正義感に突き動かされて命を落としていては、あまりに救いがなさすぎる。

生真面目な見た目通り、バーサーカーはそこに悩んでいた。それに理由はどうであれバーサーカーのこの正義感の強さが、異に聖杯戦争から逃げ出すという選択肢を取らせなかったのは確かだ。

人として優しく真つ当な精神のサーヴァントが、同じく善良な気質のマスターを死地に連れて行ってしまっていたことは、セイバーには皮肉な構図にしか見えなかった。少なくともちつとも笑う気になれる類ではない。

「でもさバーサーカー、正義の味方なんていう難行、どこの誰にできるんだよ」

バーサーカーが目線を上げる。あー、とセイバーは余計なことを言ってしまったと後悔するように肩を落とした。腕を振って鳥を空に飛ばし、足元に散らばる枯れ葉を拾い上げ、それをむしりながらセイバーは独り言のように言葉を続けた。

「正義なんて人や時代によつて変わつてしまうだろ。誰にも受け入れられる正しさなんて、この世のどこにもないよ。ここは私たちが生きていた時代でもないし。だったらせめて、私はマスターの味方であらうって思うだけさ」

「それはマスターが、サーヴァントの願いを叶えてくれる存在だからかい？」

「……意地の悪い聞き方は似合つてないよ。バーサーカー」

セイバーの黒の瞳が、すつと細められる。バーサーカーはすまない、と小さく答えた。別にいい、とセイバーは千切られ、虫食いになった葉を投げ捨てた。

「普通ならマスターが願いを叶えてくれるって期待するから、サーヴァントつてのはマスターに従うんだろ。そっちが当たり前の構図だと思う。そういう意味じゃ、私は半分叶ったから呑気なものだし、だから一番の優先事項に自分の悲願じゃなくて、マスター

の安全を持つてくることができているわけだけど」

「そうかな？」

「さあ。あくまで私の見解だからな。バーサーカー、きみ、何だかよく分からないが色んなことを学んだ学士なんだろ？無学な私に聞くより、自分で考えた方が良いと思うぞ」
「……僕は学問を修めたと言っても、荒事のこととは都市犯罪くらいにしか関わらなかつたんだが」

「ほんとにバーサーカーらしくないな」

葉をぶちりと両手で千切つて、セイバーは呆れ顔とも何とも判断のつかない優しい顔をバーサーカーに向けた。

「とにかく私は、顔も分からない正義よりもマスターをどうやって守るかっぺ考えてる。それだけだ」

そもそもさ、と言いついてからセイバーはまた別な枯れ葉を拾い上げて筆りながら、バーサーカーとその隣で船を漕いでいる巽に黒い目を向けた。

セイバーの手の中から、乾いた血のように赤い枯れ葉の欠片が次々こぼれ落ちては風に拐われて灰色の空へと飛んで行く。

「敵サーヴァントに助言なんて求めるなよ。幾ら触媒無しで召喚されたサーヴァントとマスターは似る傾向にあるって言ったって、きみも巽も人が良すぎる」

「……その通りだね」

バーサーカーが頷くのを見て、セイバーは唇を噛んだ。

慣れないことを言い過ぎて、背筋が痒くなりそうだった。人に何かを言えた立場じゃなからう、と思うセイバーは口の中が苦かった。

そのとき葉を踏みしめる音がして、セイバーとバーサーカーは同時に顔を向ける。

「こんにちは」

木立の間からアーチャーと共に姿を現した女魔術師、エルザはからりと笑って片手を上げた。

バーサーカーは異の前に立ち、セイバーは眉をひそめた。

「エルザにアーチャーじゃないか。私のマスターに用があるのかい？」

「まあね。バーサーカーとどうなったかって聞こうと思ったんだけど、その分だと何とかなったみたいね」

直前まで穏やかに会話していたらそれはばれるよな、とセイバーは思いつつ頷いた。

「あとは偵察かな。ここらに魔術師の家がある感じはしていたし。ちよつと歩いてたら、魔力の気配を見つけたって訳。」

「そんな堂々と偵察してるって言われたら、警戒する気も起きないね。ま、沙条邸へようこそとは言っておくよ。一応これでも門番もやっているから、通す訳には行かないが」

沙条邸の門を背にして、片手に顕現させた短剣をセイバーはくるりと回し、切っ先をエルザたちへと向けながら答えた。

黒い瞳の輝きは鋭く細められ、アーチャーへ据えられている。アーチャーは苦笑しながら掌をセイバーへ向けた。

「分かりやすい挑発は勘弁しろ。昼日中に騒ぐ気は無いんだろ？」

「当たり前さ。言ってみただけだよ」

短剣を消し、セイバーもアーチャーと同じく空の手を広げて笑った。

「あなたたちの冗談って心臓に悪いわね。まあ、同盟組んでいる間に話したいことがあるなら話しておけば？これが終われば戦うんでしょう？」

エルザの呆れ声にセイバーは言われたことを嘔みしめるように目を瞬かせ、それからしみじみとした声音で言った。

「……エルザ・西条。きみ、良い人だね」

「止してよ。アーチャーがあなたと戦ってる最中に引っかけかきがあつたら困るってだけ。単にあたしのためよ。ただし、すぐ来てくれる距離で話してね」

ばたばたとエルザは手を振る。

「それは無論。じゃ、ちよつとアーチャーを借りるね」

言つて、セイバーはアーチャーの腕を掴むとすたすたと歩き去った。

あとに残るエルザは肩をすくめ、苦笑してそれを見送つたのだつた。

木立のそれほど奥ではない場所。

少し開けていて、太陽に白く照らされている場所まで来てセイバーは足を止めた。

「で、お前さん。話つて何だい？」

腕組みをするアーチャーに、セイバーはその前に聞きたいことがあると告げた。

「アーチャー、本当はこんなことを聞くのはご法度だろうけど、敢えて聞くよ。……宝具を使つたらあなたは死ぬのか？」

「本当に無茶なことを聞くな。敵サーヴァントに尋ねることじゃないな」

「確かに。でもあなたが真にアーラシュ・カマンガーなら、きつと宝具は生前の逸話の再現だろう？ 違うのか？ 言つておくけど、私に嘘は通じないから」

アーチャーより頭一つ小さなセイバーは、真つ直ぐに彼を見上げて問うた。

「……正解だ。まあ、使わずとも何とかしてはみせるつもりで俺はここで戦ってる。それだけさ」

「そうか。うん、それなら安心した。あなたは間違いなく私の知っているアーラシユ・カマンガーってことだ」

「おいおい。疑ってたのかよ。俺は間違いなく俺だけ？ お前がお前のままでサーヴァントとしてあるようにさ」

「だってあなたが死んだ後、色々な話が出てきたんだよ。アーラシユは死んでいない、本当はまだ生きている、とかさ。アーチャーがそっちの偽の伝承を元にしたサーヴァントだったら、あなたはアーラシユであって、私の知っているアーラシユじゃないってことになってしまうだろ？ それじゃあ、意味がないんだ」

セイバーは皮肉気に口の端を吊り上げ、アーチャーは苦笑した。

「そんな噂が立ったのか。まあ、そういうのは全部間違いだな」

「噂が立つくらい、あなたを惜しむ人たちはたくさんいたってことだよ。本当はアーラシユが生きているって、みんな思いたかったんだよ」

「それはお前もか？ アフタル」

弓兵の問いかけに、剣士の表情が一瞬色を無くし、黒い瞳に鈍い光が宿った。

「兄さんのばか。千里眼を持っているくせに、どうしてそんな分かり切ったことを聞く

んだい。当たり前だ。私だって思ったかったさ。でも、そんな都合の良い夢なんて見れる訳ないだろ」

自分の力が足りなかったときのこと、痛めた体を動かすこともできずに、山から去っていくアーラシユの背中を見送ることしかできなかった日のことを、セイバーは覚えてる。泣いてしまうほど歯がゆくて、同時に泣くことしかできなかった自分を心底憎み、許せなかった。その記憶がある限り、セイバーという少女は綺麗な夢など見ることもできない。

狼のように唸る寸前のようなセイバーを見て、アーチャーも真剣な表情になった。

「悪かった。今のは言うべきじゃなかったな」

「全くだ。この朴念仁。次に言ったら許さないから」

セイバーは腕組みをして、木漏れ日で光っている木に背中を預けた。悪かった、とアーチャーがもう一度言い、セイバーは頬を緩める。

「いくらでも話したいことはあるけど、今は時間が惜しい。だからアーチャー、言わなければならぬことだけ言うよ」

こほん、とセイバーはおどけて咳ばらいをした。

「ずっと昔の話だ。あなたが死んでから、何年か経ったあとの話。私は、街で大きな祭りに出くわした」

今思い返せば、あれは夏至のことだったか。

アフタルという名前の少女は、たまたま立ち寄った人里で大きな祭りに遭遇した。老いも若きも誰も彼もが笑い合い、酒を飲み、夜になつても暗さを吹き飛ばすほど大いに騒ぐような、そんな祭りだった。

少女は祭りの楽しみ方は知らなかったが、流れて騒ぎの中に混じり、初めて酒を飲んだ。体が頑丈だったから酔うこともなく、男装をしていたから女とばれもせず、騒ぎの中に立ち混じつて人々を眺めていた。

「そこで、ある人に声をかけられたんだ」

供を引き連れ、筋骨隆々として壮健な体は威風堂々。正に英雄と呼べる風格ある男だった。だが、彼はひどく酔っていた。

男は酒で全く酔うことのできない少女に声をかけ、そして言った。

「私みたいに祭りの席でも酔わずに、人々の営みをただ眺めていた友がいたんだって」
男の友は優しく強かった。強かったが故に孤高で、人々の穏やかな暮らしに混ざることなかつた。ただただそれを守ることができるよう離れた場所に立つて、一人陽だまりを眺めているような人間だったという。

だが、自分は先の戦争でその友を死なせた、と男は語った。

死なせたことをあなたは後悔して酒に酔うのか、と少女は男に尋ねた。男は呵々と

笑った。

——後悔はしていない。それは人々の願いでもあり、友の祈りでもあつたから。ただ、お前のように祭りの日に酒に酔えない者を見て、思い出しただけだ。

それから少女の肩を乱暴に叩いて、男は言った。多分、彼は少女を少年と思ひ込んでいたのだろう。

——童よ、お前は健やかに生きよ。私の友はお前たちのような者のため命を使つた。よく生きて、その先にある天上の国で、私の友に会えたなら。

「今日ここにある風景を忘れずに伝えてほしい、このざわめきを、喜びを、人々の健やかな営みを。この眩いものたちをありつたけ心に刻み込んで、この光景を見ることのできなかつた誰かに、届けてほしい。——そう言われたよ」

セイバーは組んでいた腕をほどいた。彼女の前に佇む弓兵は、何も言わなかつた。褐色の精悍な顔には、様々な感情が浮かんで流れ消えて行つた。それを剣士は静かに見守つた。

しばらく沈黙した後、アーチャーは口を開いた。

「その男の、名前は？」

「私も名乗らなかつたし、その人も名乗らなかつた。だからもう分らない。ただ、周りの人に陛下とは呼ばれていたけれど」

男と少女は祭りの日を最後に二度と会うことは無かった。

会うことは無かったけれど、男の言葉を少女は忘れなかった。忘れないまま生きて死んで、少女は剣の英霊となって今このとき、この場に立っている。

あるいは、酒の席での戯言だったかもしれない。それでも良かった。喜び合う人々を眩しく、尊いものだと少女も確かに思っていた。

その眩しさを、アーラシユの見た夢の続きを伝えたかった。それだけのことだった。

何も言わない弓兵に向けて、剣士は明るく笑った。冬の日差しのように暖かにやわらかく、何かから解き放たれたように屈託なく笑顔を浮かべた。

「私からの話はこれで全部だよ。少し時間がかかり過ぎたけど、言えてよかった。……うん、私は諦めないで良かったよ」

セイバーは木から背中を放し、下からアーチャーの顔を覗き込んだ。

顔を片手で覆っていたアーチャーは表情を緩め、セイバーの肩を軽く叩いた。

「……気の利いたことが言えたら良いんだがな。今は、ありがとうとしか言えないな」
「それで十分だよ」

話は終わり、さあ戻らないと、とセイバーは言って、帰り道を指し示したのだった。

Act—13

大方の予想通り、聖杯の場所は割れた。

東京都を中心にした魔術儀式なら東京全土の霊的な中心地は最初から怪しかった、などと解析し終わった愛歌は言っていたが、本人以外どうやって分かったかという理屈はほとんど把握していなかった。

集まった人たちの中で最も魔術を知るエルザや、バーサーカーことジキル博士も愛歌の話にはついていけなかったのだ。

天才なんざそんなもんだろ、とアーチャーは流し、愛歌の従者であるアシンやセイバーはそもそもそう言った理屈をあまり気にする性質をしていない。巽は言わずもがな、理解出来ようもなかった。

しかし過程は理解できなくともこの際問題はなかった。判明した場所は東京の地下。
大聖杯は地下に隠されていたのだ。

「わたしたち、今までずっと活火山の上で暮らしていたみたいなものよ。巨大な魔力

炬心なんだから」

「言い得て妙ね、それ。仕込んだのは教会なんだっけ」

「そのはずよ。ねえ、お父さん」

「……」

地下空間への道を歩く三人の人間の一人、沙条現当主の沙条広樹は無言で頷いた。

先を行くサーヴァント三騎の内、セイバーはこの突然の参加者に戸惑っていた。

それはアーチャーも同じらしく、潜み声で問うて来た。

「セイバー、あれ、お前さんのマスターの父親だろ？」

「そうだよ。親心ってやつでついてきたらしい」

「……まあ、いきなり娘が過程を蹴飛ばして大聖杯の探検に行ってくるって言ったたら、魔術師としても父親としても不測の事態すぎるってところか」

ついて来たところで、沙条広樹には何も出来ないだろう。彼は沙条の当主ではあるが聖杯に見初められず、令呪も持っていない。

何のために来たのか本人もよく分かっていないのか、娘に水を向けられても沙条広樹は渋面のままだった。

それが退屈なのか、愛歌は軽く転移してふわりとセイバーの横に姿を現した。主の突飛な出現に慣れてしまった従者は構わず歩き続ける。

「どう、セイバー？何か感じる？」

「あんまり良くない何かの気配を、ね。千里眼的に見たらどうなんだ、アーチャー」

未来予測すら可能な超常の目を持つ弓兵は、快活な彼らしからぬ苦い色を表情に現した。

「ああ、良くないな。飛び切りに良くない。それとも万能の願望器ってヤツなんて、皆こんなものなのか」

「……？」

無言でただ首を傾げるアサシンの足が、ふいに止まる。

狭い通路を通り抜け、広い空間に出たのだ。地下に広がる大空洞には光も届かない。魔術師たちは各々光源を魔術で生み出す間に、夜目が利くサーヴァントたちは先にその光景を目にすることになった。

「これ……何？」

エルザの声が空間に虚ろに木霊する。

地面を深くくり抜き作られた穴の底に、闇の塊が蠢いていた。三人と三騎は、ちょうどその穴の縁から十数メートルの所に出たのだった。

「これが聖杯で正解なのよね。お父さん」

無邪気にも聞こえる軽い声で愛歌は言う。

その声に誘われるように、エルザはふらりとした足取りで穴に近付いた。彼女の足元で動くのは、巨大な闇の塊。

全貌は巨大に過ぎ穴の暗さに紛れて定かならない。不定形に形を変え、ぐるぐると鳴動するその姿は、魔術師をして本能的な悍ましさを思い起こさせた。

「……こんなものが、聖杯なの？」

エルザの問には誰も応えられない。

答えを知っているものも、知らなくとも本能で察することができてしまったものも、それぞれ分かってしまった。

これが聖杯なのだ、と。自分たちを現世に招き、今も留め置いている物はこの物体なのだ、と。

「……これじゃあ、超特大級の呪いの塊じゃない。しかもこのまま儀式を進めたら、呪詛が完成しちゃうわね」

「呪詛の、完成？」

うわ言の様な沙条広樹の言葉に、穴に近付いていた娘は振り向いた。

「呪詛よ。というより全体としては蠱毒にも近いかしら。英霊の魂をこれに捧げ、彼らを媒体としてより高次元な存在を喚び出す。これは、そういう儀式なんじゃないの？」

「初見でそんなことまで分かるのか？ マスター」

「わたしだから分かつてしまうの。セイバーにアサシン、あなたたちだつてこれが悍ましいとは感じているんじゃないかしら？」

言われ、剣と暗殺の英霊たちは顔を見合わせた。

「……仰る通りです、愛歌様」

「右に同じ。これを使つてもきつと……」

セイバーの視線がふとエルザに向けられる。

僅かに躊躇いを見せてからセイバーは続けた。

「——きつと何の願いも叶わないよ」

「そんな……」

エルザの緑の目が零れ落ちそうなほど大きく見開かれ、彼女は膝を付いてしまう

その傍らに、彼女の英霊は屈んで手を肩の上に添えていた。

願いがあつたのに、ここに来てそれが決して叶わないと知らされてしまった人間の悲哀を愛歌は黙つて見ていた。

アーチャーは無言の愛歌を見た。

「……で、セイバーのマスター。お前はさつきこれは俺たちを媒介に、より高次の存在を

生み出すモノだと言つたよな」

「ええ。言つたわ」

「高次の存在ってそりや、具体的には何だ？ お前さんの親父殿も分かっちゃいないようだが」

愛歌はちらりと放心したように佇む父を見やり、気軽に穴の縁から奈落の底に身を乗り出した。

「ええと、そんなすぐには言えないけれど、多分これは……」

「——マスター、危ない！」

セイバーが叫び、愛歌を両手で抱えると一瞬で跳んだ。

直後、黒い泥のような触手が愛歌のいた場所目がけて叩き付けられる。砕かれた岩が散弾銃のように飛び散り、セイバーは抱えた愛歌の上に伏せて岩から主を守った。

「あ、ありがと。セイバー」

セイバーは答えず、姫抱きにしていた愛歌を地面に下ろす。隣ではアーチャーが同じくエルザを庇っていて、アサシンは沙条広樹の前に立っていた。

彼らの見る前で穴から触手は立ち上り、鎌首を擡げて人間と英霊たちを睥睨した。束の間奇妙に動きを止めたあと、触手の向きは弾丸よりも速い速度でセイバーに庇われている愛歌に据えられた。

「セイバー、避けるろ！」

「——ッ!？」

今度は愛歌を片手で抱え、セイバーは再び跳躍する。岩床を蹴り、壁から突き出ている棚のような足場に二人は着地した。

そこからは穴がより広く見下ろせた。闇の塊は磯巾着のように触手を伸ばし、その狙いはすべて愛歌に向けられていた。

険しい顔で腰の剣を抜き放ったセイバーへ、腰の辺りを抱えられたまま愛歌は囁いた。

「セイバー、宝具開帳を許可するわ。三秒後に放つて」

了解という代わりにセイバーは魔力を収束させる。

それに反応してか触手が足場にしていた岩棚に突き刺さり、岩の塊を脆くも四散させる。空中に浮き、落ちる前の一瞬の刹那に愛歌の背後の空間に巨大な術式が立ち上がった。

「——砲撃、射出！」

澄んだ声に合わせ、エーテル光が解き放たれて触手を打ち砕いた。

だが足りていない。魔力光を押し退けて、闇の塊はまだ蠢き、光纏った少女を求めた。そしてセイバーの魔力が形を取るより、触手が復活するのがまだ速い。

剣の英霊の顔が歪んだ時、横合いから瀑布のように矢が飛び、触手を抉り消し飛ばした。

援護で生まれた小さな隙にも、主を貪欲に喰らおうと下から襲ってくる触手を見下ろし、光の少女の盾たる英霊は呟いた。

「もう少し、完全に発動したかったなあ！」

場違いにもぼやきながら、セイバーは剣を振り上げた。

漆黒の刀身に大気に満ちる魔力が集まる。風を巻き起こし魔力を束ねて刃は色を変えた。一点の光も通さない黒から、研ぎ澄まされて闇夜でも光る鋼の色へ。

「——解放、『我が刃ヴァニタトゥム・ラミナ以て無に帰せ』アアツ!!」

放たれたのは三日月の形をした巨大な斬撃だった。風を切つて迫る刃を、触手は喰らい付くさんと手を伸ばす。

だが刃に触れた瞬間、闇の泥は次々消されていった。残滓すらも残さず、泥は虚空に溶けるようにして消えていく。

消滅というより、何処か違う次元へと転移させられたように斬撃は闇を喰らつていった。

斬撃が触手を物ともせず突き進み、大元の闇の塊へと迫り着こうとした瞬間、軋むような音が空洞に轟いた。凄まじい高音が脳に突き刺さり、ただの人間たちは堪らず耳を抑えて蹲った。

「うわ」

「あら」

空中から転移し、愛歌を抱えたままアーチャーたちの間近にセイバーは姿を現す。闇が発した音で斬撃が押し留められ、押されかけているのを見て、セイバー主従は気の抜ける声を上げた。己の神秘の一撃が凌ぎ切れようとしているのを見、セイバーはしかめ面で冷静に告げた。

「……あれじゃ駄目だ、押し負ける。——マスター、悪いけど」

「分かつてるわ。転移ね。エルザ、お父さん、迅速に撤退よ」

愛歌が足元をとんと蹴り、全員の足元に術式を生み出す。

瞬き一つの間、サーヴァントもマスターも魔術師も全員がそこから消え失せた。

後には鳴動する闇の塊だけが、人気の失せた大空洞に残されているのみだった。

#####

大空洞の入り口は、外からの侵入者を阻むように木々で隠された場所だった。その前に立つのは、まだ地上に残っているマスターとサーヴァント。

言うまでもなく來野巽とバーサーカーだった。

お前は来ない方がいい、見ない方がいい、と珍しくもアーチャーから釘を刺され巽はここに留まっていた。バーサーカーは彼に付き従った形だ。

人気の無い大空洞入り口で、彼らは地下に入って行った人々が戻って来るのを待っていた。

そしてふと、何かの気配を感じたのかバーサーカーが顔を上げる。碧眼が見るのは、愛歌たちが姿を消した洞窟ではなくて、東京湾の方角だった。

「バーサーカー、どうし——」

巽の言葉が終わるより先に、空の一角に光が走る。白い花火のような光は空に留ま

り、消えなかつた。

「……魔術か？」

「ああ。あれは……神王だろうね。ここからはよく見えないが、彼は東京湾に陣を張つたようだ」

異には非現実的に聞こえる陣を張る、という言葉は比喻でも何でもなく、その通りなのだろう。

夜の東京の夜を白く染めるほどの何かを、ライダーは展開したのだ。

あいつらに知らせた方が良く、と咄嗟に異は思った。しかし、愛歌からの連絡はいつも唐突かつ一方的で異から彼女に接触できたことはない。

臍を噛む間にも、白い光は黄金へ色を変えていく。東京の街は今頃大混乱だろうな、と異は何処か冷静な頭で考えた。

その時、草を踏み締める音を立てて異の周りに次々人影が降り立った。

「ああ、もう最悪！」

翠のドレスの裾をふわりと翻し、夜露に濡れた草地の上に沙条愛歌が現れる。その隣に、夜でも目立つ白髪を靡かせてセイバーが降り立った。

アーチャーに支えられたエルザや、アシンと沙条広樹も現れる。サーヴァントたちは地面に降り立つとすぐに魔力の気配を感じてか空を仰ぎ、黄金の光を見止めた。

「奴さんが言ってた《準備》ってやつが終わったってわけか」

「そうらしいね、アーチャー。あー、もう、聖杯にしろライダーにしろ、次から次へと何なんだ一体」

抜き身の剣を鞘に戻して、セイバーは乱暴に白髪をかいた。

「聖杯がどうかしてたのか？」

「どうかしてたのよ。ほんとうにどうかしてたのよ。何なのあれ、どうしてわたしに懐くの。ちつとも嬉しくなんかいいわ」

膨れ面というべき表情で、愛歌は本気で忌々しそうに洞窟を見ていた。

それは異が始めて見る愛歌の表情だった。いつも愛らしく微笑んでばかりの彼女の初めて見せた顔に、少年はこの状況にも関わらず少しだけ目を奪われた。

「あれ、あの黒い奴は、あなたのこと攻撃してた訳じゃなかったの？」

額を拭っていたエルザに、愛歌は顔を向けた。

「違うわ。あれはとてもお腹を空かせているだけ。そして子どもが母を求めるといに、わたしを取り込もうとしてたのよ」

「……なんだと？」

沈黙していた父は娘の言葉に反応した。

「聖杯は、根源に至るための、我ら一族の………」

「違つたみたいね、お父さん。あれは世界を殺す呪いを生むための、卵よ。根源には絶対に届かないわ。……お父さんも、知らなかったのね」

「馬鹿な、そんな、そんな馬鹿な！それでは、私は……私たちは、何のために——！」
髪をかきむしつて父は叫び、小さな娘に詰め寄らんばかりの勢いだつた。

セイバーは無言でその間に割り込み、父親の狂乱を留める。愛歌はその肩越しに、底無しの渦を宿した瞳で父を見ていた。

「……なあ、中で何があつたか知らないけど、あれ、放つておいて良いのか？」

おずおずと、空を染める黄金の光を翼は指差した。

「良いわけ無いわ。当たり前じゃない」

翼の方を見てびしやりと言つた愛歌は、もう元の通りの揺らぎのない表情を取り戻していた。

「エルザ、約束の通りの共闘の時間みたいよ。……唐突だけどね」

「ええ、こうなつちやつたら仕方ないわ。流されてるみたいでちよつと癪だけれど。

……アーチャー、行つてちようだい」

「セイバー、あなたもよ」

了解、と英霊二騎は剣と弓を掲げて頷いた。

「アサシンはわたしと来て。バーサーカーに翼は……」

どうしようかしら、と言うように愛歌は言い淀み、ちらりと彼らに目を走らせる。頼りないものを見るようなその眼に、巽の中で何か動いた。

「……俺も戦うよ。ここは俺が住んでる街なんだ。だから愛歌、俺が何をすればいいか教えてくれ」

バーサーカーの視線を感じながら、巽は言ったのだった。

Act—14

三騎士のうちの二騎。

アーチャーとセイバーが埠頭についたときには、そこにはランサーがいた。

銀髪の麗人は全速で東京の夜空を駆け、コンクリートの上へと着地した彼らを見ると、細く白い指を伸ばして海上の光り輝く大神殿を指し示した。

「ライダーは彼処です。私のマスターからはあなた方に協力しろ、との命令が出ていますのでライダー撃破までは戦いません」

「そりや良かった。ま、よろしくな、ランサー」

「同じく。戦乙女のあなたなら頼もしいし心強い。でも、少し話がある」
「？」

首を傾げるランサーの目の前に、セイバーは懐から取り出した透明な小瓶を取り出した。

その中には不吉に蠢く、黒い泥の欠片が入っていた。

「これは……?」

泥から放たれる禍々しい気配に、ランサーは眉をひそめる。

「……これは聖杯の中身さ。ランサーのマスター、俺たちはあんたにも話してる。結果だけ言うとな、このまま聖杯戦争を続けて俺たちが命を落とし続けると、成長したこいつがこの国に解き放たれるんだ」

「……俄に、何を言い出すのですかアーチャー」

「すぐに信じてもらええるとは思っていないよ。でも、私のマスターが探して見つけた大聖杯の中にこれがあったのさ。ランサー、あなたなら私たちが嘘を付いているか否か、分かるだろう?」

瓶を振ってから、セイバーはそれをランサーに手渡す。

ランサーは受け取った瓶をためつすがめつしていたが、やがて顔が徐々に色を無くしていった。

「……これは酷い。ものです。この様なものが聖杯の中身だったと?」

「残念ながら、ね。ランサー、あなたのマスターだつて見ているだろう? 私たちがこのまま殺し合いを続けると、それが更に膨れ上がるんだ。脱落した私たちの魂は聖杯へと向かうけれど、それを食らってこいつは太っていくんだ」

「要は、無策で戦い続けていてはまずいって話なのさ」

「……ライダーはこのことを？」

「当然知らないだろうな」

だからそれを伝えに行かなきゃならない、とセイバーは言いながらランサーに手を差し出し、ランサーはその上に瓶を乗せた。

生きとし生けるものを喰らいたいという悪性の呪いが入った瓶を、セイバーは躊躇いなく己の懐に収めた。

愛歌が洞窟で攻撃されたときに手早く掠め取った泥の欠片を、直接見せねば話にならないからと無理を言い、分けて持って来たのだ。

あまり長い時間身に着け過ぎれば影響はあるだろうが、今の所セイバーに変化はなかった。あくまで今の所は、だった。

「つまり、あなた方はただ討ち取るのではなく、あのライダーに銜を収めろと言いに行くのですか？」

「無茶なのは分かってるさ。あんたにも何か願いはあるんだろ。無理に付き合えとは言わん。俺はこの街の人間を守りたいが、あんたにまでそれを押し付ける気はない」

あまりに英雄らしいアーチャーの真つ直ぐな物言いに、かつて戦乙女として勇者をヴァルハラへと運ぶ役目を負っていたランサーは口籠る。

白髪のセイバーの方を見れば、こちらには肩をすくめた。

「私はそこまで守りたいとは思えないんだが、マスターがなあ……。なーんか、あの獣にベリストやたらと好かれてしまったから、倒さないといけなのと同じだ。……と、私たちの事情はそんな所だけれど、ランサー、あなたは どうする？」

だが、ランサーが答えるより早く、海上の大神殿から放たれた光により夜空が黄金に染め上げられ、街全体が揺れた。それが挨拶代わりに大神殿から放たれた単なる魔力砲だと三騎はほぼ同時に気付いた。

「昂ぶりすぎだろ、あのフアラオ」

「時間無しかよ、仕方のない王様だ」

とセイバーが剣を手に、アーチャーが弓を握りながら言う。

ぼやきながらも、彼らに一步も引く気は無かった。

彼らにそれぞれに守りたいものがある。セイバーにとっては唯一の主がそれであり、アーチャーにとつては無辜の民とマスターである。

彼らがこれから挑むのは、ただフアラオを倒すのではなく、彼に戦いを諦めさせ、かつ自身たちも死なないでマスターの元へと帰還するという難題だった。加えて言うなら、フアラオにはキャスターがついている。

しかし、そうしなければ獣を更に肥え太らせる結果になるのだ。四の五の言わずにや

るしかなかった。それが英霊にまでなった者の責だと彼らは自分たちに課していた。ともかく行くこう、と二騎はまだ戸惑う槍の騎士と共に魔境へと足を進めたのだった。

#####

「——ああ、セイバーたちが神殿に乗り込んだみたいよ。セイバーは、あの泥もちやんと持つて行っているみたい」

東京の夜の街を歩きながら、そう愛歌は言った。

傍らには異を連れ、彼女が向かうの玲瓏館の屋敷だった。バーサーカー、アサシン、エルザは奥多摩へと向かい、伊勢三の一族との接触を図り、異と愛歌とは玲瓏館の館へと向かい、聖杯の中身の何たるかを伝えるに赴いている。

聖杯の中身が中身である以上、最早戦争どころではないというのが大空洞へと赴いて生きて帰った彼らの結論だった。

愛歌のかすめ取った泥は三つに分けられ、一つはセイバー、一つはエルザたち、そして最後の一つは愛歌の手の中にあつた。

平気な顔でそれを持ってライダーの元へ向かったセイバーとは逆に、愛歌はそれを嫌そうに指の間にぶら下げて持っている。

笑顔ばかりを浮かべていた愛歌には珍しく、はつきりと嫌悪の顔を浮かべていた。巽にはそれが以外で、しかしそれを指摘する気は起こらなかった。

「これ、嫌なものね。さつきからうるさいたらないわ。お腹が空いた、お腹が空いた、そればっかりよ」

街灯だけが照らす静かな住宅街を花道のように闊歩しながら、愛歌は言った、

「そいつ、喋れるのか?」

「一応ね。これは人を食らうために作られた呪いだから、食欲を感じるための自我はあるようね。たぶん、わたしくらいしか言葉を聞いてはあげられないけれど」

水槽越しに珍しい熱帯魚を観察するように、愛歌は瓶を眺める。その横顔の冷たさが巽には怖かった。

「お前って……魔術のことってホント何でもできるんだな」

「何でもじゃないわ。わたし、出力には一定の制限があつてね。例えば、ヒトの歴史を遡つて焼き尽くしちゃうようなことはできないわ」

「何だよ、それ……。魔術つてのはそんなこともできるのか?」

「そうね……。とてつもない力を持ち合わせて生まれたモノが千年単位で時間をかけて、いくつも手間を踏んで、絶対に諦めなければ恐らくできるわ。そんな面倒で退屈なこと、やる人がいるとは思わないけど」

巽には最早何が何やらさっぱり分からない。

分からないというなら、この人員の分け方も謎だ。俺にもできることをやる、と言つたのは巽だが、マスターとバーサーカーとを分けてそれぞれ別の場所へと向かうのは愛歌が言い出したことだ。

サーヴァント二騎を同じ場所に行かせてマスター二人だけで別の場所へ向かうという命知らずな布陣だったが、愛歌は譲らなかつた。

キャスターのサーヴァントならば、自分には間違ひなく倒せると愛歌は言い、セイバーがそれを事実だと認めたことでこうなつたのだ。

「沙条、俺、ホント付いて来る意味あるのかな?」

「今更? わたしが来てと言つたからいいの」

そうは言うが、巽には自分に何ができるとは思えなかつた。ここ数日で彼が学んだ

ことは、自分の無力さだけだ。

「仕方ないと思うわよ。あなたは事故で巻き込まれたようなものだし」

自然に思考を読まれ、翼は押し黙った。行く手にはそろそろ、玲瓏館の館を取り巻く森が、ぼんやりと見えている。

何を見たのか、唐突に愛歌がまた喋りだした。

「わたしは、生まれたときからちよつと皆と見るものが違っていたの。何でも見えたし、何でもできた。でも、自分で言うのもあれだけれど、はつきりとした自我みたいなものを手に入れたのはセイバーと遊ぶようになってからこつちのことよ」

とんでもないことを言う愛歌を何故か翼は受け入れた。

「つまり……何でもできるけど、何にもやる気が起きなかつたってことか？」

「そんな所。わたしの我は、自分でもはつきり分かるくらいに柔いの。今は、セイバーっていうお人好しとの関わりを基盤にして形成しているから善よりだけれど、彼女がいなくなつたらまた揺らいでしまうかもね」

冷静に自分という個を突き放して物を語り、この世を見すえる少女は、黒い門の前まで来て止まる。

「この悪性の塊、正直うるさくつて身近に置くのも嫌よ。あまり長い間触れていると、きつと白いキャンバスに黒い絵の具をぶちまけるみたいになつてしまいうさだし」

白いキャンバスというのが、沙条愛歌のことなのだろう。

まだ何も書かれていない白い大地に悪性という泥をぶちまければ、確かに白い大地は容易く黒へと変わる。

「……お前、それってそんなに心配するようなことか？」

「なあに、どういう意味かしら？」

愛歌と同じ視点には決して立てない少年の顔には、さっきの鬱屈とした気弱な顔ではない、純粹な疑問の色があつた。

「その歳になるまで自我が無かつたなんて感覚、俺には分かんないけどさ、お前、その泥が嫌なんだろう？ それ持っていたら、自分が自分じゃなくなる、って言ってる風に聞こえるぞ」

「……」

澄んだ碧の瞳に見られ、巽の頬が一瞬赤くなる。少年は早口に思いついたままを言った。

「今の自分を手放したくないって言うなら、沙条にはもう確かな自分つてのがあるんだろ。セイバーがいるいないは、きつと関係ないと思う。絶対悪に触れたくないなんてのは、普通の人間なら当たり前の感情だしな」

巽の前に現れる愛歌は大概セイバーを放つたらかして自由だった。

楽しそうに異とバーサーカーに難題を押し付け、笑い、引っ張り回し、あそこまでして、今更自我が希薄だとか、セイバーがいなくなつた後の我が不安だとか言われても、異には信じられなかつた。

「……うん、だからあなたをここに連れて来て良かったのよ。一番意外なことを、わたしの中には無い言葉を、言つてくれるから」

最弱の少年の言葉を、全能の少女は馬鹿にしなかつた。笑い飛ばしもせず、耳に届かせていた。

「ちよつと今から、わたしはわたしに課していた制限を少し外して、キャスターと渡り合おうと思うの。黒い泥の話をすんなり信じて引いてくれるならいいけれど、それが無理なら正面から魔術合戦をするつもり」

「制限？ちよつと待て、沙条にそんなものあつたのか？」

「失礼ね、わたしが徹頭徹尾に傍若無人な天上天下唯我独尊人間みたいに言わないで」
頬を膨らませる愛歌に、そのどこが間違つているのだと異は言いかけてやめた。

異にすら分かるような密度の魔力が門の上へと収束し、異の目の前で形を取つたからだ。姿を現したのは黒髪の、女性と見まごうような優男だつた。

「キャスターのサーヴァント……！」

如何にも、と異の呟きに青年が頷き、愛歌はそれに答えてなのかにこりと笑つたの

だった。

#####

一方の奥多摩山中。木々の間を歩く、三つの人影があつた。

先頭を行くのはバーサーカー。その後に、エルザ、アサシンが続いている。彼らの行く先は伊勢三の居城である。黒い泥の入った瓶は、アサシンが所持していた。一応ここは伊勢三の領域であり、彼ら三人は敵に警戒しながら進んでいた。

「そう言えば、アーチャーとセイバーがドンパチやったんだけど、索敵とか大丈夫かしら

「？」

「こつちにはアサシンがいるから、いざとなれば気配遮断で中に忍び込んで中から開けてもらおう」

「……はい。城を中から攻めるのは経験したこともあります」

ぼそりと言うアサシンに、そうなんだ、とエルザは頷いた。

アサシンはエルザからもバーサーカーからも微妙に距離を開けている。総身が毒でできている彼女に触れば、エルザは間違いなく命が危ない。平気な顔で触れている愛歌やセイバー、アーチャーが例外であり、だからこそアサシンは最初のマスターを殺害してしまつた後に、愛歌に忠誠を捧げたのだ。

しかしそれを言うなら、この場にいる者たちは皆、本来のマスターやサーヴァントとは離れて行動している。殺し合ひのはずの聖杯戦争の最中で、妙な展開もあつたものだった。

「聖杯戦争がこの先あつても、こんなことは二度とないんでしようね」

目の前に張り出していた小枝を押しつけながら、エルザは言った。

「そもそも聖杯戦争はこれ一度きりで終わつてほしいよ、僕は。聖杯の中身が人殺しの悪性の呪い、黙示録の獣だなんて冗談じゃないよ」

バーサーカーは正義のため、という心を持って現界した。しかし何も知らないまま

だったら、彼は黙示録の獣を生み出す贄の一つになっていたのだ。その意味では聖杯戦争に最も裏切られ、かつ聖杯の中身を最も純粋に忌み嫌っているのは彼だった。

同じく聖杯戦争に裏切られた女魔術師は、乾いた笑顔を浮かべた。

「そうね。願いが何でも叶う、なんて今考えたら胡散臭いことの上無いわ。そんな風に上手くいく話、あるわけなかったのにな」

「——それでも、あなたは夢を見ずにいられなかった。違いますか？アーチャーのマスター」

ぼそり、とアサシンが泥の小瓶を抱えたまま呟いた。エルザは赤毛に引つかかった木の葉を落としながら、意外そうにアサシンを見た。

「私は主に出会うことで救われました。セイバーもそう。でも、あなたは……」

「うん、あたしの願いは無理みたいね。こんな機会でもなきや、きつともうどうしようもないって思ったからここまで来たんだけど、やっぱりだめなのね」

寸の間エルザの目の奥に鈍い光が宿った。

聖杯の中身を見、そこからぎりぎり撤退してすぐ、エルザは立ち直った。自分たちがただただ呪いをため込むために行動し、それを娘にも押し付けていたのだと知り、すぐには立ち上がれそうもない沙条家当主とは異なっている。

「でもいいの。今のあたしにできることをするわ。この街にも、何も知らないで平和に

暮らしているお母さんと子どもたちはいる。世界すべての母と子を救うことはできなくつても、あたしの身の丈以上のことだったとしても、せめてその人たちは守りたいと思うわ。この街に戦いに来たあたしが言っただけで欺瞞だろうし、すべて今更だけれどね。もう間に合わないとは思いたくないの」

闇の中でもなお明るい笑みをエルザは浮かべ、アサシンは目を伏せた。

「……あなたが、アーラシユ・カマンガーのマスターたる由縁が分かった気がします」
「何よ、それ」

エルザが肩を竦めたところで、バーサーカーが身振りで彼女たちに、静かに、と告げる。

「心配がある。この先は慎重に行こう」

頷き合つて、彼らもまた魔窟へと向かうのだった。

Act—in the past

攻撃の手を止めて、一瞬だけ汗を拭うために立ち止まると砂の混じったざらついた風が顔に吹き付けた。風を吸い込んだ途端、喉に切り裂かれたような痛みが走る。口を押さえて咳をすると、濁った血が掌に溢れた。

「……」

口元を手で拭い、血は服でふき取る。

並の人間よりよほど頑丈な身体でこれなのだから、確かに他の人間が持て余すのも無理ないと思う。

「帰ってくれないか。山の方に」

身の丈もある大剣を正眼に構えて咳く。

剣の切っ先は目の前に立ちはだかる小山のような竜に向けられていた。

黒い鱗に覆われた蛇のような体。ちろちろと火種を宿す耳まで裂けた巨大な口。息をする度大気には吐き出された毒が混ざり、徐々に周囲を汚染し続けている。

禍々しい毒の竜と相對するのは、それと比べればあまりに小柄な少女だった。

砂埃でくすみ、竜の火で焦げた装束に罅の入った鎧。毒は肺を焼き、一つ息をするたびに臍に痛みを走らせる。体が頑丈でなければ、とつくのとうに死んでいただろう。

「なあ、名も知らない竜。ここで帰ってくれないか？アンタが進んだら村が潰されるし人が死ぬ。道も使えなくなるんだ。そうしたらまた昔の敵国がこの国を嫌ってしまうだろう」

勝手だけど私はそれが嫌なんだよ、と少女は言った。

「せっかくさ、この国に平和つてのが実現しかかかってるんだ。それがどんなに素晴らしなものかは、よく分からないけどさ。でもそのために沢山の人が命を捨てたんだ」
だったらそれは守らなくちゃいけないんだよ、と少女は囁き、大口を開けて迫り来る竜の頭の上に飛び乗った。

竜の大木の如き首の上を、兎のような素早さで走り、少女は竜の首根つこに剣を深々と突き立てた。

悲鳴を上げて竜はのたうち回り、口から毒の吐息を吐き出す。

「あ、やばこ」

少女の視線が風下へ向けられる。

そこには村があつて、少女の視力はそこで動く人間を捉えていた。竜と戦う少女を見

て騒いでいる。

このまま竜が毒を吐き続ければ毒は村を殺すだろう。何で早く逃げないんだ、と怒りを覚えるがそんな場合ではなかった。

「くそつたれ！」

叫んで、少女は感情と感覚が示すまま魔力を放出した。

魔力はうねり、風となつて毒を吹き散らす。しかし、その制御で気を取られた少女は足を滑らせて大地へと叩き付けられた。

「——ッ！」

鞠のように跳ねた少女は、ごろごろと大地を転がって踏み潰そうとしてくる竜の足を避けた。

後退し、少女はまた血反吐を吐いた。

——割に合わないどころの話じゃない。何だつて見も知らない村人のために、自分は死にかけているんだらう。

とはいえここまでやってしまったら、竜はもう少女を見逃してなんてくれないだらう。

最悪なことに、少女は剣で穿った首の穴が竜の咆哮でみるみる塞がって行くのを見た。

どうやらこの竜は、大気の魔力を吸うことによる再生能力すら備えていたらしい。これでは殺せないと舌打ちを一つした。

一撃で消し飛ばすか、頭を完全に落とすかしない限り、コイツは死なないのだ。持久戦ではこちらが圧倒的に不利だ。

「一撃か……」

今はもう、遠い昔のことのようにも感じてしまう光景を思い出した。

あんな風に大地を穿つ威力の攻撃が今の自分にも撃てれば、きつとこの竜も仕留められるだろう。しかし、今の自分にはあの一撃の真似事ができるような弓の技量も、神の加護が籠められた神弓もない。持っているのは我流の剣術と、あとは――。

「あ」

まだ、自分の持っている手札を思い出した。

少女の懐には大切にしまっておく四枚の羽根がある。霊鳥の親が最後の別れ際にくれた、世界にかけがえのない宝物だ。

もしお前が苦境にあつてそこから逃れたいと思つたならば、この羽を使って世界の裏側を訪れればいいと、母鳥は羽をくれた。

それを使うための呪言もあつたはずだ。

羽を上手く仕えたのなら、この竜を何とかできるかもしれないと、少女は呪言を思い

出そうと顔をしかめた。

その瞬間を見計らったのか竜の尾が地面を揺らし、前脚が巨人の戦鎧のように少女を叩きつぶすために振り下ろされる。

軽く跳んでそれを避け、少女は懐に手をつ込んだ。

本当は使いたくなかった。人間として生きると決めたのだから、幻獣とのつながりを思い出させるものは、優しい思い出の縁よすがとしてただ大切にしまっておくだけにしておきたかったのだ。

しかし今はもうそんなことは言っていられない。

このままにしているのは、毒で大地が死ぬか村が死ぬか、それとも自分が殺されるかで終わってしまう。

頭を巡らせて地上一帯に毒と炎の混じった吐息を吹きかけてこようとすする竜を避けるため、円を描いて疾駆しながら少女は懐に手をつ込んだ。

掴みだしたのは、茶色と白と灰色の艶やかな一枚の羽根だった。頭の底にこびりついた呪言を、少女は舌の上に載せる。

「——我、この地において希う。最も速く、猛き翼を持つものよ、この世において今一度どうか我を導きたまえ」

呪言を唱えながら、少女は羽を手の中に収めたまま、剣の柄を握った。唱え終わった

瞬間に、羽は眩い光を放つと溶けるようにして消え失せる。引き換えのように、漆黑だったはずの刀身が銀の月そのものの輝きを放ち始めた。

どうやってこれを使うのだろう、と少女は眉を顰めるが、すぐに答えを見つけたように空を見上げた。

「そっか、これで空を斬ればいいんだね。母さん」

毒で全身あちこちが痺れている。目もそろそろ霞んできて、いい加減にしないと体が持たない。なら一撃ですべてを決めればいい、と少女は笑った。

眩いて、少女は剣を低く持ち腰を落とした。

そのとき、鼠のように小さく忌々しい人間が何か仕掛けてくると竜もまた判断していた。

竜として苛立ちは限界だった。

進もうとする道に立ち塞がり、道を変えてくれと叫んで来た小さな生物は今日の前にいる。何故弱い生き物の言うことを聞かねばならないのだと、竜は一向気にせずヒトの

集落諸共、その個体を潰そうとした。

しかし、結果はこれだ。

棘のような剣で傷付けられ、毒の吐息でも相手の動きを遅くするだけでなかなか潰せない。そもそも遙か昔ならいざ知らずただの人間風情ならば、竜の鱗を貫くような力は持ち合わせていないはずなのだ。

初手で加減なぞせずに全力で立ち向かえばこうはならなかっただろう。それが己でも分かっているだけに、竜は尚更苛立ちが募った。

だが、いい加減鼠も万策尽きていた。動きに最初に会ったほどの勢いはない。先ほど首を刺した一撃もそうだ。

毒を何発も食らい力が落ちる前の状態の人間だったなら、あの一撃を致命傷にできただろうが、力が足りずに竜の首は切り落とされなかった。

だが、人間の構えが再び変わる。あからさまに体を低く構えた、突進の型である。

先ほど、あの人間が何か特殊な魔力を纏ったようにも感じ取れた。その魔力の質からして、何か神秘の獣の加護の類なり何なりを発動させたのだろうと、竜は判断した。

しかし、人間の体に付いた傷は癒えていない。竜の爪の掠めた足からは肉がえぐれて血が流れ、地に赤い線を引いている。それでも人間の目は諦めていなかった。

その目の輝きが、竜には分からない。この生き物とあの村とは何の縁もないはずだ。

見ず知らずの弱い者を敢えて守るために、身を削るのは愚か者のすることだ。

何より強いことをこそ誇りに生きていた獣は、それ故にこの生き物の思考回路は全く以て理解できなかつた。

にい、と半月型に人間の口が曲げられる。本能しかない下等な獣のようなその笑いと澄んだ目の輝きのちぐはぐさに訳の分からぬ腹立たしさを感じ、竜は咆哮した。

その不可解さに耐え切れぬと、竜は骨すら溶かす毒の吐息と炎を一度に吐き、同時に爪を振るう。大地を割り、生み出した地割れに忌々しい人間を叩き落そうと尾で大地を薙ぎ払った。

——遅いんだよ。

だが、冷たい囁きが竜の耳のすぐ横で聞こえる。竜の片目は、そこであの人間が剣を振りかぶっている姿を捉えた。

——馬鹿な！

その動きはあまりに速すぎた。それまで竜が見てきた動きとは段違いに、あり得ないほどに速かつた。

竜が頭を巡らす前に、その視界を銀の閃光が満たした。

同時に、竜は抗えないほどの力で自分が引きずられていくのを感じた。踏みしめていた大地から引きはがされ、綱で引きずり上げられるようにして竜は己の体が宙に浮くの

を感じた。

——あり得ぬ！あり得ない、何故己がこのような所で！

竜は咆哮した。山をも突き崩すようなその声も、最早世界を震わすことは無く、虚しく反響して消えて行くのを竜は感じ取った。

認められないと、竜はもがいた。ただ己は己の望むように生きていただけなのに、あのような訳の分からない生き物に邪魔されるなど有り得なかつた。

もがきにもがくと、ほんのわずかだけ頭が自由に動いた。このままならあるいは、と竜の思う。

——させないから、そんなことは。

だが竜の視界がぶれる。下顎に強烈な衝撃が走り、脳を揺らされた竜は大きく仰け反った。

体勢が崩れたとたんに、引きずり上げる力がより強固に竜を捉える。

このとき、この光景を第三者が見ていたのなら、竜の姿が頭から順に宙に空いた黒い裂け目へと吸い込まれ、その巨体が徐々にこの世から引き剥がされて消えて行く光景を目にしたことだろう。だがこの場には、それを見届ける人間は誰一人存在していなかつた。

ただただ己の心の赴くまま進み続け、毒の吐息で地を脅かした太古の竜は、そうして

この地より姿を消した。

「——また死ななかつたなあ」

何もなくなつた大地の上、手足を投げ出して倒れながら、少女は呟いた。

目の前には竜が叩き割つた大地と、毒で焼けただれた草木の残骸だけが燻っている。暴虐の化身だつた生き物は、その場から消えていた。

より正確に言うると竜は消えたのではなかつた。少女が消したのだ。

大地に寝転がる少女のすぐ側には、半ばで刀身が、ぽつきりと折れた剣が転がつていゝる。もう二度と使えないだろう。山に落ちていたのを拾つて以来、随分長い間使つていた剣だから、少し惜しい気もしたが仕方なかつた。むしろ、あの一撃を耐えきれたことに感謝すべきだつた。

結局、少女は竜を殺せなかつた。殺すことができなかつた。

だから、強制的に幻獣の住まう世界の裏側への道を作って、そこに竜を叩き落した。無論、普通なら次元を斬るなどという荒業は使えない。使えないが、今回はそのための宝物があつた。

少女は母鳥たちが自分が裏側に行きたくなつた時に行けるようにとくれた翼を、触媒に使つたのだ。

辛くなつたら、寂しくなつたら、母たちのところに帰ってきていいと母は言つていた。その心を自分は見事に踏みにじつて、あんなデカブツを送つてしまったことになる。そう考えるとさらに頭が痛かつた。ついでに言うのと、暴れる竜の下顎を最後に渾身の力で殴り飛ばしたから右手が完全にいかれた。

したくてしたかつた訳ではないし、ああする以外どうしようもなかつた。それでもやつてしまつたと思うが、自分には謝ることができない。

「親不孝でごめんよ、母さん」

毒に晒されたせいで老婆のように嘎れてしまつた声で、抜けるような青空に手を伸ばして呟いた。

その動作をしただけで、腕が疲れてぱたりと地上に落ちる。

正直、もう指一本たりとも動かしたくなかつた。骨は数本やられているし、体中が一部の隙もなく痛みを訴えている。何も考えずに、ただ泥のように眠つてしまいたかつ

た。だが、体の血も随分失ってしまったから下手に眠ると死ぬだろう。

眩暈がするほどに面倒だが、血止めも手当ても自分でしなければならぬ。これまでの旅と同じように、手伝ってくれるものはいないのだから。

今度もまた、自分の意志で暴れた。

村が潰されるのに耐えられなかったというのも自分の本心ではある。しかし竜に挑んだのはそれだけではなかった。

自分は、自分の力を何かにぶつけたくて、試したくて仕方がないのだ。

幼かったころ、自分の力がなかったばかりに、一番死んでほしくない兄に死なれた。

そのときの虚ろさは力を求める渇きになって、こうして自分を訳の分からない戦いへと駆り立て続けている。何を倒したところで、何に挑んだところで、どうせ何一つ帰って来はしないのだから、この想いを持つことそれ自体が間違いなのだと思いついてはい

る。それでも、治そうという気は不思議と起こらないのだ。己の好きなように前進して、最後はこうやって自分のような半端ものに世界の裏側へと飛ばされたあの古竜とどこが違うというのだろう。

こんな風に自分一人の理屈にだけ従って好き勝手に暴れていたなら、いつかは死んでしま

れることもなく、水の泡が弾けるように呆気なく、この世に生きた証を何も残せず。根無し草の人生の終わりなんて、そんなものだ。

いつかそうやって人生が終わるなら、今日この時終わったって何一つ変わりはないんじゃないかと、ふとそんなことを思う。

それならそれで案外良いのかもしれないと、瞼を閉じる。そうすると、たちまち闇のような眠気が襲って来て、意識がたちまちのうちに遠のいた。

「——い————おい！アンター！」

だが、直前でそんな声と共に体を揺さぶられる。

「アンター！おい！目を閉じるな！死ぬぞ！」

瞼を無理やりに押し開けると、ぼんやりとした顔が目に入った。

「……死なないよ」

軋む体を動かして半身を起こす。それと同時に、日に焼け棒切れのような手足をした少年の姿が目に入った。歳は自分よりは少し下だろう。

少年は辺りを見回してから、こちらを見てきた。

「……なあ、あのデカいのはどこ行っただ？」

「さあね……でももう来ないよ。消したからね」

「消したって……。アンタ、あれと戦ってた奴だろ？」

「……まあね」

見れば少年の傍には粗末な槍が転がっていた。

それで少年が何をするつもりだったのか、聞くつもりはなかった。立ち上がろうとすると体がふらつき、そこを少年に支えられる形になった。

それでようやく血に染まった服に気付いたのか、少年は目を剥いた。

「ひどい怪我じゃないか！早く手当てしないと！」

「……分かつてるさ。いいよ、自分でやるから。放つておいてくれ」

「馬鹿だろ。こんな怪我した奴、ほっとけるもんか！」

ほら行くぞ、と少年に肩を貸されながら、のろのろと歩き出した。

目を凝らすと、人が数人村から走りだしてくるのが見えた。ぼろぼろの自分の姿を見て、何事か叫んでいるようだ。

「あそこが村だよ。医者だっているんだから、もうちよつと頑張れよ！」

「——ああ」

「おい、だから目を閉じるなって！死ぬなって言ってるだろ！」

怪我にひどく響くのだから、少年には叫ばないでほしかった。

それでもまあ、こうやて引き留めてくれる誰かの声を聴きとれるうちは、まだもう少し死ぬのは早いかな、と少女は力ない笑みを浮かべる。そうして彼女は、人々の環に巻き

込まれていった。

A c t — 1 5

今更ながら、とアーチャーは前置きした。

「お前の宝具つてのは、逸話が昇華されたものか？」

「本当に今更な話だな！」

大剣を乱暴にも棍棒のように振り回して、神殿の守護獣の首を両断しながらセイバーは叫んだ。

首を折り取られて尚、動くのを止めないスフィックスの胴体を両断したのは、魔銀で造られたランサーの大槍である。

アーチャーは何事も無かったかのように続けた。

「聞いてなかったからな。で、どうなんだ？」

「……微妙、だな。正直な所」

「セイバー、それはこの状況を打破するに足りるものですか？」

底が無いかのように次々湧き出すスフィックスを避けるため背中合わせになりながら、三騎は言葉を交わす。

三騎が正面から乗り込んだのは、というより乗り込まざるを得なかったのはライダーの宝具である『ラムセウム・テンテイルス光輝の大複合神殿』である。その内部は地獄のようだった。

頑健な体を持つアーチャーやセイバーだったが、彼らですら体の内側が蝕まれていき、血反吐を飲み込みながら戦っていた。

逆にスフィンクスは外で戦っていた時より、動きに鋭さが加わり、重さが増していた。フアラオの敵には毒を与え、手駒には恩恵を授ける。

これは、そういう結界宝具だった。

前脚を上げて襲つて来たスフィンクスの体の下をくぐり抜け、セイバーは胴体を串刺しにする。矢を弓に番える間も惜しいとばかりに、アーチャーは駆け寄ると矢を眼球に差し込み、そのまま脳を抉って動きを止めた。

丸太のように転がって来たスフィンクスの体をセイバーは両手で抱え上げて投げ飛ばす。他の神獣に叩き付けて足止めになると、跳んでアーチャーとランサーの元へと戻る。

「宝具の威力は不死相手にならかなり効く自信はあるけれど、このままだとここでは発動できそうにない。一瞬、この神殿が根幹から揺らげば或いは……」

「……すまないが俺もだ。この神殿には宝具封印の能力も備わってるってとこか？」

「おい、アーチャーはそもそも宝具使用禁止ってエルザに言われてただろうに。使った

ら魂が聖杯に食われてしまいうんだから」

軽い口調を崩さない彼らに、ランサーは呆れたように首を振った。

「分かりました。私だけはどうやらそれを免れているようです。宝具にてこの神殿の基盤を突きます。その隙に宝具を発動させて下さい」

了解した、とアーチャーとセイバーは頷いた。

「ファラオの所まで宝具を届かせて、眼前にこの呪いと聖杯の正体を叩き付けてやる」
「それで話を聞いてくれるタマかね、あのライダーは」

さあね、とセイバーは肩をすくめた。

そして誰からとやうでもなく、彼らは同時に動いた。セイバーは風の魔力を槍のようにして飛ばし、スフィンクスの壁を一瞬崩す。ランサーはそこを強引に突破して神殿の奥へと消える。スフィンクスが彼女の後を追えないようにアーチャーの矢が、神殿の柱を崩して獣たちを怯ませ、ランサーへ続く道を断った。

場には、獣たちの憎悪をすべて引き受けることになったセイバーとアーチャーだけが残された。

「不死を殺せるって言い切るってことは、ずいぶん宝具に自信があるんだな」

「……殺せるとは言ってない。私のはちよつと空間を切って相手を何処かの次元に追放するんだ」

昔、幻獣の親兄弟が消えた世界の裏側。

セイバーの宝具は、そこへの入り口を剣で空間を切り開いて作り出し、相手を叩き落とすものだ。

しかしセイバーも無手では世界の裏側へと繋がる空間を完全には切り裂けない。実際大聖杯前でのときは余裕がなく、不完全な発動になった為に押し負けている。

そしてそのための触媒には三枚しかない幻獣の羽を用いるのだ。つまりセイバーの宝具発動は三度だけ。

羽の一枚は愛歌に取られっぱなしなので、今セイバーの手元には二つしかない。

「回数としちや十分だろう。じゃあお前は昔、その手を使って竜を倒したのか？」

「そうだよ。あの竜は斬っても斬っても再生するし、毒を吐き続けるんでどうしようもなくなくなった。だから世界の裏側に落としたんだよ」

そんな話はどっちだっていいんだけど、とセイバーはアーチャーと背中合わせになりながら言った。

「違ういな。背中は任せただ、セイバー」

「アーラシユ・カマンガーにそう言ってもらえるなら、私も嬉しいや」

口元から垂れた毒に侵された黒い血を拭い、セイバーは笑った。そもそもあれだけ優秀なマスターがいるのに、これで負けたらそれこそ死んでも死にきれない。

そのマスターからの支援魔術も、ここからでは流石に効果が切れていた。しかしマスターの意地だとはかりにこの『光輝の大複合神殿』ラムセウム・テンテイルスに念話だけは届かせて来る辺り、本当に沙条愛歌というのは規格外であった。

何でも、念話によればあちらはキャスターとの魔術戦に移行したらしい。術の英霊とマスターがサーヴァント無しに魔術で殴り合いなど、エルザや翼のような愛歌以外のマスターだったなら正気の沙汰ではないと目を剥くところだが、愛歌に関して言えばセイバーは全く心配していなかった。

この状況で最も最悪なのは、肝心なところでキャスターの横槍が入ることだったからだ。

『あなたもかなり器用よね。スフィックスと戦ってるのですよ？ 現在進行形で』

『こいつらくらいの相手なら、頭と手足を別に動かしていてもまだ何とか……。それとマスター、宝具二回分の完全使用許可もくれ』

『そんなのセイバーの好きにしてくれて良いわよ。こつちも好きにやっておくから。令呪も使うわ。こんな大盤振る舞い、もう二度しないからね』

『こつちだつてこんな大乱闘もう二度とごめんさ……。ま、了解。お互いに頑張ろうか。』

——つて危なっ！』

大きく顎あごを開いて迫つて来た獅子の顔面に回し蹴りを叩き込み、相手の脳を揺さぶり

後退しながら、セイバーは頭の中で叫んだ。ついでに念話が断ち切られてしまう。

セイバーは舌打ちをした。

蹴りの威力も先ほどと比べると格段に落ちていた。アーチャーもスフィックスの手に手をこまねいて完全に近接戦闘に移っているが、文字通りに血反吐を吐いている。

「ランサーは……まだか!？」

「焦るなつて。もう少しなんじゃないか?——そら、来たぞー!」

千里眼なのか、アーチャーはランサーの仕掛ける機会を把握していた。

轟音とともに神殿全体が地震にあつたように揺れ、スフィックスたちがたたらを踏む。

その隙に、一瞬でアーチャーの手に真紅の大弓が握られた。彼は高々と弓を掲げると、力一杯それを引く。半月の形になつた弓に光り輝く矢が番えられた。矢に込められた魔力の煌めきは、太陽王の神殿の光にも侵されることは無かつた。

無論、宝具ではない。無いが、並みの宝具にも比肩するような魔力の高め方だつた。

その輝きを見て、セイバーも自然と魔力を高める。白い喉から哄笑が吹き上がった。

「合わせろ、セイバー!」

「あはははっ! 無つ茶苦茶だなあ、もう!」

それでも嗚呼、こんなに楽しい戦いは無かつたな、とセイバーは片手に宝具である霊

鳥の羽を二枚顕現させた。

「真名開帳……— 『癒やし齋せ奇跡の翼』!」
アウイウム・アリス・サンクタ

光が弾けて、セイバーの手元から羽の一つが消える。

霊鳥スィームルグの持つ、癒やしの力が籠められた宝具が開放される。神殿からの呪いが束の間解除され、二騎のステータスが一時的に最高値へと戻された。

「続けてやるぞ! 真名、完全開放!」

セイバーの叫びに応えて、アーチャーがいよいよ弓を引き絞った。強く強く、ペルシャ随一の射手は太陽すらも撃ち落とさんと弓を構える。

それに合わせられなくて、何が最優の剣セイバーの英霊なのか。

その高揚に紛れて、小さな後悔が胸を刺す。生きている頃にこうすることができていたら、という虚しさを、セイバーは振り払った。

過去は過去だ。どれほど悲しかったとしてもその過去を積み上げ続け、糧にして自分はここにいます。

余計な感傷など今は要らないのだ。この刹那を楽しみ尽くして、主の所へ帰る。今はただ、それだけを考えればいい。

周囲から魔獣が迫り来る中、かつて無いほど高揚した顔で刀身を白銀に輝かせるセイバーの横顔を、アーチャーは見守った。

この状況で笑えるような英雄にまでなったあの妹分は、一体全体自分のいなくなったあと、どのような人生を歩んだのだろうかという思いが脳裏を過ぎった。

きっと沢山のを失って、沢山のを得たのだ。暇があればそれらを聞いてやりたいが、無理な望みは持つまい、とアーチャーは苦笑した。

それでも白髪を風に靡かせながら、自由な心を持つ者が浮かべられる天衣無縫な微笑みを見る限り、多分自分があの子どもに唯一遺してやれた平和な時代とやらは、この英霊にとっては善い時になったのだろう。

「ま。不要ってこともなかった、かな」

「……ん？」

まだ何かあるのかと首を傾げるセイバーに、良いからお前は前だけを向いていろ、とアーチャーは言った。

限界以上に力を込めた一矢を、アーチャーはこれより解き放つ。

宝具のように身体は爆発四散しないだろうが、撃てばしばらくは魔力の喪失でまともには動けなくなるはずだ。

あとはこの鳥娘に何とかしてもらおうしかあるまい。

「行けよ、セイバー！」

そして矢が放たれて、神殿の内側から光の柱が立ち上った。

神殿奥、玉座に就いた神王も三騎の奮闘は見ていた。神殿の呪いから逃れ得る程高い神性を持つランサー、身体は蝕まれていても戦意を衰えさせるところか更に昂ぶらせるアーチャーとセイバーたちは、紛れも無い勇者たちではあった。

「だが、足りぬな」

確かに彼らは砂漠の神獣には決して負けないだろう。だが、あれらは所詮、フアラオの威光の一欠片でしかない。

オジマンディアスの目は、剣を片手にスフィンクスと切り結んでは獣を乱雑に蹴り倒している小柄な英霊に注がれた。

ポトニア・テロー「怪物王女の走狗よ。貴様とて勇者を名乗るのなら、さあ、その魂の輝きを見せてみよ

！」

その言葉に応えたわけでもあるまいが、ランサーはセイバーたちに場を任せて離れて行く。撤退ではなく、何か策あつてのことなのだろう。

面白い、とライダーは微笑む。

フアラオはあのセイバーのマスターを滅すると一度裁定を下した。セイバーは身の程知らずにもそれをやめろと止めた。

故に、それを覆したければセイバーは、戦い己がで心根を示せとフアラオは彼らに言つた。

マスターであるあの魔術師は、何やら暗躍しているようだった。強力なサーヴァントを従えるマスターを殺すことで、サーヴァントへの魔力供給を絶つというのは如何にも考え付きそうな手である。しかし、ライダーは喩え己のマスターが危機に陥つたとしても、彼らを助けるつもりは毛頭なかった。

眼下で戦う英霊たちの輝きに比べれば、魔術師の根源への探求など知つたことではない。主の命を背負い、己のすべてを賭けて全霊で挑む英霊と、自らは陰に潜み神王の威光を借りようという不逞の輩とではどちらを優先させるか、比べるべくも無い。

神殿が揺さぶられたのは、正にその時だった。

先ほど姿を消したランサーが、宝具なり何なりを使つたと思しい。神殿全体が揺らいだ隙を突いて、アーチャーが弓を手に持ち、セイバーが新たに宝具を出現させる。

セイバーがそれまで放っていた神秘とは桁違いに高いモノが籠められた羽に、ライダーは眉を動かした。

「ほう。彼の剣士は東方の幻獣に連なる者であつたか」

大地を穿ち、戦乱を終わらせたあの偉大なる弓の勇者と同郷であつたらしい。

ならば、とライダーは玉座から立ち上がり、王の証である黄金の笏を取る。

「ファラオの神威を見るがいい！そして絶望せよ！光を求めし者！」

玉座の間から神殿内部へと一直線に黄金の光線が放たれる。

それを迎え撃つたのは、アーチャーの一矢だった。

「如何に勇者と言えど、宝具でもない矢で、我が光を押しとどめられると思うなよ！」

矢と黄金が正面からぶつかり合い、神殿が再び揺さぶられた。弾けた魔力光は流れ弾になつて神殿を砕き、巻き添えを食った獣たちは次々に魔力へと還つていく。

それがどうした、とライダーは更に王笏を持つ手に力を込めた。

宝具ではない矢と黄金の拮抗は然程保ちはしない。矢はたちまちの上に燃え尽きる。そのまま進めばアーチャーを呑み込むだろう。

だがその時間は、もう一人の英霊が宝具を発動させるには十分だった。

セイバーが真名を開放する声は、轟音に紛れて誰の耳にも届かなかつた。

しかしアーチャーが光に呑まれる寸での所で、セイバーが彼の前に躍り出て大上段に

持っていた剣を一気に振り下ろした。

気合の叫びとともに振るわれた白銀の刀身が宙を裂く。白い軌跡に沿って生み出されたのは、奈落への入り口のような黒い裂け目だった。

その中へとライダーの光線が吸い込まれていく。悪食な暴食の獣のように、黒い裂け目はそのまま光を喰らい続けて前進を始める。

フアラオの光を正面から喰らうという不遜な宝具に、ライダーは喰らい尽くせるものなら喰らい尽くしてみせよと傲岸に笑った。

だが、それを放った当人は全く気にせず裂け目へと更に力を送り込み続けた。余波で髪が燃えようが、手足の先が燻ろうが何も顧みていない。あまつさえ、セイバーは齒を剥き出して笑っていた。

セイバーの宝具がライダーの威光を喰らい尽くすか、ライダーの光がセイバーを焼き尽くすか。

ライダーが眉をひそめた瞬間、セイバーの力が爆発的に高まった。拮抗を続けていた漆黒と黄金は、一気に漆黒へと傾いた。

あのセイバーには、最早そのような力など残っていないかつたはずだとライダーは一瞬思うが、すぐに理由に行き当たる。

「令呪、か」

この神殿内にいる己が従者にすら令呪の効果を届かせる魔術師の、見事な助けであった。

「そうか貴様らは——最初から二人で戦っていたのか」

闇が光を喰らい尽くして、神殿はみるみるうちに崩れ行く。瓦礫が降り落ちる玉座の間に佇みながら、ライダーはなかなか楽しめたと一人呟くのだった。

Act—16

結局、この数日は沙条愛歌にとって何だったのだろう、と考えることがある。

聖杯戦争に勝つための日々だった訳ではない。

聖杯戦争に勝利することが沙条の使命だと、ずっとそう考えて生きてきた父は、聖杯の正体を見せられてすっかり駄目になってしまっている。

娘なら、どうにかこうにかして自分を愛してくれている父親を慰めたりすべきなのだろうけれど、そういうことは愛歌には苦手だ。そもそも聖杯戦争に勝つことは根源に至るためなのに、愛歌は生まれ付き根源に繋がっている。

根源接続者故の万能感を元にして人格が出来ている愛歌では、多分何を言っても間違いにしかならない気がした。父親を慰めるのは、綾香の方がずっと向いているだろう。

沙条愛歌には、聖杯戦争の勝利は何の価値もない。ただその勝利に至るための道具、サーヴァントになら価値はあったと思う。

セイバー。白髪黒眼の少女姿の剣士。愛歌の選んだサーヴァント。

セイバーは確かに強いけれど、彼女より強い英霊も人格的に素晴らしい英霊も、いくらでもいる。愛歌はそれを知っている。

でもセイバーは愛歌を初めてただの女の子扱いした人間で、守ろうとしていた。だからもう一度、会ってみたかったのだ。今度は夢の中ではなく、現実で。

夢の中のように制限された姿では無くて、ありのままの沙条愛歌として会ったなら、セイバーはどうするのか、と。

ただの好奇心、だったのかもしれない。

けれどいざ呼び出してみて、セイバーが愛歌のことを全く覚えていなかったのが癪で少し意地悪をした。

それでもセイバーは怒らなかつた。

仕方ないなど、子どもの悪戯を咎める様に呆れただけだった。

どうやら自分は、思っていたよりもセイバーに好かれていたらしいと、愛歌が気付いたのはその時だった。

いや、好かれているというより、信頼されているのか。

セイバーは沙条愛歌に呆れもするし、振り回されることに腹も立てる。

でもセイバーは、愛歌なら最後の一線は大丈夫だ、と思っっているのだ。しかし、何がどうしてそう思われているのか、愛歌にはちつとも分からない。

そんなに信頼されるようなことを、自分はセイバーにしたと思わない。セイバーの事情を知らながらその心を引つ掻き回したし、尚悪いことに、今でもそれを悪いことと思っていない。

なのにセイバーは、数多の英霊の中から喚び出した主だからという理屈や、愛歌がずば抜けて優秀なマスターだからという利益だけでなく、それ以上の何かを理由にして沙条愛歌のサーヴァントとして在ることを良しとしている。

愛歌はそれを聞いてみたい。問うてみたい。人の心を、もつと知りたいのだ。

そのためにはこの状況は煩わしかった。

太陽王も、黙示録の獣の卵も、どうして愛歌^{わたし}を狙ってくるのだ。

そんなもの願ひ下げだ。

特に獣の卵は嫌いだ。

お腹が空いたと喚いて、愛歌に縋ってきた。

人を食べるしか能のない獣に縋られる覚えはない。せつかく人をもつと知りたいと思っているのに、人を酷く殺すだけの獣なんて邪魔なだけだ。

あなたなんて疾く消えてしまえと言いたい。

太陽王も嫌いだ。

怪物^{ポニテローン}王女なんて名前、愛歌^{わたし}は知らない。あんな醜い獣と十把一絡げにして呼ぶなど怒

りたい。

太陽王がこの戦いで愛歌を試すというなら、それで良い。それに乗ってやる。

善のサーヴァントの主らしく戦って、悪性の塊の獣とは違うんだと言ってやる。

そしてきつと、今感じている怒りにも似た昂りが、この聖杯戦争で愛歌が手に入れたモノなのだ。

不安定で脆くて、愛歌の元の性さがが出れば砂糖細工のように砕け散ってしまうような想いだけけど、でも、それを守りながらその赴くまま行動するのは、何だかとても楽しかった。

—— 昂りのまま表面はにこやかに愛らしく中は好戦的に笑いながら、沙条愛歌が異を連れて乗り込んだのは玲瓏館の屋敷だった。

異を連れて来たのも、本当なら意味はない。彼は無力で、戦力には最初から数えていない。

ただ異は、この聖杯戦争きつての善の象徴だ。そういう人間が近くに居るのは、多分今自分を構成して動かしている心に必要なことだと、彼女は無意識に感じていた。

異当人の心や感情はまるきり考慮していないが、愛歌は異を自分の行動を映す鏡としてある意味信頼している。

それこそ、サーヴァントと相對している今のうちに、超常の力を振るわなければならぬ。今のようなきなら尚更。

「あなたはキャスターのサーヴァントね。知っているだろうけれど、わたしは沙条愛歌。セイバーのマスターをしているわ。あなたのマスターに、取り次いでもらえるかしら？」

目の前に立つ黒髪の青年に、愛歌は笑いかける。流麗で線の細い女の人のようにも見えるけれど、彼は違う。

キャスターの真名は、ヴァン・ホーエンハイム・パラケルスス。

錬金術、魔術、医術を極めて遍く人を救おうとし、最期にはそれをよく思わない者たち、神秘の漏洩を許さない魔術師によつて命を絶たれた、歴とした英霊に他ならない。優しい人、なのだろう。今頃嬉々として戦いに突入しているセイバーより倍は人間が出来ている。

キャスターは微笑み、口を開いた。

「こんばんは、若き魔術師。ですが残念ながら、貴女の申し出は受けられない。ここに私が姿を現していることの意味は分かりますね？」

ふうん、と愛歌は小首を傾げると、愛らしい笑顔を浮かべた。

「これはわたしからあなたたちへの申し出じゃないわ。頼んでいるのではないの。そう

しなさいと言っているのよ」

愛歌の視界の端では、異がうわあと呟いて顔を引きつらせる。

「おい、沙条……」

「ちよつと黙っていて、異」

少年を一睨みして下がらせると、愛歌はキャスターに視線を戻した。

魔術師のサーヴァントは揺らいでいない。彼からして見れば、まだ幼い魔術師がサーヴァントも連れずに無謀にやって来たようにしか見えないのだろう。

何せ、愛歌はまだ彼の前に本性を晒していないのだからそう認識するのは当たり前だ。

無謀なマスターを積極的に殺しに掛かるのではなく、どこか憂いを含んだ表情で佇む辺り、キャスターはやはり善い人間ではあるのだろう。

とはいえ、こちらも彼を踏み倒して行かなければならない。

令呪の疼きから察するに、港の方ではまだ戦いが続いている。

セイバーは負けていないし、魔力を遠慮なく使って好きに暴れているようだ。

彼女が楽しそうなのは結構だけれど、余裕が無いのもまた事実。神王は三騎士を持つとしても無傷で倒せる相手ではないし、下手に倒せばあの獣に餌を与える羽目になる。

何につけても時間が惜しい、と愛歌は決断した。

『包み、守りなさい』

レースに包まれた手を振るう。

それだけで玲瓏館とその一带は結界に包まれた。愛歌はふわりと浮き上がり、キヤスターの背後へ転移。

右手に持った雷の槍を投げ付けようとした所で、キヤスターが虚空より創り出した炎の結晶に阻まれた。

炎と雷撃が衝突し、爆風が玲瓏館の屋敷に叩き付けられて門と壁が軋む。

キヤスターの影が伸びて、地面に降り立ちかけていた愛歌の足元を襲う。槍のように鋭利な影を、愛歌はワルツを踊るような足取りで躲すと、そっくりそのまま槍をキヤスターへ弾き返した。

キヤスターの白い衣が翻って、影は霧散する。

やっぱ面白い術を使う人ね、と愛歌は距離を取りながら観察する。彼が背にしている屋敷の中には推定二人の人間がいる。

その他の生命の気配も幾つかあるけれど、力が弱い、気配が薄い。恐らくは大方キヤスターの造ったホームクルスか何かだ。

人間の一人はキヤスターのマスターにして玲瓏館の現当主だとして、ではもう一つは誰の気配だろうか？

「そう言えば、玲瓏館には子どもがいたって聞いたような……聞いていなかったような」
愛歌と同じか、少し歳下の女の子がいると何時だったか聞いたことがある。

すっかり忘れていたけれど、父親からだったかもしれない。

「名前は確か、美沙夜ちゃんだったかしらね？ キヤスター」

くると宙で回って勢いを殺し、空中に佇みながら愛歌は眼前のキヤスターに問い掛けた。

愛歌としてはただ確認の為に聞いたただけだったのに、キヤスターは更に険しい顔になる。

多分、この善人のキヤスターにとって美沙夜という子は大事なのだろう。

そもそもパラケルススとは、万人に魔術による癒やしを与えようとして殺された英霊だ。つまり、優しくて甘い。

「別にその子に何もしいわよ。わたしはさつきから言っているじゃない。あなたのマスターに話があるの。美沙夜という子が大事なら、少しそこを退いて頂戴」

返答は五大元素のエレメンタルによる砲撃だった。

転移でエレメンタルの攻撃を避け、顔を庇って立ち竦んでいた巽の横に戻る。

「困ったわ。キヤスター、ちっとも話を聞いてくれないじゃない」

「……沙条はちよつと聞き方が不味いんだろ。いきなり魔術ぶつけたら、そりゃ警戒さ

れるっての。——説得なら俺がした方が良い。つてか、その方がマシだ」

言つて、異は前に出て声を張り上げた。

「キヤスター！俺は、バーサーカーのマスターだ！アンタとライダー以外の他の組は、今協力関係にある！」

目の前で次元違いの魔術の一端を見せられた少年は、半ばやけのように叫んだ。

隣ではふわりと浮かんだままの少女が、魔術で少年の声を増幅して響かせる。

キヤスターも、それまで全く気にかけていなかった、何の力もない少年の声に驚いて一度攻撃をやめた。

「キヤスター。アンタとマスターがこの聖杯戦争に、何の願いをかけているかは知らない。でもこのままだと、アンタたちが勝とうが何をしようが、その願いは叶わないんだ」
はい、と察した愛歌からガラス瓶に封じ込められた泥の欠片が異に渡される。

冷たいガラス瓶が手に触れた瞬間、封印越しても悍ましい気配を感じて背筋が総毛立った。

これをけろりとした顔で受け取っていたセイバーや、涼しい顔で持っていた愛歌とはやはり自分は違うのだ。

意識のすべてを集中させなければ、泥の欠片一つで心がばらばらになってしまう。

——そんなこと今更すぎて、どうだつて良かった。

「これはこの聖杯戦争の要、大聖杯の中にあつたものだ。魔術師なら、コイツがどういうものかは分かるだろう？」

キャスターへ向けて、巽は渾身の力でガラス瓶を放つた。

大きく弧を描いて飛んだそれを、キャスターは受け取って、そして目を見開いた。

「大聖杯の中身はそれだ。盃の中にはそんな泥しか入ってやしないんだ。このまま何もしないで戦つてたら、ソイツはどんどん成長しちまう！」

「ええ、そうね。あなたたちの魂を燃料に、その泥はもつと大きくなるの。——わ
たしたちの言うことが信じられないなら、あなた自身で解析して確かめて。
アブレイジ・ワン
五大元素使い、ヴァン・ホーエンハイム・パラケルスス。あなたはそれができる人でし
う？」

どうなるだろうか、と眼を細め、巽は手をきつく握り締めた。これ以上、彼は言葉を
持ち合わせない。

横では愛歌が首を傾げている。キャスターの返答次第で、彼女はまた人智を超えた魔
術を解き放つだろう。

少年と少女が見る中で、キャスターは瓶を持ち上げて月光にかざし、ためつすがめつ
黒い泥の入った瓶を転がした。

青年の顔色はたちまち変わる。

「これ、は——」

「理解してくれたかしら？今は、戦って魂を器に捧げ合っている場合ではないの」
「……」

キャスターは無言で瓶を砕けそうな程の力で握った。

「マスターに、取り次いでみましょう」

言つて、青年は衣を翻して屋敷へと姿を消した。同時に辺りを覆っていた愛歌の結界が解かれ、音が戻つて来る。

雷撃と炎で無惨に破壊されたはずのアスファルトは、何の損害もなく月光に白々と照らされていた。

強い魔力の塊が離れ、つい足から力が抜けて異は思わずへたり込んだ。

「あれで……良かったのか？」

見上げると、小さな少女は腕組みをして異を見下ろしていた。何だか視線が冷たい気がする。

「すぐへたれて情けないわよ、異。さっきのセイバーみたいなよく分からない威勢は、どこへ行つちやつたのかしら」

「あのな、お前たちと一緒にするなつての。……それにしても沙条、アイツの真名、一体何時から知つてたんだ？」

「んー。セイバーに記憶を見せてもらったときかしら。彼のパラケルススが、あんな風に女の人みたいに綺麗とは思っていなかったけれど」

沙条でも意外に思うことはあるんだな、と巽は膝に手を置いて立ち上がった。

それはどういう意味なのかしら、と愛歌が不服そうに両手を腰に手を当て、そのまんなの意味だつての、と巽は返した。

この少女と軽口を叩く辺り、巽も自分がかなり吹っ切れてしまつていふという気がしないでもない。

そう言えば、学校も無断欠席してしまつていふ。今まで当たり前だったことの大半を、巽はここ数日で忘れてしまつていふようだった。

「港のセイバーたちは、ともかくとして。あとは伊勢三の方に行ったエルザたちね。巽、バーサーカーとのラインはどうなつていふの？」

「……一応普通に通つたままだぞ。これつて、無事つてことだろ？」

「もう、頼りない返事ね。わたしのアサシンが大丈夫そうだから、多分平気なんでしょうけど」

エルザたちはライダー陣営の方へ向かつたままだ。

「と言つても、がちがちに引き籠もつていふ伊勢三相手なら、あつちはまず最初に城塞を壊すくらいしないと話に応じてくれないかもね」

「……………え？」

「でもバーサーカーとアサシンがいるならエルザも大丈夫でしょう。セイバーの宝具もエルザに預けているし、あれがあるなら多少の怪我や毒は平気なものね」

「……………」

とりあえずセイバーは、またも無断で宝具を使われているらしい。

自分の意志と関係なく、毒を常に発散し続けているというアサシンの側にいるなら、それは確かに必要な措置なのだろうが。

何だかなあ、と急に異は空を仰いだ。

離れている友人と会話の一つも繋げられない自分が、何とも情けない。

情けないのは重々承知なのだが、何もしないでアスファルトに立ち尽くすしかない今は、それが尚更胸に染み込んだ。

愛歌はひよこひよこ体を揺らして、知りたがり屋の栗鼠のように玲瓏館の方を伺っている。

ふう、と翼が白い息を吐いた、正にそのときだ。

彼らの背後、東京湾の方で光の柱が夜空を切り裂いて立ち上がる。

愛歌は魔力によつて起きた風で揺れる髪を押さえ、振り返った。

遠い海上では、一応決着が着いたらしい。念話は切れているが、パスは盛んに魔力を

セイバーへと供給している。

兎にも角にも長い一日はまだこれからかしら、と愛歌は人が動き始めた玲瓏館屋敷に目を戻して、うーんと伸びをしたのだった。

Act—17

死ななかつたらそれで良い。

誇りとか、信念とか、別にそんな大層な題目を求められたことはない。

善の英霊と括られてはいるが、人の世の秩序の守り手なのかと、己にその確たる自覚があるのかと言われれば、首を傾げざるを得ない。

事の初めに遡ると、自分を産み落とした親が人の世の秩序とやりに則つたために、忌み子は死んでおけと捨てられたのだ。

そういう自分が初めて関わりを持ち、兄のように慕つた相手は、民の為に、皆の安寧の為に、生命を擲つことを選択する人だったのは何とも皮肉な話だ。

しかし、最初に出会つた相手が、人々の営みの何もかも引つ括めて、丸ごと愛すべき民たちと言えるような人でなければ、自分は人に戻ることはなかつたとも思うのだ。

数多の人々の犠牲を乗り越えた先の平和になつた世で、旅をして、戦つて、人の営みを見た。

壊して壊されての乱暴な人生で、終ぞ『国』という大きな人の輪の中に踏み入ることは無かったが、あれはあれでそれなりに楽しかった。

秩序の外から人の世を見て、見続けて、様々なものを得て、その果てにこの世を去った。

そうやって好き勝手に生きただのだから、さして未練があるはずも無い。英霊になった後は喚び出してくれた人の力になれば良い。

それを繰り返して、いつか同じ英霊になった兄に出会えば良い。

アフタルという英霊の自身は、所詮こんなものだ。

神王のような民の為という強さも、戦乙女のように勇者を慈しむ慈愛も、そして救国の射手のように、顔も知らない民の為に生命を擲とうという気概もない。

契約した主であり、そこそこに親近感と好感の生まれたマスターを守ることができるならば、それで良い。

要するに器が小さい。眩しい彼らに比べれば、耐えられないほど存在が軽い。そうして今回も、馬鹿が馬鹿なりに意地を通した結果だった。

「おいセイバー！生きてんのか!？」

東京湾上での決戦跡地。

水を通したように遠くから聞こえる声を、セイバーと呼ばれる仰向けに寝転がって少女は聞いていた。

夜明けが近いのか、空は端から徐々に色が変わっている。

この世の夜明けをまた見られると思うと、ぼんやり嬉しさが湧き上がってくるが、答える声を出すのは億劫だった。

億劫なものも当たり前で、よく見れば片手片足が付け根から無くなっている。宝具同士の激突に、体の方が耐えられなかったのだ。

そして重心が狂ったのだから、立ち上がるのがままならないのも当然だった。

剣はどこに行った、と考えてたが、これはしっかりと握っていた。それを杖にして、ともかくも半身を起こそうと足掻く。

芋虫のように藻掻いて転がって、それでも何とか立ち上がることに成功した。

まだ、気が抜けない。何故なら今はまだ、誰も死んでいない。

立ち上がった瞬間、赤黒い血の塊を吐いた。頭がぼうとしていて、失くなった手足の痛みも何も感じない。

生きていた頃なら、動ける間もなく死んでいただろう怪我なのに、今の自分はたまさか霊核が無事で愛歌からの魔力が与えられているばかりに、全く死ぬ心配がなかった。

解けていく体からは暖かさと一緒に仮初の命が流れ出て行くが、パスから流れ込んでくる魔力が、それを上回る速さで体を暖めてくれる。

そうなってみてようやく、自分が真には生きていない存在だということを嫌でも思い知らされる。

遠い所では、アーチャーの叫びが聞こえる。上擦って掠れた、聞いたことのない焦りを含んだ声だった。

ここにいるよ、と言いかけて代わりに血が口から吐き出される。それで重心が崩れて、神殿の瓦礫の上に倒れ込んだ。

ひたすらに臉が重かった。死にはしないだろうが、さてこれで意識を手放してしまえば目覚められる自信は薄かった。

「何を呆けているのか貴様は。本当の戯けになるつもりか」
閉じた眼を押し開けると、逆さになった神王の姿があった。

黄金の鎧の一部が砕け、左眼の上から血が流れて顔の半分が赤く染まっている。左腕が不自然な方向に折れ曲がっているが、彼の怪我はそれだけで空間を圧する王の気配は衰えていない。むしろ傷を負った分、凄味が増していた。

「や、王様。どうする、私を殺すかい？」

言った瞬間、ライダーの眼が細められる。

「貴様、余を愚弄したいのか。ならば良からう。傷を治して後、手ずから断罪を下す」

それは勘弁だと苦笑いしながら、セイバーは瓦礫を掴み、今度こそ自分の足で立ち上がった。

「セイバー！」

「痛いって！殺す気が兄さん！」

瞬間、無事な方の肩を強い力で掴まれてセイバーは悲鳴を上げた。

振り向けばこちらも体のあちこちが裂けて、血が流れるまま肩で息をしているアーチャーと、いつもの物憂げな顔をしたランサーがいた。

「あ、ああ、すまん」

アーチャーは手を放すと、セイバーの肩をそつと押してランサーの方へ押しやりながらライダーの前に立った。

「戦いの結末はこうなった訳だが、ファラオよ。どうだ？」

返答代わりに、ライダーは半ばでへし折れた王笏を投げ捨てた。

「本来、裁定は覆らぬ。だがその劍士とその主が余の光輝を凌ぎ、この時代の民草を傷付けなかったことも事実。なれば、例外を認めよう」

セイバーのマスターを誅することはせぬ、とライダーは確かに言った。セイバーの肩から力が抜ける。

「セイバー、意識を保ちなさい。貴女方の成したことですよ」

ランサーに揺さぶられて、意識を繋ぎ止めながらセイバーはようやく形になりつつある足で大地を踏みしめ、首を振った。

「私だけでもマスターだけでも、こうはならなかったよ。貴女とアーチャーがいてくれたおかげさ。ありがとう」

ランサーはたおやかに微笑んだ。

死した戦士をヴァルハラへ導くときも、こんな顔をしていたのだろうか。セイバーは想像しかけてやめた。

まだやることは残っている。

ライダーに、聖杯の中身と本体について語らなければならない。

幸いにも、これだけ暴れたというのに愛歌から預かった瓶は割れていなかった。地味にサーヴァントの体より頑丈かもしれない瓶の強度に慄きつつ、セイバーは体に力を込めるのだった。

#

「これにてお終い。一件落着、めでたしめでたし……になれば良いんだけどね」

「それにはまだかかるわ。でしよう？エルザ」

「知ってるわよ。愛歌」

場所は東京都内。

愛歌に言わせると、こういう適当に内密のお話にはびつたり、という店に集まったのはこの聖杯戦争の関係者たちだった。

広々とした個室には、六人のマスターたちが集っている。本人がサーヴァント同伴で訪れていたり、使い魔だけだったりと形は違ったが生き残りのマスターは皆何かの形でこの空間に存在していた。

サーヴァントと共に訪れているエルザの眩きに反応した愛歌は、手を上げて澄んだ声を響かせた。

「沙条家名代として、聖杯戦争の中止を提案するわ。わたしたちの目指していた儀式は根幹が欺瞞だったのだから、続ける意味はないわ。それにこのまま放置して中身を放出させれば、協会からも教会からも許されない。その事態は避けるべきでしょう? ——

——セイバー、アサシン、アーチャー、バーサーカーの陣営はすでにこの案に賛成しているわ。ライダー、ランサー、キャスターをそれぞれに擁するあなた方はどうなの? ——

問われた人々の中で真つ先に答えたのは、鳥の形の使い魔のみを送って来たランサーのマスターだった。

「異存は無い。聖杯により根源に至れると聞き、私は参加を決めた。だがそれが人理定礎を害そうとするのなら、話は別だ。継続に賛成はできない」

石造りの鳥が、ランサーのマスター、ナイジェル・セイワードという名の魔術師の声

を響かせる。

淡々とした声には騙されていたことへの怒りどころか、感情がそもそも感じ取れなかった。使い魔越しだからそう聞こえるだけなのか、元々セイワードという魔術師がそういう人間なのかは、愛歌の隣に腰掛けているセイバーには分からなかった。

アサシンとセイバーを従えた愛歌は、使い魔の方へ優雅に微笑んで残りの二組へ視線をやる。

貴族様同士のお話みたいだなあ、とセイバーは頬杖について考える。

剣士の体は、見た目だけは回復したものの、怪我をした箇所の中身がまだ三分の一ほど張りぼてに近いためか、何となく気怠かった。

エルザの横に控えて時々視線を送ってくるアーチャーには、ひらひら手を振って心配ないということ伝える。その横で、自分と似たような居心地の悪さが諸に顔に出ている異を見つけて、セイバーは苦笑しかけた。

マスター同士の交渉ごとは、脅し合いなのだからサーヴァントは隙を見せないで黙って控えているが吉だ。

交渉ができるような頭の持ち主でもないのに、セイバーはほんやり主を見守っていた。

横のアサシンも似たようなものだが、こちらは愛歌に魅せられたように少女へと視線

を注いでいる。

ふと思いついて、つん、とセイバーは軽くアサシンの手の甲を突いた。

驚いたように顔を上げる暗殺者へ、剣士は小さくのんびりした笑みを向ける。

「お疲れ。アサシン。伊勢三の拠点はきみとバーサーカーが制圧したんだって？」

サーヴァントの聴力でしか聞こえない小声でセイバーは囁いた。

「……ええ。防壁は大体バーサーカーが破壊し、私が魔術師たちを粗方制圧しました。そこにあなた方とライダーとの戦闘が決着し、その時を見計らってバーサーカーのマスターがアレを見せました」

誰も殺すな、という愛歌の指示もアサシンは忠実に守ったのだ。

伊勢三一族は皆、神経毒により痺れるだけで済んだそうだ。

「それだけで伊勢三当主はこんなとこまで来たのかい？伊勢三は根源に至れるならば、街一つ滅んでも意に介さないような、典型的な魔術師だって愛歌が言っていたけど」

「あなた方とライダーの決着を見、動揺したところでまず根源に至れるかも分からないという言葉が効いたのでしよう。伊勢三当主は、ライダーの力に絶対の信を置いていましたから」

「……ライダーは全つ然彼らを信用してなかったみたいだけど」

「それは、典型的な魔術師と王ですから。そういうものでしよう。対等な信頼はまず望

めません」

ふうん、とセイバーは仮面を被っている伊勢三当主に目をやった。

表情の読めない仮面の老人は、ライダーと共にこの場に生身で現れてはいるものの、太陽王の気配が強烈すぎてマスターとサーヴァントにはとても見えなかつた。

その点はやや憂い顔のキャスターを伴い、苦悩するように頭を抱えている玲瓏館当主とは違っている。

「……あなたはこの場において平気なのですか？セイバー」

「んー？」

アサシンに問われてセイバーは首を傾げた。

「ライダーとの戦いで、傷を負ったのでしょうか？主が言うには、もう少し立ち位置を誤れば霊核を無くしていたような激戦だったと聞きましたが」

「まあ、私は前衛だから戦うのが役目だし、一応これで第一位サーヴァントの意地もあるからさ。本調子では無いけど、サーヴァントがマスターを放つたらかす訳にも行かないだろ。もちろん愛歌にはきみもいてくれるけど……。一先ず心配ありがとう、アサシン」

「……いえ」

アサシンは目を逸らす。

今の彼女は白い髑髏の仮面を外して、可愛らしい褐色の肌をした少女の顔を晒している。せつかくだから顔が見たいと愛歌が言い出したとか何とか、そんな理由らしい。

ただ何となく、セイバーはアサシンの言葉に砂粒のようなざらつきを感じた。

アサシンは愛歌に心酔しているが、正規のサーヴァント契約を交わした訳ではない。愛歌の無理くりの工作により、魔力を与えられている。

アサシンは召喚されて直後に、自らの正規の主を殺めているのだ。

故意の殺害だったか偶然だったのかセイバーは知らないし、正直なところさして興味もないが、愛歌の正規のサーヴァントである自分に何か思うところがあってもおかしくはないな、とセイバーは頬杖を付きつつ考えていた。

アサシンが愛歌を本心から守ってくれるならどちらでもいいんだけど、とセイバーはまだ怠い頭を動かして思う。

残念ながらそれを上手く伝えられるほど、彼女の口は上手くなかった。

「まあ、アサシン。お互いにさ、愛歌のためだし、もう少し頑張ろう。私たちは同じ主を持つているんだから」

剣士は、代わりにそんなことしか言えなかった。

褐色の肌の少女は、混じり気のない白髪の子女の顔を横目で伺い、澄んだ黒い瞳をじっと見つめる。

「……(こ)ち(ら)ん(そ)」

頷くアサシンにセイバーは少しほっとして表情を緩めるのだった。

「話し合いは、だからこれでお終い。聖杯戦争はこのときを持って終了よ」

そんな所へ、彼女たちの主の声が叩き込まれる。頬杖を外して、セイバーは部屋全体に意識を戻した。

「セイバー、アサシン。話は終わりよ」

「もうお終い？」

愛歌は言つて、セイバーの服の袖を引っばる。

「ええ。大聖杯はライダーが神殿で押し潰して壊すコトになったわ。ただどこかの誰かさんたちが派手に神殿を吸い取って壊してくれたから、完全回復に二日かかるそうよ」
「あちゃあ。……いや、あれは仕方なかったから」

セイバーがライダーの方を見ると、鷹揚に頷かれる。ライダーはそのまま愛歌とセイバーを一瞥して深く頷いてから、霊体となって消えて行った。

取り残される形になった伊勢三の当主は後を追って部屋を辞す。キャスターと共に玲瓏館当主も立ち去り、鳥の使い魔も窓を器用に開けて出て行った。

必然部屋に残ったのは、最初に同盟を組んだ面々になる。

「聖杯戦争強制終了まで後二日か。……つてことは、大聖杯を壊したらそれを繋ぎにし

てる俺たちは『座』へ直行で還ることになるのか？」

「恐らくはね。聖杯に燃料として留め置かれることはなく、直接に還ると思うさ」

バーサーカーの言葉に、サーヴァントたちはそれぞれ反応を返した。肩をすくめたり、鼻を鳴らしたり、淡々としていた。

「そつか。……でも、逆に考えると二日は自由な訳だ」

セイバーの言葉が宙に浮く。

寸の間全員が黙ったが、ぱしんと愛歌の手を打つ音でそれは破られた。

悪戯を思いついたチェシヤ猫のような顔で、愛歌はアサシンとセイバーの腕を取る
と、しがみつくようにして引つ張った。

「じゃあね、セイバーにアサシン。とりあえず——わたしと、デートしましょう
か」

は、と剣士と暗殺者が揃って固まる。

狂戦士と弓兵も、彼らのマスターたちも似たような顔で動きを止めた。
本気なのかと、剣士は腕に柔らかく絡み付いている主の顔を覗き込む。

花咲くような愛歌の笑顔は、彼女が本気なのだということを何よりも確かに証明して
いた。

Act—18

「デートってつまりは遊ぶことか」

「そうよ。ちなみにセイバー、あなたの子供の頃の遊びと言えば？」

「……楽しくはあったから狩りが遊びかな。失敗すると危なかつたから常にスリル満点だったし」

「はい却下。何千年前の考えよそれは」

仕方ないだろ、とセイバーは肩をすくめる。

一応の現代服に着替えたセイバーは、マスターである沙条愛歌に引つ張られて東京の昼日中に連れ出されていた。彼女たち以外には霊体となったアサシン、それに巽とバーサーカーがいた。

彼らが来た理由は、

「そう言えば、街で遊ぶって言ってもわたししたことがないからどうやるのか知らないわ。綾香に聞けば分かるかしら？」

などと愛歌が言った結果、東京の一般的な部分に一番詳しい異が引つ張られたのだ。結果彼は、金髪碧眼の英国人のバーサーカー、透き通ったような不思議な色の髪に碧眼の愛歌、年齢不相応な白髪のセイバーという雰囲気は違えど整った顔立ちの三人に囲まれる事態へと発展した。

目的も無くあちこち歩いたり、セイバーとアサシンが駅前の巨大なテレビ画面に目と口をぼかんと開けて見入るのを愛歌が笑ったりと、気の向くままに彷徨い歩いてから、彼らは東京の中心を離れた。

「箱入りのお嬢様みたいだなあ、マスターは」

都心ではぶつかっただけで人を殺しかねないアサシンが実体化できないからと、人の多い街を抜けた。向かった先はいつか訪れた冬枯れの公園である。

そこでアサシンと異を引つ張り回している愛歌を少し離れた木陰から見ながらセイバーは呟いた。

「魔術師の子は、皆そのようなものじゃないのかい？」

「そう……かもね」

愛歌に限って言うと、恐らく根っこにある理由が違うのだろうが全部説明しようとする根元云々の話へ繋がるのだから、セイバーにもそれは上手く説明できそうになかった。

「そういうバーサーカーはやっぱり魔術師なんだろう？きみが使う霊薬は、きみが作った神秘だからさ」

「霊薬に関してはそうだね。……でも僕も本職では無かったよ。典型的な魔術師は、あのランサーのマスターじゃないかな。効率的で無駄なことはしないタイプだね」

「ほうほう。確か名前はナイジェル・セイワードだったかな」

そう言えばあの魔術師、秘薬を愛歌に模倣されてたけど、とセイバーはバーサーカーを横目で見ると、バーサーカーは君のマスターなんだから仕方ないというように頭を振る。

完全に好青年にしか見えない彼だがその器はバーサーカー。真名はジキル博士。

人間の悪性を解き明かし、引いては引き剥がそうと霊薬を作り、その薬に飲まれてしまった人、だとセイバーは愛歌に聞いていた。

バーサーカーが、正義に拘るのはそのせいなのだろう。異に召喚されたのはその縁か。

正義の名の下に何年も続いた戦いの世に生まれたセイバーは、だから正義と口に出す人間をどうにもこうにも胡散臭く見てしまう。

ただ、数日見る限りバーサーカーは違うようだ。とセイバーは思った。

彼はただの題目の、都合の良い正義ではなく、もつと違うものを求めていた。

全き人の善がどこかにあると信じて求め、どうしても人の悪を許せなかった。まるで、夢をずっと信じている少年のようだと思う。

芯が純粋な人でなかったら、そのような研究を思い付きもしないだろう。実際セイバーはそんなことができると思つたことすらない。

「セイバー、君のマスターはどうしてあんなことを言い出したんだと思う？」

「あんなことつて、デート云々のことか。……ただ、楽しみたかつたんだろ。主に自分が」

「それだけかい？」

学士はやつぱり鋭いな、とセイバーは苦笑して、きらめく噴水の水をアサシンにかけている愛歌と、それを呆れ顔で見ている異に目をやった。

「違ふだろうね。試してるんだろうさ。私たちの誰かがこちらに残りたいと言ひ出すのじゃないかってね」

私は残る気ないけども、とセイバーは頭の後ろで手を組んだ。

「無いのかい？君のマスターなら聖杯が無くとも恐らく君たちを現界させておけるだろう」

「だろうねえ。でもほら、私は戦うための人間だから、用が済んだらいなくなつた方がいいのさ。それに正直なところ、今のこの世は好きじゃない。人とモノが多すぎてさ、私

「みたいな野育ちには生きにくいよ」

「意外だね。君はマスターのことを気に入っているようだったから残るかと思ったよ」

「バーサーカーは瞳を少し大きく見開いた。

「あー、うん、愛歌のことは好きだよ。でもこれは経験則だけど、闘う力がある人間の所には何かしら巡り巡って争いがやって来てしまうものなのさ。好むと好まざるとに關わらずね。だから、愛歌や綾香やあの子たちのお父上が平穩に生きるなら、私みたいなのはいい方が良いのさ」

「戦うための力とは、そういうものなのかい？」

「セイバーは頷いて、証拠は私だと胸に手を当てた。

「だって、そうやって戦っていたから私はサーヴァントになったんだからね」

「白髪の少女は乾いた笑みを浮かべ、アーチャーやライダー、ランサーも恐らく残らないだろうね、とセイバーは言った。

「キヤスターはよく分からないけど、アサシンは愛歌のことが大好きみたいだから、残るかもしれないね。……きみはどうするんだい、バーサーカー？もし留まることができたら、残るか？」

「いや、僕は残らない。サーヴァントの僕がいてはタツミのためにならない。彼は今なら普通の生活に戻るさ。……正義のためにと眦を決するのは、彼には似合っていない

かったんだ」

今度はバーサーカーが苦いものを噛んだように顔に影がさした。

「この戦いに召喚されたことを僕は少し悔いている。君のマスターや、オジマンディアス王のような規格外な存在がいる戦場には、タツミをそもそも立ち入らせるべきでは無かったよ」

「いや、あの二人はちよつと規格から外れすぎてるからさあ……」

「だとしてもさ。霊薬を手にできた時と同じように、僕は僕に機会が与えられた事が嬉しかった。嬉しかったが、それに浸るべきでは無かった。タツミの身を案じる、一人の友人ならね」

バーサーカーは大きく息を吐き出した。

セイバーには何も言えない。彼女の中にも彼の言うことに納得する思いがあったからだ。

聖杯戦争のマスターが、皆自分の願いの為にと戦う人間だけだったならこんなことは起きなかつたのだろう。

奇跡賜わず聖杯の気紛れな選定は、残酷にも程があつた。

いつか感じた疑問だったが、それも中身があつた獣では然もありませんでした。

少女二人と少年の明るい声が、剣士と狂戦士のいる木陰にまで届いた。

しかし、聖杯戦争が無かったのなら、あの光景はなかったのだろう。そう考えると複雑だった。

「何にしても、早くライダーの神殿が直れば良いのにな。そうしたらこの騒ぎもお終いにできるのに。……って、一番ぶっ壊したのは私だったか」

不必要に明るい声でセイバーは言い、雲を掴むように冬空に片手を突き上げた。

そこへ日溜まりから明るい声がかけられる。

「セイバー、バーサーカー！あなたたちはそんなところで何してるの？こつちに来なさいな」

「今行くよー！」

ふかふかしたコートに包まれて、小さい白兔のようになっている主へ叫び返して、ほらとセイバーはバーサーカーを伴って日向へ踏み出したのだった。

遊びが終われば、家へと戻る。

そろそろ学び舎への欠勤の日数を心配しだしている道案内の少年とその友人を家へ帰し、少女たち三人は屋敷へと戻った。

ずっと家を空けていた姉がちよつと変わった友人と共に帰って来たことを無邪気に喜ぶ妹に、父親の様子を聞けば、彼女は部屋を指差した。

「お父さん、部屋から出ないっていうのね、困ったわ」

不安そうに袖を引っ張る妹の頭を撫でて、姉は閉じた部屋の扉を見た。

「大丈夫よ、綾香。今やっている儀式が終わったら、お父さんも元気になるわ。準備の疲れが出てしまったただだから」

「ほんとう?」

「ほんとよ」

扉の前で話し合う姉妹の後ろで、暗殺者の従者と差し向かいに立ち、腕組みをして目を瞑っている剣の従者は背を壁に預けて沈黙していた。

扉の向こうにいるのは、一族代々の宿願を絶たれて失意に沈む魔術師なのか、娘の行く末を案じる父親なのか、どちらなのだろう。

どちらにしろ、明後日が上手くゆけばまた彼の時間は流れ出すだろうし、彼は自分の思うほど何かを失ったとはセイバーに思えなかった。

閉ざされた扉の前で、姉はかがんで妹の頭に手を乗せた。

「じゃあ綾香、退屈なら今日はちよつと夜遅くまで遊びましょうか」

「でも夜だよ。お外に行っちゃいけないんじゃない？ 聖杯せんそう、やっているんでしよう？」

「聖杯戦争はね、もうお終いな。だからこの子たちももうすぐ還つてしまうのよ」

「え？」

「おいやめろ、とセイバーは片目を開けて主に視線を送つたが、愛歌はどこ吹く風で唇に人差し指を当てた。

綾香はそのセイバーの方を振り向いた。

「セイバー、かえつちやうの？」

「ああ。私のやることはもうすぐ終わるんだ。それが無事済めばお別れさ」

大きな青い目がいつぱいに見開かれて震えるのを見て、セイバーは慌てた。

何とかしてくれよ、と愛歌に助けを求めるがこれまた当然のようにこにこ笑うだけだった。仕方ないかとセイバーは屈んで綾香と目線を合わせる。

「私やアサシンはね、きみのお姉さんに呼ばれて来たんだ。で、その用が終われば元いた

所へ帰るのさ。私にも家族はいるしね」

星のように澄んだ青い目を覗き込みながら、嘘は疲れるなあ、とセイバーは内心ため息をついた。

「……まあでも、用事の片がつくのは明後日だからね。まだいるんだけどさ」

「そうよ。だから今からその用の一つ目を片付けるわ」

言うど、愛歌はきよんとしているセイバーの手を取って玄関の方へ導いた。

「アサシンはお留守番して、綾香とお父さんを守っていてね」

「……承知しました、愛歌様」

いい子ね、と愛歌は今度は綾香を手招きすると、白い額にこつんと自分の額を当てた。

姉妹を中心にふわりと優しい流れの魔力が渦を巻き、綾香の黒髪が小さく舞い上がった。

「お姉ちゃん、いまのなあに？」

額を擦る妹に、姉は微笑みかけた。

「ちよつとしたおまじないよ、アサシンと仲良くしてあげてね」

妹と黒い少女、父親を家へ残し、愛歌は外に出た。

それから数分後には深々と冷える夜の街の上空に、二人の少女はいた。

軽鎧を纏って剣を背中に吊ったセイバーは、両手で主を抱えて夜の空を跳んでいた。

方向は愛歌が示しているものに従っているのだが、彼女はどこか目指すものがあるように進んでいる。

「で、愛歌。さつきのお呪いとやらは何のためで、私たちは一体どこへ行くんだい？大聖杯の様子でも見に行くのかい？」

「さつきのはただの毒消しの魔術よ。アサシンと綾香が遊んでも大丈夫なように。それと、行き先に関しては違うわよ。あなたがまだ会いたがっている人、アーチャーに会いに行くの」

足の止まったセイバーはビルの一つの屋上に着地し、腕の中の抱えた主をまじまじと見た。

「昼の間中、セイバーってばつまらなさそうなんだもの。あなた、本当は違うことがしたかったんでしょ？」

「……例えば？」

「ちゃんとアーチャーと戦いの決着をつけたい。違うかしら？奥多摩ではライダーに邪魔されてできなかったものね」

白髪の少女は固まる。凶星を刺されたように。

「事態が事態だから、あなたはわたしに何にも言わなかった。けれど、本当はアーチャーと再会するだけじゃない。ちゃんと大人になった自分で戦って、決着を付けたい。真の

望みはそつちでしょう」

「……………」

セイバーは肩の力を抜いて月を見上げた。

新雪のように白い呪われた髪が、さらさらと風に揺れる。

「はあ。参った。降参。主が鈍いからって隠せるものじゃなかったね」

「ねえ、少し酷いんじゃないかしら？ちゃんと考えたら、わたしはあなたのマスターなんだから分からないわけじゃないじゃない」

「だからごめんよ、我が主。的確な答えに従者はぐうの音も出ません」

「素直でよろしいわね、セイバー」

愛歌を抱え直して、セイバーは月夜に向けて声を上げて笑った。

傷ついた小さな獣の仔が遠吠えするかのような笑い声だった。

「ああそうだね、私は戦いたい。きみのことだつて好きだし、この街が壊れるのも嫌だ。それは心から本当さ。でもそれ以上にね、戦いたい。……そう思うのは、やっぱり私の芯が人間じゃないからかね」

愛歌は抱えられたまま腕を伸ばして、セイバーの頬に触れた。

「お馬鹿さん。お気楽に太陽王に喧嘩を売ったのがあなたでしょう。悩みすぎよ。それにアーチャーは千里眼を持つてるのよ。あなたの言いたいこともきつと分かっている

はずよ」

「あー、そっか。そうだったね。兄さんは眼が良すぎるからなあ。私の考えてることなんてお見通しか。……あと愛歌、あれは全然お気楽じゃない。私だって怖いことは怖かったよ。やらなきゃいけないと思っただけだから、やれただけだからな」

じゃあ兄さんの所へ行ってみよう、とセイバーはくすりと笑いながら言った。

「でも、どっちへ行けばいいんだろうか？この街、かなり広いだろ」

「それは分かるわ。エルザにあなたの宝具貸したままなの。だからその反応を辿ればいい」

「……初めてきみに宝具を取られていて良かったと思つたよ。ありがとう、マスター愛歌」

剣士の英霊は言つて、コンクリートを蹴つて夜の闇に身を踊らせたのだった。

A c t — 1 9

何かの役に立ちそうだから持つていて、と気軽に渡された奇跡の羽が一枚あった。

大きさは手のひらからはみ出すほど。形は少し孔雀のものに似ている。色は嵐の空のような灰色と新雪のような白で、手触りは絹より滑らか。

見た目に反した重みを感じたし、込められた神秘も膨大だった。

それも当然である。あれは霊鳥スィームルグの翼だったのだから。

スィームルグはペルシアの創世神話にも登場する聖なる鳥。翼には癒やし力があ
り、山に捨てられた英雄の子を育て次代の英雄とし、彼が長じた後も様々な場面で助け
に現れたという。

その羽を持つ者となれば、普通はその高名な英雄の方を思い浮かべるだろう。

しかし、今回喚ばれた英霊は、始まりの境遇は同じでも全く違う道を辿った人間だっ
た。

「英雄や将軍と言うよりあのセイバーは狩人だしな。自分の良心に従うし本人も悪人
じゃあないが、嫌だと思えば王でも何でも関係なく逆らう。つまり根っここの部分は、我

儘で気ままな奴だ」

とは、セイバー個人を知るアーチャーの弁だった。

そう語るアーチャーは、エルザの前で時折見せる何もかもを見透かしたような顔ではなく、心底楽しそうな外見年齢相応の青年の顔をしていた。

あなたにとってはそれが嬉しいのね、とエルザが言うと、アーチャーは頷いた。

「まあな。マスター共々気ままに振る舞う奴だが……間違ったことには手を出さない。悪事に関する云々つてのは、あのセイバーの頭にはない。あいつがそういう人間になれてたつてのは、嬉しいさ。放り出しちまったとは言え、兄貴分だからな、俺は」

改めてエルザは思った。

あのセイバーは、アーチャーがアーラシユ・カマンガーとして護つたものの象徴の一つなのだ。

アーラシユは生命を賭して平和な世を築いた英雄だ。

自分が去つた後の、平和な世に生きるであろう多くの人々のことを彼は夢に見、それらを思い描いて五体を散らした。

アーラシユの死ぬとき、まだ幼い無垢な子どもだったというセイバーは、正に彼らが作り上げた世を生きて大人になり、ああいう英霊に至った。

きつと、懐かしい夢の欠片が現れたようなものだろう。それも、ただ見るだけの夢と

違つて生きて動いて立ち歩くのだ。嬉しくないわけがない。

本来なら、殺し合うべき状況で再会したわけだが、今回はそれも無い。だからこそ後腐れなく、彼らは喜びの感情を露わにしていた。

自分の子が育つて目の前に成長して現れていたなら、そう思ったのだろうかとエルザは東の間考え、やめた。

夜空に翻る白い影が二つ、ふと目に入ったからだ。

今、目が冴えていたエルザは屋上にいて、夜の東京を見つめていた。アーチャーも同じく実体化して、鉄柵に背中を預けて寄り掛かっている。

二人がいる屋上に着地してきたのは、二人の少女。

白髪の少女に姫抱きにされていた小柄な少女は、地面に降り立つと親しげに片手を上げた。

「こんばんは、エルザにアーチャー」

隣のセイバーも軽く頭を下げ、癖のない白髪がさらさら揺れた。

アーチャーはあくまで気さくに、片目を瞑つたままセイバーに向けて片手を上げた。

「よ。またマスターを抱えて東奔西走か？」

「……そうなのは、あなたたちのせいなんだが。私の宝具を、伊勢三の子どもにやつただらう？」

やや不服そうな顔でセイバーは腕組みをした。

愛歌に渡されたセイバーの宝具を、エルザは確かに今は持っていないかった。

奥多摩の伊勢三の本陣に赴いたときに見た一人の子どもに、やってしまったからだ。

その子どもは弱く、今にも死にかけていた。しかし彼は様々な機械に繋がれ、無理に魔力タンクとして生かされていたのだ。

彼を見た瞬間、エルザは一瞬自分が何をしにここに来たのか忘れてしまっていた。

助けられないのか、と反射的に願い……気付いたら借りていたはずの宝具は、魔力の粒子になって子どもに溶け込んでしまっていたのだ。

エルザも驚いたが、光を取り込んだ途端、子ども呼吸が目に見えて安らかになった。

だから取り戻す気には到底なれず、そのままにしてしまった。そのことを、時期を逃して言いそびれていたのだ。

「あー、そうか。お前さんたち宝具の反応を頼りに動いて、奥多摩の方まで行く羽目になったんだな。ま、勘弁しろよ」

事情を見通したららしいアーチャーが言うのと、セイバーは組んでいた腕を解いた。

彼女も本心で怒っていたわけでは無かったようだ。

「何があつたかは見たら分かるよ。あれは空気を読んでくれる宝具だし、元々私のものでもない。幻獣の体の一部なんだから、多分勝手にやったんだろう。あの子から取り上

げたりしないさ」

「いいの？あなたのなの……」

「良いって。持ってたって壊すだけしかできない私より、あの子の方がよほど良い持ち主さ」

「ええ。わたしたちは怒ってないわ。全くね。せいぜい無駄足を踏んだことを、フアラオに大笑いされてしまっただけなもの」

どうやら持ち主本人より、その主の方が面白くないらしい。

つんとしたまま愛歌は続けた。

「それに、フアラオもお友達の聖人みたいなあの子がお気に入りのようだし、滅多なことにはならないでしょう」

「……それは、良かったわ。ところでセイバーとそのマスター。あなたたちは何しに来たの？」

エルザが言うと、柵に背中をもたせかけていたアーチャーは体を離して静かにセイバーを見た。

けろりと、セイバーは何でもないように言った。

「アーチャーと、果し合いがしたくて」

「そうか。やっぱりな」

アーチャーとセイバーの周りを魔力の金色の光が取り巻く。それが晴れると、二人は共に鎧を換装していた。

アーチャーは弓を顕現させたまま、やや目尻を下げてエルザの方を見た。

「悪いな、エルザ。こいつ、何を言っても聞きそうにない。……ま、殺し殺されにはならないだろうけどな、恐らく」

逆に言えば果し合いは避けられないらしい。

戸惑うエルザの横に、転移して愛歌は現れた。

「突然だけど、最後だからちよつとアーチャーを貸してちょうだい。まさかここに来て、サーヴァントを器に捧げるような馬鹿はしないから」

くす、と愛歌は微笑みながら、首を少しだけ横に傾げた。

「セイバーはね、王様に邪魔されてしまった続きがしたいのよ。わたしもそれがどうなるか気になる。ね、いいでしょう?」

どうやらこのマスターには、詳しく説明する気が最初から無いようだった。

その従者も背中の中の剣に手をかけて笑っている。あいつは気ままなやつだ、というアーチャーの言葉がエルザには思い出された。

「……分かったわ。でも、令呪の強化も宝具の使用もなしで良いかしら」

「うん。それで良いよ。ありがとう、エルザ。令呪なんて昔は無かったものだしね。妙

な強化はいらないや。何より、もったいないし」

屈託なくセイバーは頷き、愛歌の方をちらりと見た。

彼女は微笑むと、くるりと指先を回す。

次の瞬間、気付けば彼らは山の中に立っていた。

音もおいも感じるすべてが変化していた。今更驚くのも馬鹿らしくなるほど、見事な転移だった。

「都心から適当に遠くて、人はいないところよ。ライダーやランサーは気にしないで良いし、キャスターの遠見も届かないわ」

得意げにも見える愛歌にアーチャーは苦笑しながら、得物である紅い大弓と数本の矢を手の中に顕現させた。

セイバーも応じるように、大剣を鞘から抜いた。

「上等だ。助かるぜ、魔術師^{メイガス}。——じゃ、始めるとするか、セイバー」

「そうだね、アーチャー」

紅い弓と黒い剣が、月光を浴びて光った——と思う間もなく、サーヴァントたちはその場から消えていた。

いや、消えたのではなく、単に彼らは純粹な脚力で跳び上がったただけだ。その速度が見えなかったのだ。

数秒後には見えないほど離れた所で轟音が轟いて、吹いてきた風がエルザの赤い髪と愛歌の透き通った色の髪を揺らした。

「……とんでも無いわね。やっぱり」

「二人とも、成りはあれでも英霊だもの。まさに、人の形をした天災ね」

きみにだけは言われたくない、とセイバー辺りが文句を言いそうなことを、愛歌は笑顔で言つてのけた。

「わたしたちはちよつと離れて観戦しましょう。もちろん、セイバーが勝つと思うけど」

続けてそんなことを言い出すものだから、エルザもつい口を開いた。

「勝つのはアーチャーよ。ペルシアの大英雄だもの」

「そんなことないわ。だってセイバーは第一位だもの。負けないわ」

むきになったように愛歌が言い募り、また遠くで木が大きな音を立てて倒れる音が木霊していた。

#

—— やっぱり、とんでもなく強いなあ。

木々の間を跳び抜けながら、セイバーはそう思った。

髪や手足の一部を矢が掠めながら飛んで行く。外れた矢は木を次々と切り倒しているが、的になっているセイバーの顔に恐怖や焦燥は全くなかった。

小さな口は三日月のように吊り上がり、黒い瞳は明るく輝いている。

恐らく殺し合いにはならないとアーチャーは言った。が、一矢一矢が山の表面をすり鉢状に削り取るほどののだ。細身の少女然とした外見に反して、頑丈なセイバーも霊核を貫かれれば命とりになる。

それでも、剣士のサーヴァントは楽しんでいた。

続きができるのだ。こうやって戦いたかったのだ。ずっとずっと。誰の邪魔は許さない。

彼女として自分が、大部分の人間と異なった価値観を持っていることも理解しているのだ。

だが、それがどうした。それが何だ。

自分は生きた。霊鳥に、優しい弓兵に、多くの人やモノに出会って生かされた。彼らと別れた後は、自分なりに真つ当に生きた。彼らに顔向けできなくなるようなことは、しなかったと思っっている。

自分のような人からの外れ者でも、そういう在り方が許される時代を生きられたのだ。

その嬉しさを、その機会を与えてくれた本人にぶつけるのはどうなのかしら、と主は首を捻っていたが、仕方ない。

他のやり方がどうも思いつかなかったのだ。言葉をいくつも重ねるのは、セイバーは正直な所苦手だ。物を言うより剣を合わせた方が分かりやすい。

木立の向こうのアーチャーの顔は見えないが、笑っているような気がした。

——でも、このままだとジリ貧だ。それは嫌だ。今度こそ勝ちたい……いや、勝つ“んだから。

抜いたものの森の中ではすぐに邪魔になった大剣をセイバーは既に背中に収めてい
る。

猿よりも身軽に跳びまわるセイバーは、円を描くような軌道を描きながら徐々にアー
チャーの方へと向かっていたが、彼も高速で移動しながら夜の森を駆け抜けているので
なかなか距離が詰めづらかった。

よし、とセイバーは両足に力を籠めた。

筋肉が悲鳴を上げて千切れるのも無視し、魔力を放出する。

セイバーの放出する魔力には、風の特徴が自動で付与されるのだ。

彼女の動きが一度止まり、大きく腰を落とした。

瞬間、アーチャーの矢が真正面から唸りを上げて襲い掛かって来る。

眼前まで迫ったそれを、セイバーは躲さなかった。

血管が切れるのも、全身に衝撃が走って骨が軋むのも構わずに、矢を片手で掴む。ば
きりと、矢が掌の中でへし折れる。

——捕まえた。

矢の飛んできた方角を見、セイバーはにやりと笑った。

次の瞬間、いつかのように風の弾丸となってセイバーは自ら飛び出した。

視力が未来を見通せるほどけた外れに高いあのアーチャー相手では、奇襲はろくに役

に立たないのだ。正面から力押しで距離を詰めにかかるしかない。

弾けた血管から血が吹きで、赤い糸のように後ろに流れて行く。大剣ではなく、短剣を手にしてセイバーは駆ける。

木々の向こうに、赤い大弓とそれを引き絞っている弓兵を捉えた。

それを見た瞬間、セイバーは短剣を何のためらいもなく投擲した。

魔力を纏わせ、鷹のように宙を切つて飛んだ短剣に。アーチャーの意識が一瞬削がれる。

とはいえそれは、瞬き以下の時間だった。矢が放たれる速度が一瞬遅くなっただけである。

だが、アーチャーの視界はもう一つ飛んでくる光を捉えた。

蜂のような唸りを上げてアーチャーの目に突き刺さる角度で飛来したのは、セイバーがつかみ取っていた折れた矢だった。

顔を背けてアーチャーが矢を躲そうとする。

その刹那に。セイバーはアーチャーが佇む木までたどり着いた。

「ツッ」

無言の気合と共に、セイバーはアーチャーの足場である木を大剣で両断した。一太刀で木はめきめきと音を立てて倒れ、地面は抉れて砂埃が舞う。

やむを得ず宙に飛び上がったアーチャーを木を切り倒して地面に立つセイバーは見上、目が細められる。

再びの全力の魔力放出で、セイバーはアーチャーと同じ高さまで飛び上がった。

大剣の横殴りの一撃を、アーチャーは弓で受けた。大弓は軋み、アーチャーは顔をかめる。

「———どんな馬鹿力してんだ、お前！」

「耐えられるだろ、兄さんならさアツ！どうせ剣に斬られちゃくれないんだから！」

吼えるように叫び返して、セイバーは大剣を両手で持って押した。呆気ない音がして、アーチャーの弓が彼の手の中で碎け散る。

だが、彼は躊躇いもしなかった。弓を惜しむこともなかった。

空中を落ちながら体を振り、アーチャーは大剣を持つ手を蹴り飛ばす。無茶な機動に不意を討たれたセイバーの手から、剣が吹き飛ばされて夜の闇に消えた。

セイバーは舌打ちをして地面に降り立った。

アーチャーも彼女のすぐ目の前に着地した。木が吹き飛んで地が抉れ、開けた場所。二人は向き直った。

これで、双方武器は失った。

「まあ、結局こうなるのか」

「殴り合いか。昔と変わらない落ちになるとは思つてなかつたなあ」

頬を流れる血を乱暴に拭い、セイバーは無手のまま構えを取つた。

アーチャーも同じく碎けた肩当を外して地面に放り投げ、拳を構えた。

「第二幕、とでもいえば良いのか、これ？」

「さあなあ。ま、気取つた言い方なんぞ止しとけ。——行くぞ」

そうやって、英霊同士の間は再び山を震わして始まつたのだつた。

鳥を親にし人を遠く眺め、岩を枕に獸を狩る。

完結しているが故に厳しい生き方で、何よりその子どもだけは翼が無かったから、地を一人で駆け回っているしかなかった。己だけ決定的にきょうだいとは違うということが、寂しくないわけがない。

初めて出会ったときは、感情を表情に上手くのせるのにも苦勞していた。

それでもその子どもは、人間を憎んではいなかった。

母親の腕の代わりに翼しか知らず、暖かい炉端の代わりに洞窟の焚火しか知らない。

知らないからこそ、憎しみも恨みも持ち合わせずにただただ生きていた。

確かに、その子は体が神代の先祖返りで頑丈だった。だが、それ以外は母親の膝に甘えている子どもとどこも違わなかったのだ。

人の世で生きている自分に触れ、少しずつ色々なことを吸収するたびに、その子どもは表情が豊かになっていった。

確かにそれは楽しかった。

自分のしていることは、人に戻るか否かという選択肢を突きつけているものだと知ってしまった後でも、楽しいという感情は本物だったのだ。

けれど最後にあつた日に、もう二度と会えなくなると伝えた日に、すっかり身に付けていた豊かな表情で、行くな、と止められたときは、ああ、しまったな、とも思った。

教えるだけ教えて去つていては、最初にこの子どもを放り捨てた親と何も変わらないではないか。

それでも、と己は選択した。

渾身の一矢を放つて、戦を止めると決めた。

神代の如き戦士は己が最後の一人となるように。

この大地の人々すべてが、戦の無い世で暮らせるように。

そして、自由な国の自由な空の下で、人々の輪の中に入った白髪の少女が笑顔を浮かべて居られるように。

それらを願つて己は弓を弾いた。結末を見届けることは無かったが、その子どもは成長して、一端の口を利くようになって、今日の前にいる。

わずかに面影の残る色白の顔に浮かんでいるのは、不器用でどこか欠けたような微笑みではない。

心からの歓喜を素直に表し、相手に何の銜いもなくそれをぶつけていた。

——最初に踏み込んだのは、セイバーが先だった。

アーチャーに比べればかなり小柄な彼女は、前に飛び込むしかない。

地を這うようにして襲い掛かった。

見た目に反した豪力の剣士の突進をアーチャーは笑つて受け止めた。

力はあってもセイバーは体重が軽いのだ。

腕を捕まれ受け止められて、セイバーは止まる。

だが固められた腕を基点に、セイバーの体がすつと沈んだ。

腕から嫌な音がするのも構わず、セイバーは蹴りをアーチャーの膝に叩き込んだ。

姿勢の崩れた彼の力が緩むと、セイバーは腕をもぎ離してアーチャーの胴に逆の拳を打ち込んだ。

肉と肉のぶつかる鈍い音がする。

だが、驚きの表情を浮かべたのはセイバーだった。

「その程度か？セイバー」

セイバーは猫のような俊敏さで後ろに跳ぶと、調子を確かめるように腕を振った。

「あ、そう言えば、頑健スキル持ちなんだったね、兄さんは」

「……お前、まさかそれを忘れてたのか？」

「うん」

けろりとセイバーは何でもないうちに頷いた。

本能任せも大概にしると、アーチャーは呆れた。

とはいえあちらも、頑丈なのは変わらないらしい。

腕一本は取ったと思ったのに、セイバーの様子では大した損傷では無かったようだ。

汚れの一つもない雪のような白髪を手で払って、セイバーは再び構えを取った。

「仕方ないや。保有魔力が尽きるまでやろうか」

「お前……我儘な奴だなあ。どうせマスターからの魔力ライン、自分で断つてんだろ？」
照れくさげにセイバーは頬をかいた。

「分かつてるさ。これは我儘だよ。私はさ、できるだけ生きてるときみたいに戦いた
いんだ。……やり直しはできないってのは知ってるけど、どうしてもさ」

セイバーの顔に、ほんの一瞬錆びた笑みが過ぎって消えた。

まだ若い少女の外見に合わない乾いたその顔に、アーチャーはふいに隔たった年月を
感じた。

「お前は、長いこと生きたんだな」

「そうだよ。兄さんの歳は越えた」

「一人で、か？」

「二人のときも、そうじゃないときもあったよ」

何故そのようなことを聞く、と言いたげにセイバーは眉をひそめた。

まあ聞け、アーチャーは右手を広げた。

「アフタル、お前の世界は、広がったか？」

聞かれた途端、セイバーはにやりと子どものように笑って、目の前の風景をすべて受

け入れるように両腕を一杯に広げた。

「うん！世界は広がった。私はそれを知ってるし、覚えてる。今でもずっと、これからもずっとさ」

「……じゃあ、お前さんがマスターに肩入れするのもそれが原因か？あのお嬢さんがただのマスターなら、ファラオに喧嘩なんぞ売らんだろう」

セイバーの目が少し泳いで、ぼそりと一言った。

「子ども捕まえて、立派な王様が怪物^{ボトニアテロン}王女は無いだろうって、そう思っただけだよ」

「……そりゃ何ともな。まあ、あのマスターが只者じゃないってのは、お前だつて分かってるだろう」

「何度も聞かれてるけど分かっている。その度に何度だつてこう答える。——あの子が何をして何になるかはあの子が決める。私はその選択を信じる。そして第一に、あの子は怪物にはならないって言ったもの」

むん、とセイバーは胸を張った。

はは、とアーチャーは顔を片手で覆って笑い声を上げた。

笑い声は次第に大きくなり、やがて呵々とアーチャーは笑った。セイバーはそれをしばらく見守り、彼の笑いが収まってから再び拳を構えた。

「話は終わりだな。戦おうか。尋常な勝負つてやつだ」

「最初っからそう言ってるじゃないか！」

劍士と弓兵は、再び踏み込む。

一足が大地を蹴るたび、地面は割れ木が吹き飛ぶ。

使い慣れた武器もとつくに手から離れているのだ。殴り合い、蹴り合い、培ってきた技もどこかに打ち捨ててしまうまで彼らは戦った。

次なる朝日を浴びて、同時に大地に倒れ込み、ほとんど同時に意識を手放すまでの戦いだっただった。

#####

「本当におぼかさん。何やっているのよ、セイバー」

岩が露出している大地に、仰向けで白髪の剣士は倒れていた。その主である少女は、すたすたと近づいてかがみ込む。

閉じていた瞼が名を呼ばれた途端に開かれ、黒い瞳が逆さまの沙条愛歌の姿を映し出した。

「あ、おはよう。愛歌」

「おはよう。寝坊助剣士さん。最高クラスの頑健持ちに正面から殴り合いだなんて、呆れてものも言えないわ」

「……」

冷めた愛歌の視線を直視できずよいしょ、と掛け声だけをかけて、セイバーは半身を起こした。

ふと見ると、数メートル離れたところにはアーチャーが倒れていて、その横には愛歌のようにエルザがいた。

あちらはまだ回復しきれていないのか、倒れたまま片手だけをひらひら振っている。それに手を振り返して、セイバーは自分の体の調子確かめた。痺れや痛みが残って

いるが、数時間で回復するだろうと思われる程度だった。

「あなたの回復力が高いというより、わたしとエルザの供給魔力の差よ」

与えられている魔力がアーチャーのものより多いため、セイバーの方が先に回復した、ということを受歌は言っていた。

「決着は……どうなったんだ？」

「覚えていないの？」

「数時間分は覚えているんだけど、最後がどうも曖昧だ。根競べになって殴り合ったと思うけど」

セイバーは地面に手足を投げ出したまま、聞いた。

愛歌は呆れたように肩を竦めると、その横に膝を揃え、コートの裾が地面に触れるのも構わずに腰かけた。

「わたしたちから見ていた分には、相打ちよ。ほとんど同時に意識が飛んだみたい。尤も、あなたたちはサーヴァントだから気絶も一瞬だったようだけど」

「……そっか」

セイバーは空を見上げた。

朝焼けの空を、鳥が一羽円を描いて飛んでいた。甲高い鳴き声が荒れた山に木霊していく。

「悔しい?」

何気ない一言に、セイバーは愛歌の方を見た。

「そりやそうだよ。ああ、また勝てなかつたって気持ちで一杯さ」

「その割には落ち込んでいないのね」

「きみにはそう見えるのかい? 結構落ち込んでるんだよ、これでも。……でも確かにさ

……悔しいけど、これが結末だよな、って受け入れる気持ちもあるんだよ」

愛歌が首を傾げる。

セイバーはゆつくりと、小さな子どもに物の道理を説くように言葉を編んだ。

「何度こうして召喚されても、何度めぐり合つて戦えても、結局私は満たされないんだろ
うさ。だって、本来の私たちはもうこの世のどこにもいない。どれだけ生前と同じ人格
があつたつて、サーヴァントは影法師みたいなものだもの。同じ道行をなぞるだけさ」

「何度呼ばれても、あなたたちは満たされないの?」

「うん。満たされないさ。でも仕方ないやね。この渴きを癒せたのは、生者だったとき
の私だったんだよ。こうやって戦つても、やり直しにはならない。過ぎたことはもう戻
せやしないからね」

それでもいいんだけど、とセイバーは笑つてふらつきながらも立ち上がつて、エルザ
とアーチャーの方へ手を振つた。

「乾いたまま、死んだままでもあなたは良いって言うのかしら？そんなの、虚しいんじゃない？」

愛歌は、頬杖をつけて問いかける。どこか物憂げな主の手を取って、セイバーは彼女を立たせた。

朝日に染まる少女の前にセイバーは屈んで、彼女と視線の高さをしつかりと合わせた。

「虚しくない……って言えば嘘だよ。虚しい時もある、渇きが収まらない時もある。でもそれはそれで良いのさ。今このときが楽しかったのは、本当だから」

元々、すべてのものは虚も実も入り混じった混沌——根源の渦から分かれたれているのだから。

英霊になつても、セイバーは虚しさと手ごたえの間を行ったり来たりだが、それも己の在り方だと思っている。

半端な己が関わって守れた者があるならば、少しでも物事を良い方へと転がす手助けができたというなら、また先へ行こうと思えるのだ。

言うまでもなく、死者サレヴァントに先はない。繰り返し、焼き直しの機会しか与えられることは無いし、それも稀だ。

だから、己は存在自体が欺瞞かもしれない。

それでも、戦うときの兄の笑いは一度見たら心が暖かくなった。

数日だけの仮初の生でも、あれが見られたなら意味はある。あちらもそうだったなら良い。

それに目の前の少女が浮かべている考え深げな静かな表情は本物だと、セイバーは思った。

思うことにして、信じたのだ。

どこかが凍り付いて止まってしまっている、根源に繋がった少女、沙条愛歌。

彼女の中の歯車の一つが動いて、彼女の世界がわずかでも鮮やかに回り始めたというのなら、この仮初の影法師のような生にも、自分の我儘を通した以上の意味もある気がした。

手足を伸ばして朝日を浴びる。

泣いても笑っても、己のすべきことは最後に戦うことだけだ。

「次の相手は黙示録の獣……の卵か」

「卵のうちにきちんと壊してね。わたし、あれ嫌いだから」

あなたのお願いを聞いたのだから次はわたしのお願いを聞いてよね、と愛歌は言い、セイバーは苦笑した。

「壊すのは私じゃなくてファラオだよ」

「知ってるわよ。もう、そういう意味じゃないわ。頑張りなさいってことよ」

たはは、と気の抜けたような笑いを漏らして、セイバーはアーチャーたちの方へ歩いて行つた。

アーチャーはアーチャーで、エルザに色々と言われていた。

幾ら何でも、妹分を容赦なく蹴り飛ばすわ殴り倒すわ大暴れするのはどうなのだろうか、と。

アーチャーは若干決まり悪げに頬をかきながら聞いていた。

自分のようなサーヴァント相手に、そういう所を気にかけてくれる人もいるのだ、とセイバーは意外に思い、へどもどするアーチャーとエルザのやり取りが愉快で何も言わなかった。

宥めてほしそうなアーチャーの視線を、頭の後ろで手を組んで観察しながらセイバーは普通に受け流した。

「ねえ、エルザ。そのくらいにしないかしら？早く退散しないと、教会か協会にばれてしまうもの」

セイバーに全く仲介する気がないと悟つたのか、愛歌の方がエルザの肩を軽く叩いた。

「……分かつたわ。言いたいことはあるけど、この国の協会に追っかけられたくないも

の

「うん。それじゃあ、帰りましょう」

獣の卵が、足の下で胎動し続けている都まで。

そう愛歌が付け加えると、セイバーは組んでいた腕を解き、エルザとアーチャーの表情も引き締まった。

「じゃあ、戻るわね」

行きと同じに愛歌が指をくるりと振ると、二人のマスターと二騎のサーヴァントは、あつという間に消え失せた。

土が露わになった大地の上を、冷たい風が吹きすぎ砂が僅かに巻き上がる。

風が収まったあとの戦いの場には、荒れた山以外何も残っていないかった。

A c t — 2 1

これまで、セイバー陣営がよく関わっていたのは、組み込んだアサシンを抜かせば、まずアーチャー陣営、次にバーサーカー陣営、最後にライダー陣営である。

ランサーやキャスターの真名すらセイバーは知らなかった。

愛歌から、ランサーは北欧の戦乙女ブリュンヒルデ、キャスターは五大元素使いパラケルススと聞いても、セイバーはこれまた高名な英雄が現界していたのだなど、呑気なことを思っていた。

ランサーとは最初に戦ったきりだったのだが、直に再び会ってみて、セイバーはランサーの美しさに素直に見とれた。

愛歌には微妙に白い目で見られたが、綺麗なものを綺麗と思つて何が悪いのかセイバーには分からない。

ランサーの美しさは地平線に沈む夕日や、嵐の後の空にかかる虹のようなものだ。

セイバーにとっては、それらを美しいと感じるのは、水が上から下へと落ちるより自

然なことだった。

だが、それにしても。

「ランサーの攻撃が最大になるのが、まさか英雄限定とは……」

予想外だった、とセイバーは首を振り、ランサーは身の丈以上の豪槍を両手でそつと握り込んだ。

アーチャーたちと別れて東京に戻り、また愛歌に付き合つて外を巡っていたセイバーの元に現れたのは、ランサーである。

何事かと思いきや、ランサーは彼女らを拠点に導いた。

そこにいたのは彼女のマスターのナイジェル・セイワード。

彼は淡々と、ランサーの宝具の特性を開帳した。

彼女の宝具は、彼女が抱く愛に比例して威力を高める。

そして勇者の魂を導く戦乙女だったランサーが愛する者とは、所謂英霊たちだ。

極端な話、この東京に英霊として呼び出された者は、ランサーにとっては愛を向ける対象となり得る。

だが、逆に彼女が愛を注げない者は、宝具の威力は発揮されにくいのだとナイジェルは明かした。

「当然、あんな獣の卵は無理、と」

「面目ありません……」

「いやいや、むしろあれを慈しめる者ってこの世に存在してるのかな……」

愛歌は嘆息し、セイバーは額に手を当てた。

ランサーはそつと睫毛に縁どられた宝石のような瞳を伏せる。

「それでも君は十分強いだろ。私と戦ったとき、ええと……北欧のルーンだったかな

……そういうの、使ってただろ？」

「そうだ。ランサーは最初のルーンを保有している。宝具を一つ封じられたも同然だが、支障はない。しかし、一応非常時に前線を担うだろうセイバーには、明かしておくべきかと判断した」

答えたのは相変わらず感情の読めない彼女のマスターだった。この言い方だと、彼にとっては、フアラオの神殿で獣の卵を壊しきれなかった場合という最悪の展開も、想像の範疇らしい。

その、常に最悪を想定しておくという判断力は、頼りになる。

しかし、己の喜怒哀楽に忠実に振る舞う質だからか、セイバーはこういう類の人間は苦手だった。

それでも、感情を読ませないことにかけては、愛歌の可憐な笑顔もナイジェルの無表情といい勝負だと思っていた。

その愛歌は、ランサーに軽く近寄ると魔銀ミスリルで造られた槍をじつと見つめた。

「でもね、あなたの槍、愛せないものに対しては……軽すぎるんじゃないかしら」

「まあ、武器の軽さなんて些事だよ、些事。ランサーは強いもの。頼りにしてるよ」

セイバーは眉をひそめている愛歌に向けて気軽に言つてのけ、ランサーに片手を差し出した。しばし戸惑つてから、ランサーはその手を取る。

槍士は控えめな笑顔を、剣士は屈託のない笑顔を浮かべ、しっかりと手を握り合つた。そこに冷めたマスターの声が浴びせかけられる。

「しかしこれで、セイバー、アーチャー、ランサーの宝具はすべて使えないか、使えても威力が振るわないという事態に陥っているのだ」

「アサシンのとバーサーカーのとは、下手に使うとあの子たちが獣に取り込まれてしまふ……。七対一とはいえ、気を抜いては駄目ね」

冷静に考えると、三騎士の宝具がどれも残念なことになっているのよね、と愛歌は首を振つた。

「ライダーの神殿が復活するのは今晚。でももう一度、卵の様子を確かめておきたいわ。玲瓏館によつて、キャスターを貸してもらいましようか」

そんなあつさりとサーヴァントを貸してくれるのだろうか、とセイバーは疑問に思いつつ、愛歌についてランサーの拠点を後にしたのだった。

玲瓏館のサーヴァント、キャスターは元々大聖杯が置かれている洞窟を監視していた。

それに加えて、洞窟の入り口に魔術による封印も施している。

どちらもできないセイバーは、頭の下がる思いだった。

「あの《泥》は落ち着いています。このまま何事もなければ、ライダーの宝具で封殺できるでしょう」

いきなり押し掛けてきた愛歌とセイバーにも嫌な顔ひとつ見せず、玲瓏館の門前に現れたキャスターはそう言った。

愛歌と話し込むキャスターは彼女の様子を観察しているようだった。そういえば、根源接続者と生粋の魔術師というのは直に対面すると、どういう関係性になるのだろうか

興味を懐きつつも、セイバーは気楽に彼らの調子を眺めている。

しかし、魔術云々となるとセイバーは途端によく分からなくなった。

目を逸らしたそのとき、彼女はふと、館の方から視線を感じた。

敵意はほぼ感じ取れないが、偵察するようなその視線が来ている方向を見返すと、同じ方向を見ていたらしいキャスターと目が合う。

彼は涼やかに微笑んだ。

「気にしないで下さい、セイバー。敵ではありません。ただ、好奇心の強い幼子が見ているだけなのです」

「美沙夜ちゃんでしょう？ あんまり迂闊に英霊をのぞき見しちゃ駄目よ。この能天気セイバーだからいいけれど、あの王様とかだったら目を焼かれてしまうわ」

今度はキャスターが苦笑した。

ヴァン・ホーエンハイム・パラケルススは生粋の魔術師と聞いていたが、この様子だけを見れば、学士か、医師をしていいる優しい青年と言っても通りそうだった。

「いえ、実は既に行っていました。ですがそれが却って王のお気に召したようです。私たちの同盟が成功した理由もそれです。ファラオは、彼女の中に王者の気風を感じ取ったと仰せでした」

「そうなの？……王様ってやっぱりよく分からないわ」

王様からしてみれば魔術師の方が分からないと感じるだろうなあ、とセイバーは口に出さずに心の中で呟いた。

それと、王者の気風は確かに愛歌にはない。

王者になるには、愛歌は可憐すぎる。人の心をよく知らない。

飯になったとしても、人々を導き、統べるような王にはなり得ないだろうと、セイバーはそんなことまで考えていた。

そしてそういう思考もすべて、どうせ愛歌には念話で聞かれている。

それと、美沙夜という子どもがこちらを見ているのは、愛歌への対抗意識もあるのではないかとセイバーは思っていた。

これは愛歌に聞かれない部分の心で呟いたことだったが。

それにしてもなあ、とセイバーは頬をかいた。

「何事もなければ、か。……いや、何かあったんじゃないや怖いんだけどさ」

「おや？ 気になりますか、セイバー」

「うん。……説明しにくいんだが、狩りでもさ、もう終わりかなって思うと、一番嫌な予感がする時があるんだ。それでそういうのは大概当たる」

「なるほど。野生の……いえ、戦士の勘ですね。私には備わっていないものですが」

「気にしなくて良いわよ、キャスター。セイバーは感覚の生き物だから」

ひどい言われようだとセイバーは苦笑しつつ、キャスターの拠点も後にしたのだった。

そうして、一人と一騎は最後に洞窟を訪れる。

日は頂点に差し掛かっているが、聖杯が設置されている洞窟の入り口周辺は、生き物の気配があまり感じ取れなかった。

心無しか、周囲の草木も精気が薄い。

「まあ、純粹悪になれと造られたものがいる土地なんだし当たり前か」

「不吉の具現よね。それに生き物を取り込むとなれば、命あるものはわざわざ近寄ったりしないわね」

洞窟の入り口で剣の主従はそんなことを言い合った。

「純粹悪、黙示録の獣。……そんなもの造れると考えると考える人、一体何を考えて生きてたんだろうね」

暗い洞窟の入り口を睨みながら、セイバーは珍しく苦々し気なく口調で言った。

「嫌い？」

「嫌いだよ。純粹なものを求めて、何でこんな厄介なものを残すかなあ。善悪なんて変わるものなのにさ」

救国の英雄が敵国では悪魔や化物扱いされるのは当然なのだから、とセイバーは肩を竦めた。

愛歌はセイバーを見て、くすくすと笑う。

「でもね、その厄介なものが必要ならば、あなたたちは誰一人としてこの地を訪れることは無かったのよ」

「ああそうだった……。そう考えたら、聖杯の恩恵を一番受けたのは私だろうなあ。願いが、叶ったわけなんだから」

「そうね、わたしにとっても——」

言いかけて、愛歌は少し慌てたようにそっぽを向いた。

「何だい？ 気になるんだけれど」

「何でもないわ」

「そうか。ま、私は兄さんと君とに出会えたことはただ嬉しかったよ。……これ、やはり私は聖杯の造り手に感謝しないといけないのかね」

むう、と首を傾げるセイバーは愛歌の顔を見ない。だから彼女がどんな表情をしているか、知ることはなかった。

「悪であれ、と生まれる前から望まれたもの。普通なら、そんな風に生まれる生き物はいないわよね」

「まあ、そうだね。生命そのものに善悪はない。綺麗って訳でも、汚いつて訳でもない。生命はただこの世に生まれて去り、巡り行くだけさ」

「……そういう考え方、冷たくないかしら？寂しいものに聞こえるわ」

「そうだよ。生きることの仕組みそのものに情はないもの」

白髪の剣士は何でもない事のように言った。

あつさりとした言い方は、それが彼女にとつての真実なのだと告げていた。

けれど、流石に言い方がきつuito思つたのかセイバーは頬をかいて続けた。

「でもね。私はそれだけでもないのが、この世界だと思つているよ。私たちには自分以外の生命を慈しむ心だつて、備わっている。そういう人たちは、私には皆愛しいし、眩しいよ」

「……あなたの愛は、随分広いわね。だつてそんな人、この世にはたくさんいるじゃない

「い

愛歌はぼんと足元の小石を蹴った。

小石は跳ねて、洞窟の中に消えて行く。

剣士は主の横顔を見ながら答えた。

「だから良いんじゃないか」

そう言つてセイバーは屈託なく微笑み、愛歌は少し呆れたように口元を緩めた。

そのまま愛歌は数歩洞窟へと進み、黒い入り口の前に立つ。

彼女は天から降る慈雨を受け止めようとするように、両手を差し伸べた。

「……でも、そうであるならこの獣は対極ね。これは生命を脅かすためのもの。この世に地獄を招き寄せ、逆説的に神の愛を示そうとした試みの産物だもの。不完全なまま、互いを補い合つて生きるのが生命だというのなら、この獣は生命たり得ていない」

嗚呼それは、なんて——

「虚しくて、哀しい生なのかしら、ね」

くるりと翠の服の裾を翻して、愛歌は唄うように呟いた。

沙条愛歌の静かな口調の中にあるのは、憐れみだった。黙示録の獣の存在そのものを、彼女はただ憐れんでいた。

振り返つた愛歌は、セイバーを見て眉をひそめる。

「なあに、セイバー。呆気に取られた顔をして」

「そりやするよ」

だつてきみは——とセイバーが言いかけた、正にそのときだつた。

ずしん、と大地が揺れた。

立つていられなくなつて、愛歌がふらつく。

そこに洞窟の入り口から現れた黒いモノが、襲い掛かった。

「マスター！」

一瞬で、鎧へと換装したセイバーが愛歌を抱えて跳ぶ。

ぎりぎりで躲しそこねたセイバーの肩を触手が掠める。彼女は痛みを感じて歯を食

いしばつた。

黒い泥のような物体でできた触手は、直前まで愛歌のいた所を刮る。

愛歌を抱えて木の上に降り立ったセイバーは、泥がこちらを見ていることに気付いて

ぞつとした。

「キャスターの封印は……」

「破られたんだろう。それにしても何だつていきなり！」

「嫌な予感が大当たり、ね」

言つてる場合か、とセイバーは再び襲つて来た触手を躲した。

最初に抉られた肩の痛みは無視し、愛歌を抱えながら走り回って攻撃を避けた。触手は木を次々と切り倒し、執拗に愛歌を狙っているようだった。

大きく跳躍し、距離を取ったセイバーは愛歌を張り出した枝の上に降ろす。

「愛歌、転移で街へ戻るんだ。私はこれをここで止めておくから」

「ひとりで？」

「こいつを何処かへ行かせるわけにはいかないだろ。心配だつて言うのなら、援軍を寄越してほしい。でも今は、きみが離脱するのが先だ」

少し躊躇ってから彼女の肩を軽く叩くと、セイバーは大剣を抜き放つ。

「行け！マスタァー！」

セイバーの背に手を伸ばしかけていた愛歌は、彼女の叫びにその手を下ろした。

服の上から、愛歌は胸元を押さえる。

そこには七枚羽の令呪があった。

「……あんなのに殺されたりしたら、許さないわよ、セイバー」

「それは怖いね。ま、頑張るよ」

ひらひらと手を振って、セイバーは迫って来た触手を斬り飛ばした。

その後ろで、愛歌は姿を消す。

彼女の気配が遠く離れたのを感じ取って、セイバーは少しだけ安堵した。

眼前には獣の卵の一部。気のせいか、洞窟から徐々にこちらへ這い出しているかのようだった。

何故そうなったかセイバーには分からない。

分からないがそれは、彼女にしてみれば大した問題ではなかった。

「己が脅かされれば牙を向く。……それは生命の摂理だものね」

災厄の獣の卵ではあるが、生命には違いない。生きたいと願う本能は持ち合わせているだろう。

危機を感じ取れば、当然生命を守ろうと動く。

これが愛歌を求めめるのも、根源に繋がる規格外を手に入れば生き延びられるとでも思っているのかもしれない。

そして、それが故に——セイバーはこの生を認めることはできない。

「お前はここで殺す。だから恨んでも構わない。それでもあの子の生に、お前の出番は無いんだ」

貴様はこの世に生まれ出ることなく黄泉へ戻れと、セイバーは呟いた。

黒い泥が爆発する。

声泣き叫びを上げているようだと思いつながら、セイバーは泥へと跳躍したのだった。

A c t — 2 2

地下で蠢き続けていた、名も無き獣がいた。

敢えて名前らしきもので呼ぶならば、神の愛を求めた人々が生み出した黙示録の獣。教会の枢機卿の手で造られ、極東の都の地下に封じられ続けていたモノだ。

この世の終わりに生まれ出て、生命を喰らい殺すモノが、その獣のオリジナルである。発端からして狂っている、と目の良い射手なら言っただろう。

哀れな生だ、けれど殺す、と直に対面した白髪 of 剣士は断じた。

獣にはこの世に生まれ出たいという欲求と、満たされない空腹しかない。

地上で息づき、生を謳歌する小さな生命たちを食べてしまえば焼け付くような空腹は収まるのだろうか。

この街に降りた、七つの輝く魂を取り込めばまだ生きられるのだろうか。

あるいは、あの輝きを持つ者を喰らえば良いのだろうか。

ふと感じ取った、一際暗い輝きを放っていた一つの生命。

深淵に繋がっているかのような底知れなさは、安らかな闇のようだった。

それは、獣の僅かな思考能力にも感じ取れた。

あれがあるならば、己はこの世に完全な形で生誕できるのかと獣は感じ取った。

一度目にその輝きを喰らおうとしたときは、七つの魂のうちの幾つかに阻まれた。

それから獣は動きづらくなった。

キヤスターのかけた封印だとは、獣には理解できない。

生命を喰らい尽くしたいと空腹を感じながら、闇の中で蠢くだけだ。

蠢き続け、ふと獣はごく微かにまたあの深淵の気配を感じ取った。

だが、動けない。封印は効いていたからだ。

胎動するうち、獣は感じ取った。

あの深淵が、薄れている。

見たものを飲み込む闇の底知れなさが、淡い光に少しだけ取って代わられつつあったのだ。

そして深淵の魂の持ち主から己へと向けられた感情を、獣は僅かだが感じ取る。

獣の中に人の言葉があつたなら、それを憐れみだと判断し、表現できただろう。

だが獣に、言葉は与えられていない。

故に獣は、絶叫した。

光の無い空間で叫び続け、身体を縛る何かを無理に引き千切る。

叫びは大地を揺らし、獣の末端は地上へと押し寄せた。

だが再び、泥の腕は輝きを放つ魂に阻まれた。阻んだのは剣の英霊にして、第一位のサーヴァント、セイバー。

深淵の魂を主に持つそのサーヴァントは、また主を庇った。

それから彼女は一騎でその場に残り、泥を食い止めることを選択した。

——喰らいたい、邪魔をするな。

泥は矢継ぎ早にセイバーを襲った。

善なる英霊に括られているセイバーは、強力な悪性の泥と極めて相性が悪い。

故に、獣はただ触れるだけでセイバーを呪いに染めることができるし、泥で絡め取ればそれで彼女を喰らうことができる。

セイバーを取り込めば、完全に満たせなくとも、多少は飢えを沈められる。

主がいなくては、空を自在に飛ぶ手段を持たないセイバーは、鼠のように地上を駆け回っていた。

己と比べれば、遙かに小さな身体の英霊を、しかし獣はなかなか捉えられなかった。

セイバーは風を操って上手く直撃を避け、逆に剣を振るって徐々に泥を削る。

大質量で押し潰そうとすれば、剣士は魔力任せの暴風を放出して押し返してきた。

泥が掠めるたびに、靈格の汚染が進んでいるはずなのにセイバーにはその乱れもないように攻め立てた。

かと言つて、セイバーには獣を消し飛ばす力はない。が、少なくとも彼女は単騎で押し留めることには成功していた。

無限には戦い続けられないはずなのに、呪いで傷付けられているはずなのに、英霊は動きを鈍らせない。

けれど実の所は、セイバーには、秘策も秘密もなかった。

ただ愛歌からの大量の魔力供給、それに気合いと根性で持ち堪えているだけだった。それが獣には何より厭わしい。

矮小な英霊は、耐え続けた。

だが、横薙に振るわれた触手の抉った大木が、セイバー目掛けて倒れてくる。

躲すために跳んだセイバーの足首に、泥が巻き付いた。

斬つて捨てるも、次の瞬間には大量の泥がセイバーを吹き飛ばした。

小柄な剣士は耐え切れずに吹き飛んで、大木を何本も巻き込んでへし折り、ようやく止まった。

倒木に手足を挟まれ、セイバーはすぐには動けない。自分目掛けて襲い掛かる泥を、彼女の目が捉えた瞬間。

横から飛来してきた矢と炎の球が、泥を根こそぎ消し飛ばした。

大地に倒れたまま、もがいて自由にした腕で上体を支えてセイバーはそれを見た。

同時に、彼女を押しさえ付けていた倒木は誰かの手であつさり退けられる。

アーチャーは快活に笑つて、セイバーを見下ろした。

「つたく。一人で何やつてんだ、セイバー」

「分かつてるよ。……ちよつと油断しただけだよ」

倒木の下から出て、セイバーはアーチャーに言い返した。

「それだけ減らず口叩けるんなら、大丈夫そうだな。そら、奴さんが来るぞ」

再び迫つて来た泥を避けて、アーチャーは後ろへ、セイバーは前へと跳んだ。

同時に森の暗がりから黒塗りの短刀が投擲され、泥を串刺しにする。

短刀を仕掛けた褐色の肌の少女、アサシンは、小鳥のように軽々と木々の間を跳び

移つて泥を避けた。

よく見れば、銀色に煌めく槍の連撃と炎も見えていた。

「セイバー、大丈夫なのかい？」

続いて降り立って来たのは、バーサーカーである。

ライダーとキャスター以外のサーヴァントは皆、この場に来ている、ということらしい。

ほら、とバーサーカーはセイバーに薬の瓶を渡してきた。

躊躇わず一息に飲み干して、セイバーは口元を拭った。損傷していた手足は、煙を上げてたちまち元へと戻る。

「不味い……」

「……君にとつて安心できるのは、他のマスターはここにはいないことだね。ライダーからは這い出てきた泥を洞窟に押し返せ、と言われているよ」

薬が苦いと子どものように顔をしかめたセイバーにやや呆れ顔になりながら、バーサーカーは言った。

吹き飛ばされたときに落とした剣を拾い、セイバーは頷いた。

「了解したよ。それにしても薬をありがとう、バーサーカー」

「キヤスター謹製の薬さ。礼なら彼と、それをもぎ取ってきた君のマスターに言うべきだね。それとキヤスターは、ここいら一帯を結界で覆っている。暴れても問題はない、ということだよ」

そうか、とセイバーは首肯して、再び泥へと向かつて行った。

泥の触手は、荒れ狂っている。

しかし、アーチャーの矢とランサーのルーン。アサシンの短刀とセイバーの斬撃は、質量を少しづつ押し返した。

泥に触れば彼らとて大なり小なり汚染されるが、この場には五騎が集まっている。一騎が危うくなれば別の一騎が手を貸し、彼らは滑らかに連携を続けた。

それでも、泥はしぶとかった。

汲めども尽きない泉のように、押し寄せる。

「なんて無茶な……」

「あつちだって、生きるのに必死なのさ。きつとね」

戦いの中、自然とアサシンとセイバーは、互いに背中合わせになって、泥を斬り払っていた。

「アレに、そんな思考があるか？」

「あると思うよ。でも愛歌を狙う以上、きみにとっても私にとってもあれは敵だ。だろう？」

「当然。主を狙うものは、容赦しません」

髑髏面で表情を伺わせないながら、アサシンは言い切り、セイバーは笑った。同じ主を戴いて、彼女らは泥に立ち向かい続ける。

永遠のように長く思える時が過ぎ、やがて泥ははつきりと後退し始めた。

それを見計らい、後ろで射撃を続けていたアーチャーは大きく弓を引き絞る。

これまでとは桁違いの魔力が収束され、セイバーたちもその気配を察知した。

振り返ったセイバーの顔が、束ねられた魔力の光で白く照らされる。矢を弓に番えたまま、アーチャーは確かにそれを見て取った。

「——貫け」

矢が弓から放たれるのに合わせて、セイバー、アサシン、ランサーは皆飛び退る。流星のように闇を切って飛んだ矢は、泥に突き刺さり、まだもがいていたそれを大きく抉り取った。

地上を侵食しつつあった泥の大半は後ろへと仰け反り、千切れて飛び散った残滓は悲鳴を上げてのたうち回るかのように大地を揺らして暴れ狂った。

誰の耳にも届かないはずの獣の断末魔を、セイバーはそのとき聞いたように思った。だがそれも一瞬のことだった。

星の瞬き始めた夜空が、一転して太陽そのものの光に満ち溢れたからだ。空中に現れたのは、言葉で言い尽くせないほど絢爛な黄金の船であった。

白い衣を翻し、黄金の装飾品を煌めかせて船の先に立つのは、まさに地上に降臨した太陽のような王者。

フアラオたるオジマンディアスは、王笏を持ち、冷然と地上を眺めた。

「我が威光を持つて焼き払うには、不浄すぎるものであるな。——未だ生まれ得ぬ獣の卵よ、貴様如きにフアラオの威光を示すのは、穢れとなるやもしれぬ」

そこまでを言い、ライダーの瞳はつと地上に向けられた。

夜の闇に覆われた地を踏み締めて、呪いを食い止める六つの魂の光がそこには確かに輝いていた。

「——だがそれでも、勇者たちの戦いは賞賛されるべきものである！彼らの煌めきを称えぬことは有り得ぬ！」

故にこれは焼き滅ぼす、とライダーは王笏を掲げた。

虚空に顕現するは、いつかに東京湾を占拠した壮麗豪華な神殿。

オジマンディアスの持つ、至高の宝具だった。

神殿の砲台へと集まる黄金の魔力の量と質、熱を正確に感じ取り、セイバーの頬を冷や汗が伝った。

威力は確かに申し分ない。

だが、この速さであの神殿から巨大な砲撃が放たれば、巻き込まれてしまうだろう。「撤退！」

最も近くにいたアサシンにそう叫んで、セイバーは一心に駆けた。

背後では高まる魔力と共に、地響きの迫り来る気配がした。

「然とその魂に刻みつけよ、これが王たる者の輝きである！——」
ラムセウム・テンテイルリス
 光輝の大複合神殿！」

唱えられた真名と共に神殿から、黄金の光が放たれる。

光は過たず獣の卵に着弾、爆発した。

「うわ」

「ッ」

爆風に煽られて、最も泥に接近していたセイバーとアサシンの足は地上から離れかけた。

それを誰かの手がしつかりと抑えた。

暖かく乾いたその手が、誰のものは確かめられない。

直後に轟いた耳を聳さんばかりの轟音で、束の間何も分からなくなったのだ。

が、意識が薄れたのは一瞬のことだった。

容赦なく叩き付けてくる灼熱の爆風で肌は焼かれ、純白の光で眼が潰れそうになる。

それでもセイバーは眼を見開いて、太陽の光の中で洞窟が崩落していくのを見た。

光の中、焼かれながら蛇のように身を振る漆黒を、確かに彼女は目に焼き付ける。

この世に生まれることの無かった災厄の獣は、卵のままに燃え尽き、消えて行く。

その終わりを惜しむことはないが、勝ちを称えることもしない。

碎かれ斬られた泥の欠片が、最後の一欠片になって燃え尽きるまで、セイバーは地上に太陽が顕現したかのような猛威から、決して眼を逸らさなかったのだ。

#

太陽の輝きに蹂躪されていた地は、再び夜の帳に覆われていた。
だが静けさとは縁遠い。

地上からは煙が立ち上り、木々は根こそぎ倒されて、地上は無惨にも荒れた地肌を晒していた。

けれど奇跡的に砕けなかった岩の陰、そこにセイバーとアサシンはいた。

束ねていたセイバーの白髪は髪紐が千切れてしまつて、肩の上に落ちていて、しかも先の方が焼け焦げていた。鎧も砕けていて、もう使い物にならない。

アサシンも髑髏面が爆風に持たなかったらしく、少女の顔が顔になつていた。露出している肌の所々に火ぶくれがあり、それが痛々しい。

二騎共に眼は閉じていて、顔には血の気がない。

とはいえ、ラムセウム・テンテリス光輝の大複合神殿の砲撃の間近にいてこれで済むなら、安いものだった。

「セイバー、アサシン、生きてるか？」

「……生きてるよ」

眼が開いて、黒い瞳が眼の前のアーチャーを捉えた。アサシン、セイバー共に身を起こして、立ち上がる。

「状況は？」

「おう、勝つたぞ。ファラオの兄さんの一撃で卵は壊れた。もう復活することもあるまい」

頷いて、セイバーは岩の上にひよいと跳び上がった。

洞窟だった場所には、深いクレーターが口を開けている。凄まじい被害だが、中にいたモノがモノだけに致し方無かった。

それに——喩え直せと言われても、自分たちにもうそんな時間は無いだろう。

「ライダーとランサーは？」

「ライダーは消えたぜ。王が留まる理由はもう無い、とき。ランサーも同じだ。さようなら、だと」

じゃあバーサーカーは、と岩から降りたセイバーは辺りを見渡して、ふとナイフが一本星明かりに照らされて地面に落ちているのを見つけた。

銀色のナイフは、端から輪郭が解けて空気に溶けて行く。程なく刃は完全に無くなり、魔力の粒子も流れていった。

ナイフは、バーサーカーの持ち物だった。持ち主の後を追ったのだろう。

辺りを覆っていた結界の感触が既にないから、きっとキャスターも同じだ。

ここにいる自分たちが最後、ということらしい。

「壊すだけ壊して去るのは気が引けるが、仕方ないな」

アーチャーは頬をかいた。

どうやら、セイバーと大体同じことを考えていたらしい。

「……致し方ありません。主の敵でした故」

ほつりとアサシンが言った。

彼女の艶やかな髪も少しずつではあるが、輪郭が朧になりつつあった。

アーチャーも、それにセイバー自身も徐々にこの世との繋がりが薄れている。

彼らをこの世に引き寄せる依代だった大聖杯は、既に跡形もない。それに彼ら自身、もうこれ以上留まるつもりはなかった。

「アーチャー、エルザにお別れは言ったの？」

「まあな。お前たちに、ありがとうと言っていたぜ」

快活にアーチャーは笑った。

どんな言葉を交わしたかは知らないが、彼にとつて主との別れは満足行くものだったようだ。

「それは、こちらの台詞なんだけど。……もう伝えられないか」

そうだな、とアーチャーはセイバーの肩を軽く叩いた。

その力も、もうほとんど感じられない。肩に置かれた手を、セイバーは軽く握り返した。

「行くのか、兄さん」

「そうだな。だが、お前たちよりちよつとばかり早いだけだ」

手を離れたセイバーと、その隣に佇むアサシンは共に頷く。

「まあ、あれだな。色々あったが、俺はまたお前と会えて良かったぞ、アフタル」

「うん、私もだよ。兄さん」

不思議と、セイバーの頬を涙は流れなかった。

寂しい気持ちもある。でもいつかののように涙が溢れることはない。

今回は、戦いに置いて行かれた訳ではなかったから。

皆それぞれに、やるべきことをやったのだ。同じ場所に立ち、力を振るつた。

その果てがこれならば、別れを寂しく思いはしても惜しむことはない。

「じゃあな、セイバー。何処かで会うならば、また共に戦いたい。それとあんたもな、娘さん」

最後に一度手を振って、アーチャーは消えた。

春のそよ風が吹き抜けるように一瞬のことで、セイバーの眼は天へと運び去られる魔力の光の煌めきを捉えられただけだった。

曇りのない視界で、セイバーはそれを見送る。

最後に見たのが快活な笑顔だったことが、心を温かい湯で満たされていようだった。

「……あ」

小さくアサシンが声を漏らす。

天から地上に視線を戻すと、そこには少女が一人きりで立っていた。

翠のドレスを纏う妖精のような主、沙条愛歌だった。

何かをセイバーが言う前に、愛歌はふわりと彼女たちのすぐ前に現れる。

そのまま、そつとセイバーとアサシンの頭を抱いた。

引つ張られて、二騎は地面に腰を下ろす。

少女たちは静かに、互いの体温を感じた。

「愛歌？ちよつと、どうしたんだい？」

「良いの。なんだか、こうしたくなつただけなのよ」

すつと愛歌は離れて、可憐に微笑んだ。

アサシンは少しだけ名残惜しそうに愛歌の手を握っていた。

「お疲れ様。それと……ありがとうね」

「いいよ。どの道、ここいらの後始末、私たちにはできそうにないから丸投げになるんだし」

「ああ、それは丸ごと教会に押し付けるわ。だって、あの卵を造つたのは教会なんだから。自分たちの不始末は自分たちで肩をつけてもらわないと、ね」

くすくすと愛歌は笑った。

悪戯好きの、無邪気な妖精のようだった。

時々何処か遠い所を、ぞつとするほど冷たい眼で見ていた女の子は、何故だが少しだけ明るくなったようだと思ふ。

この数日で、愛歌は何か変わったのだろうか。

聞いてみたい気もしたが、セイバーはやめておくことにした。

愛歌が何かを得ていたとしても、その答えは愛歌のものだ。これから去って行く人間が無理に聞いて、知ることではない。

ふとセイバーは、自分の手に目を落とした。

輪郭が既に無くなっていた。アサシンも同じように手を見つめ、そつと握り込んでいた。

「セイバー。もう行くの?」

同じことを聞いてくるな、とセイバーは苦笑した。見送る者が去る者に尋ねることは、いつも変わらない。

「うん。ここ数日は楽しかった。……ありがとう、愛歌」

いつか、バーサーカーにも言ったけれど、もしかしたら、愛歌なら聖杯がなくともサーヴァントをこの世に留めて置けるのかもしれない。

それでもそれを頼もうとは思わなかった。

過ぎた力は災いになる。死人が何時までも留まることは正しいことではない。

生命は移ろい流れ去って、再び巡り行くもの。

英霊は、ただそれを手助けするのみだ。

「アサシン、あなたも?」

「……はい、我が主。あなたに会えて、私は多くの暖かさを得られました。……本当に感謝しています」

そう言ったアサシンを、愛歌は優しく抱き締める。愛歌の腕の中で褐色の肌の華奢な少女は、安らかな顔で眼を閉じ——硝子細工が砕けるように消えた。

最後にちらりとセイバーに向けて微笑んだ……ような気もする。確かめることは、できないけれど。

剣の主従は、改めて向き合った。

愛歌の透き通った色の瞳の中に、自分の姿が映っている。

共に戦った誰かと別れることは、セイバーにとつては何度も体験していることだ。

けれど、沙条愛歌にとつては最初になる。或いは、これが最後になるのかもしれない。

そうだったら良いな、とセイバーは夢見た。

「じゃあね、愛歌。本当の本当にお別れだ。……綾香と異によく言ってくれ。あと、出会えたのなら、エルザにはお礼を言っておいてほしいな」

「……そう、分かったわ。……さようなら」

セイバー、と言いかけて愛歌は首を振った。

「さよなら、アフタル。英霊のあなたがわたしを忘れても、わたしはあなたを忘れない

わ

「……そつか。……うん、それじゃ私もきみを覚えておけるように頑張るよ」

さようなら、とセイバーは口を動かす。

けれど、己の声がもう聞こえなかった。

笑顔を浮かべた少女の姿は輪郭を失い、静かに大気へと還る。

この世界に降り立った一つの英霊の魂は、再び巡って行くのだ。

その様子を、沙条愛歌は見届けた。

次の一日を告げる太陽が、ゆっくりと昇ってきて、地上に座る彼女の体を暖めた。

その暖かさを感じながら、愛歌は立ち上がる。

「——さあ、帰りましょうか」

この数日の間、その言葉に答えてくれた声は、もう無い。

家に帰れば、妹にアサシンとセイバーがもう戻らないことを言わなければならない。

彼女たちに懐いていたようだったから、もしかしたら綾香は寂しがるかもしれない。

「でも、妹を泣かせたら駄目なのよね。わたし、お姉ちゃんだもの」

そんなことを呟いて、愛歌は何も無くなった大地を見渡す。

太陽王に戦乙女、学士に魔術師に、暗殺者に射手、そして剣士。

ここには多くの人がいた。戦いがあった。そうして皆、いなくなつた。

それでも、彼らが残していったものがある。

——それらは決して眼には見えない。でも残ったものを抱いて、わたしは家へ帰ろう。

そう呟いて、沙条愛歌は姿を消した。

後には朝日に染められる大地だけが、残ったのだった。

A c t — f i n a l

「聞いているの、お兄ちゃん！」

「……聞いている。分かったよ、ごめんって」

「もう！風邪を引いて寝込んでいたんなら、ちゃんと連絡してくれなきゃ心配するじゃない！」

面目次第もございませぬ、と來野巽は自分のアパートの一室で、目の前で頬を膨らませている妹、來野環に頭を下げた。

彼女はしばらく音信不通になっていた兄を心配して、わざわざ広島から上京して来たのだ。

上京して兄のアパートを訪ねた彼女は、部屋の中で学校に連絡することも忘れてぼうつと過ごしている兄を見つけ出したのである。本人曰く、風邪をこじらせて寝込んでしまい、何となく億劫になって学校に連絡も入れていなかったという。

「しかも、学校に連絡も入れ忘れるなんて、信じられないわ」

まさか聖杯戦争に巻き込まれた上に、気まぐれな女の子に連れ回されていたから連絡ができなかった、とは巽には言えない。

怒りが収まらない妹を前に、巽は弱った。

その怒りが、自分を心配してくれていた感情の裏返しだと分かるから、尚更だ。

「……悪かったよ。でも、もう大丈夫だから」

「本当？無理してない？」

ホントだよ、と巽は両手を広げてみせた。

彼にはもう令呪はない。

優しい友人と一緒に、消え失せてしまったのだ。

環は渋々と言った風に頷く。

「じゃあお兄ちゃん、夕食の買い物に行つて来るわ」

「待てよ、俺も行く」

病み上がりなんだから良いのに、という環に、そんな訳にはいかないから、と返して巽は上着を羽織る。

アパートの扉を潜ると、冬の風が襲いかかって来た。寒そうにマフラーに頬をうずめる妹の頬がすぐに林檍のように赤くなるのを、巽は見ていた。

「まだ寒いね。……それに、知ってる？地震があつて、街外れで大きな崩落があつたつて」

「……ああ。怪我人とかはいなかつたつて聞いたけど」

地震は怖いよね、と眩く妹に、巽は答えにくかつた。

あの戦いは表向きは地震ということで決着が付けられたのだ。

実際の所は、勿論違つたと巽は知っている。

東京の地下に巢食つていたとある化け物と、七人の英霊たちとの戦いの結果、余波で山が一つ吹き飛んだのだ。

英霊たちはおらず、聖杯は砕け散つた。

二度と、東京で聖杯戦争が起こることはないだろう。

聖杯戦争を止めたいという巽の願いは、彼自身の手では無かつたにしろ、叶えられたことになる。

でも巽は少し寂しかった。

バーサーカー、ジキル博士ともう二度と会えないからだ。

せつかく友達になれたのにな、と小さく眩く。

「お兄ちゃん、ぼうつとしてどうしたの？やっぱり、まだ熱があるんじゃない？」

「いや、大丈夫！大丈夫だか——」

ぶんぶんと首を振った巽の視界に、ふと何故だが見覚えのある姿が横切った気がした。

まさか、と巽は辺りを見回した。

「——こんばんは、今日はどうしても寒いわね、巽」

後ろから、そんな声が投げかけられて巽は固まった。

首が嫌な音を立てそうな勢いで巽は振り返る。

数本後ろの黄色い街灯の明かりの輪の中で、白いコートに翠のマフラーを巻いた沙条愛歌が手を振っていた。

「——だからね、わたしはあなたのお兄さんの知り合いなの。数日前に、わたしの家に外国からお客様が来てね。東京を案内してと頼まれたのだけど、わたしにはよく分からなかったのよ」

すらすらと述べる愛歌を、巽は信じられないものを見る眼で見た。

「それで、お兄ちゃんを？」

「ええ、案内役をお願いしたの。以前、学校の……ボランティア活動……だったかしら？
それで知り合ったから、頼んでみたのよ」

「でも、お兄ちゃん風邪を引いたって……」

「それはごめんなさい。寒い中歩き回って、巽の体調が崩れてしまったの。もう国に
帰ってしまったのだけれど、お客様も済まながっていたわ」

すべてが全て嘘ではない。

サーヴァントをお客様と考えたら、まあ、そういう言い方もできなくはないのだ。

ただ、東京を遊び回りがったのは愛歌の方で、あのセイバーやアサシンでは無かつたのだが。

「だからお詫びの品を渡そうと思っていたの。そうしたら、あなたたちが歩いているの
が見えたから、声をかけさせてもらったというわけ」

分かってくれたかしら、と愛歌は小さく首を傾げる。中身はともかく、彼女は見た目は華奢で愛らしい女の子なのだ。

環も納得してしまったらしく、頷いていた。

愛歌が手に下げていた紙袋も受け取ってしまっている。お土産が入っているらしい

が、一体何を入れたのか得体が知れない。

おまけに、愛歌はそのまま二人の買物にまで付いてきた。

その短い間に環と親しげに会話をし始めるものだから、後ろで聞いている巽は気が気ではない。

「沙条、ちよつといいか？」

環が野菜を選びに離れたすきに、巽は話しかける。

賑やかな食料品店内の蛍光灯の下、ひよこ豆の袋を二つ見比べていた愛歌は、振り返った。

「ねえ巽。ひよこ豆のお料理って、わたしの妹みたいな小さな子も好きになるのかしら。それに、どんなお料理にすれば良いのかしら？」

楽しそうに語る彼女は、相変わらず、全く話の脈絡が無かった。

「そんなの、調べれば少しは分かるだろ。……でも、なんてひよこ豆なんだよ」

「アフタルとアーラシユの故郷の料理なのよ。結局忙しくて、アフタルは食べられなかったんだけど」

もう聖杯戦争はないからか、愛歌は彼らを名前で自然に呼んだ。

アフタルはセイバー、アーラシユはアーチャーのことだろう。確か彼らは、血の繋がっていない兄妹だったそうだ。

気さくな風のセイバーのことは、もちろん巽も覚えている。

「バーサーカーは、消えたわ。もちろんセイバーもね。二人ともあなたによろしくって
言っていたわ」

豆の袋を片方籠に入れて、愛歌は何でもないように言った。

戦いの最後、どうなったか巽は知らない。

ただあの夜、戦いに赴くというバーサーカーに、頑張れ、と言って令呪を使った。

多分、あれが最初で最後の胸を張ってマスターらしい行為だったと思っっている。

結果としてバーサーカーは戻らず、けれど東京も無事である。

アーチャーのマスターだったというエルザや、他の魔術師たちからもあれから何も無い。
い。

聖杯戦争の主催者側から何か接触があるかと思っただが、それも無かった。

巽は極自然に、元の日常に戻ることができていたのだ。

「教会や協会には、あなたはなあんにも知らなかった、ただの巻き込まれた被害者だって
説明しておいたわ。あと、わたしが暗示をかけて操っていた事にした。その方が、都合
が良いもの」

確かに魔術のことを知らないのは今も変わりない。

でも本当は、巽は自分の意志で参加していたのだ。そう言うと、愛歌は首を振った。

今度は、珍しい香辛料の棚の方へと移動しながら。

「面倒なのは嫌なの。渋る教会にあちこちを直させるの大変だったんだからね。玲瓏館のおじ様も父さんも、聖杯戦争が不発だったことを、まだ少し引きずっていたし」

お陰で美沙夜ちゃんと知り合えたのは良かったのだけれど、と愛歌はまた分からない名前を呟いた。

とにかく、異が何事も無かったかのように日常へと戻れているのは、この少女のお陰、ということだった。

「ありがとう……。でもそれ、お前には良くないんじゃないか？嘘がばれたら——」

「ううん。選ばれなかった魔術師たちからしてみたら、一般人が自らの意志でサーヴァントと共に聖杯戦争で生き残ったって言う方が、よっぽど認められない現実だもの。だから、疑われやしないわ」

そうなのだろうか。魔術の世界とは、そういうものなのだろうか。

頭を悩ませる異の前で、愛歌は色鮮やかな香辛料の瓶を幾つも手に取って見ては戻っていた。

最後の戦いの夜、少し焦った様子で空間転移でバーサーカーを連れて行った少女。

散々異を怖がらせ、振り回してきた少女だったが彼はあまり嫌いにはなれなかった。

この少女も、自分と同じようにサーヴァントを大切に思っていたとそう感じているからだ。

「エルザは無事に帰ったし、セイワードはまたどこへか行ってしまったわ。セイバーが宝具を上げちゃった伊勢三の所の男の子のことはまた考えなくちゃならないし。……尤もこれからわたし、エルザの所へ行くのだけれど」

愛歌には巽に話の内容を言って聞かせるつもりはないのか、単に口に出して心を整理しているだけのようだった。

この少女らしいといえば、実にらしい。

「ちなみに、どこへ？」

「ドイツよ。少し遠くて、行ってみたことのない場所だけど、でもセイバーからの伝言があるから仕方ないわよね」

にここにこと愛歌は言う。

言葉とは裏腹に、彼女は恐らく楽しんでいた。

次にこの少女に襲来されるだろうアーチャーのマスターに、巽は心の中で手を合わせた。

香辛料を選び終わったのか、愛歌は両手で籠を抱えると、くるりと巽の方を向いた。

「お疲れ様、巽。バーサーカーはあなたがマスターだったことを喜んでいたら。でも、も

う魔術に関わつては駄目よ。お兄ちゃんは、妹を泣かせたらいけないから」

「……分かつてるさ」

それなら良いのよ、と愛歌は巽の横をすり抜けて、気配も遠くなる。

多分彼女は一人でお金を払つて、家へ帰るのだろう。

愛歌がレジでどんな顔をして会計するのか、見てみたい気もしたがやめておくことにする。

戻ろうかと踵を返しかけた巽の前に、買い物袋を持った環の方がやって来た。

兄しかいない場所を見渡し、首を傾げる。

「あれ、お兄ちゃん。愛歌ちゃんは？」

「ああ、家に用事があるから帰るつてさ」

「ええ!? 残念だなあ。ご飯、一緒に食べてみたかったのに」

この短い時間で、どうやってそんなにうちの妹と打ち解けた、と巽は心の中で愛歌に言いたくなつた。

「……あいつにも妹はいるから、その子のところに帰つたと思うぞ」

「そうなの? ……愛歌ちゃんに詳しいのね、お兄ちゃん。ひよつとして——」

「やめろつて、違うから。ホントにそういうのじゃないからな! 沙条はあれですごく変わった奴だぞ!」

ちよつとどころではなく、本気で何を考へているか掴めない奴なんだと力説する異を見て、環はきよとんと眼を見開いた。

「ほんど？とつても可愛い、いい子じゃない」

そこは完全に否定できないんだよなあ、と異は今度こそ頭を抱える。

「……帰ろうか、環」

うん、と大きく頷く妹の買い物袋を取つて、異は店の外へ出た。

冷たい夜気に身震いする。雪でも降つてくるかもしれない。それでも他愛ないことを話しながら、異は進んだ。

妹と話しながら、頭の何処かで異は思う。

何故だろうか。眼に見えるすべてが、愛しかった。

またこつやつて、家族と歩けるのだから。

その後ろ姿を、愛歌は見ていた。

二人の影が角が曲がつて消えるのを見てから、愛歌も彼らに背を向け、別の方向へ歩き出す。

星明かりと街灯に照らされる道を辿つて、彼女もその場からいなくなる。

夜空には星が瞬いていて、家路につく兄妹と小さな少女の姿を、静かに照らしていた。